

上野原市立歴史資料館で開催する「昭和文化の歴史」展

# 箕輪遺跡

上野原市立歴史資料館 / 昭和文化館

1993年3月

大野原市立歴史資料館・昭和文化館

工場用地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査

# 箕輪遺跡

上伊那郡南箕輪村西ノ井中田地区

1993年3月

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

# 序

南宮市川町農業委員会

植木農 村 沢 勝

このたび、南宮市川土地開発公社が、國ノ界の中間地区に工場用地造成工事を行うに当たり、種々の諮詢係合のために要る各種同意書を実施しました。

南宮町から南宮盆地へかけての、支那河支流の水田地帯一帯は、明治時代から現在まで農業を中心とした大農耕地帯で、「實業地帶」と呼ばれています。この実業地帯は昭和20年の伊那土地改良区の設立による大規模な耕作整理事業の後、多くの植物が生じたことから見出されたものですが、南宮地帯での見出はそれほど多くはなく、最近では昭和20年の南宮新築地帯の工事建設に伴う調整、平成元年の植木園地増設に伴う調整、平成2年の二子ノ木地区に伴う調整の3回、小規模ながら調査をしてあります。

今回の中間地区では、実業地帯が約7,000haにも及び、南宮町としては中間的水田地帯の実業地帯となりました。しかも工事の都合で選択地盤調整から半島調整まで、おずからヶ月足らずという短期間で終了させなければならず、たいへん苦心が多かったことを想います。ここに実業地帯としては最も常に当たる中間地区的地理の状況が明らかとなり、植物書が生まれることの大変な喜びであります。

調査担当の本部農林先生には、種々から報告書完成まで一貫して中心となってご尽力いただきました。また、調査に御用となく見を送りてご指導くださいました東京在郷の先生方や調査員の皆さん、それに調査会員にご協力くださいました村内外の多くのの方々に、たいへん感謝になりました。心より感謝申し上げます。

## 例　言

1. 本書は、長野県上伊那郡阿智村字小坂2004番地1番27号に所在する高齢農家の母孫2代の生活である。
2. 調査は高齢農村土地区画整理事業による工事用地の造成にともない阿智村教育委員会が行ったものである。
3. 調査期間は平成4年6月24日から平成4年11月10日までを行い、引き継いで農業の運びや移住者の取扱いを行った。
4. 本書作成における作風は、以下のように分類した。
  - 農耕の経緯・トレーク　本郷秀明、実松　鶴、吉田義典、吉澤千恵  
土屋、高橋謙の夫婦・トレーク　加藤智子　小沢上ね子　吉澤千恵、吉田義典  
水田の経緯・トレーク　小沢上ね子　吉沢千恵　鶴　静子　吉田義典子  
吉澤千恵、吉澤義典
  - 石畳の経緯・トレーク　吉沢千恵子　吉澤千恵
  - 土屋の経緯　本郷秀明、吉澤千恵、吉田義典
  - 動物一覧表　加藤智子、吉沢千恵子　実松　鶴　吉田義典
  - 耕作作法　実松　鶴
  - 耕耘作業　実松　鶴、吉澤千恵
5. 土器の復元は福井洋一氏にお願いした。
6. 本書の執筆は本郷秀明、実松　鶴が行った。
7. 結構図は1：40、1：100、1：200に統一した。
8. 調査対象面積は2：3、1：4を基準にしているが、小面積の場合に1：1、1：2を用いた。
9. 阿智村役場から本書の作成までの間、下記の機関並びに個人の方々に御指導・御協力をいただいた。感謝申し上げる。

○機関　長野県教育委員会文化課、(財)長野県郷土文化財センター  
　　阿智村教育委員会、古墳研究会、信州大学山岳文化財研究所  
　　アルファ出版
10. 本書・図録にあたっての出土遺物及び調査結果は高齢農村教育委員会で保管している。  
　　近く活用されたい。

# 本文目次

序	
著者	
本文目次	
付録目次	
索引	
図版目次	
第1章 地形の立地と背景	1
第1節 地形の位置	1
第2節 自然地理	3
第3節 地理的特徴	3
第2章 地形の経緯	7
第1節 地形の初期	7
第2節 地形の中期	9
第3節 地形の後期	10
調査概要	11
第4節 地形の方法	15
第5節 地形報告の結果	18
第3章 地水理学	29
第1節 土壠地盤表現	29
第2節 地水操作	34
第3節 地水操作と植物・植物	34
第4章 地理と植物	35
第1節 地 球	35
1. 地球地図 1号／2号／3号／4号／5号	35
2. 地内地図 1号／2号	35
3. 乾燥地地図	35
4. 水路地地図	35
5. 土地評定地図	35
6. 地理地図	35

7. 自然実験	29
<b>第Ⅱ部 土 物</b>	<b>31</b>
1. 土器類、土壁、陶器、漆器	31
(1) 古代の遺物	31
(2) 土器質土器(カッタケ)	42
(3) 中世以前の陶器、漆器について	43
(4) 中世以後の陶器漆器	46
2. 石器	70
木杖	70
石器	70
3. 玻璃	88
4. 金銀器	90
5. 植生植物古生物	91
<b>第Ⅲ部 プラントオペール分析結果</b>	<b>91</b>
<b>第Ⅳ部 図 影</b>	<b>111</b>
参考文献	

## 圖 影

## 挿 図 目 次

図1図	地盤の概要	1
図2図	地形・地質区分図	2
図3図	地盤透水性分布図	4
図4図	地盤風化図	5
図5図	トレンチ設置図	6
図6図	グリット設定期	7
図7図	トレンチ設置位置図	10
図8図	Fトレンチ設置位置土状況	10
図9図	トレンチ土壤剖面図 1	21
図10図	トレンチ土壤剖面図 2	23
図11図	地盤透水性分布図	21
図12図	1号・2号透水井	22
図13図	1号・3号透水井	25
図14図	水路設置構造図	26
図15図	3号透水井図	26
図16図	水路設置図 1	27
図17図	水路設置図 2	28
図18図	水路設置図 3	29
図19図	水路設置図 4	30
図20図	水路設置図 5	31
図21図	水路設置図 6	32
図22図	水路設置図 7	33
図23図	水路設置図 8	34
図24図	水路設置図 9	35
図25図	1号透水井地図	36
図26図	1号透水井 1	37
図27図	1号透水井 2	38
図28図	1号透水井 3	39
図29図	2号透水井	40

第20回	自然總說	53
第21回	出土土器與陶器·新石器	60
第22回	出土陶器與陶器·舊石器	61
第23回	出土土器與陶器·新石器	63
第24回	出土土器·陶器與陶器·舊石器	64
第25回	出土陶器·鐵器與鐵器·舊石器	67
第26回	出土陶器與陶器·舊石器	68
第27回	出土陶器與陶器·舊石器	69
第28回	出土木製品與陶器·1	71
第29回	出土木製品與陶器·2	72
第30回	出土木製品與陶器·3	73
第31回	出土木製品與陶器·4	74
第32回	出土木製品與陶器·5	77
第33回	出土木製品與陶器·6	78
第34回	出土木製品與陶器·7	79
第35回	出土木製品與陶器·8	81
第36回	出土木製品與陶器·9	82
第37回	出土木製品與陶器·10	83
第38回	出土木製品與陶器·11	85
第39回	出土木製品與陶器·12	86
第40回	出土木製品與陶器·13	87
第41回	出土木製品與陶器	89
第42回	各種器皿與陶器·1	91
第43回	各種器皿與陶器·2	92
第44回	鐵器和銅器	93

## 表 目 次

図1表 地質地図一覧表	6
図2表 土器・陶器種別表	39
図3表 土器質土器種別表	40
図4表 土器・陶器・磁器一覧表	45
図5表 陶器・磁器種別表	46
図6表 木製品種別一覧表	70
図7表 小器物類表	70
図8表 石器種別一覧表	70
図9表 金具類種別一覧表	70
図10表 出土植物種子一覧表	72

## 図 版 目 次

図版1 地質調査地範囲示図	
図版2 調査地選定・調査地近景	
図版3 トレンチヨー1土壤剖面・トレンチヨー2土壤剖面	
図版4 墓の遺構1号・墓の遺構4号	
図版5 墓の遺構2号・木製状遺構	
図版6 1号柱列1・1号柱列2	
図版7 2号柱列・2号柱列打ち込み状況	
図版8 墓掘遺構1・墓掘遺構2	
図版9 土坑状遺構・土器出土状況	
図版10 地上遺跡1	
図版11 出土木柱2・出土木製品1	
図版12 出土木製品2	
図版13 出土木製品3	
図版14 出土木製品4	
図版15 出土土器・出土土器部・出土内底土器・出土土器底土器	
図版16 出土绳文土器・出土土器底土器1・出土土器底土器2・出土深部器	

- 圖版17 出土陶器1、出土陶器2、出土陶器3
- 圖版18 出土陶器4、出土陶器5、出土陶器6
- 圖版19 出土石器、出土陶罐、出土陶器7、出土陶器8
- 圖版20 出土石器9、出土陶器9
- 圖版21 出土陶器10、出土陶器11、出土植物种子

# 第Ⅰ章 道路の立地と環境

## 第1節 道路の位置

実験道路は長野県上伊那郡市更級村と接する市更級町の又電川左岸、又電川と国道120号線の間にある冲積平地に位置する。又電川は市更級町近から木下町に至る木戸流域、工農地帯はほとんどこの流域に入っている。一般に実験道路と関わっている道路の距離は東西1.2km、南北1.5kmと広範囲なものである。すでに跡ヶ谷の面積が示されている。

道路の大體方向は市更級町に向っており道路の両端部が市更級町に向っている。この辺の流域内には、久原下・高ノ木・北原(市更級町)、新興田・西田・沢田・大瀬木・小瀬木・御宿町・御宿寺・御宿・黒岩(市更級町)等の小字に分かれています。更に地名は跡ヶ谷を数える。

今後の調査地点は、上伊那郡市更級町の市更級町跡ヶ谷ノ井中古地蔵と呼ばれている所に位置している。



第1圖 道路位置図

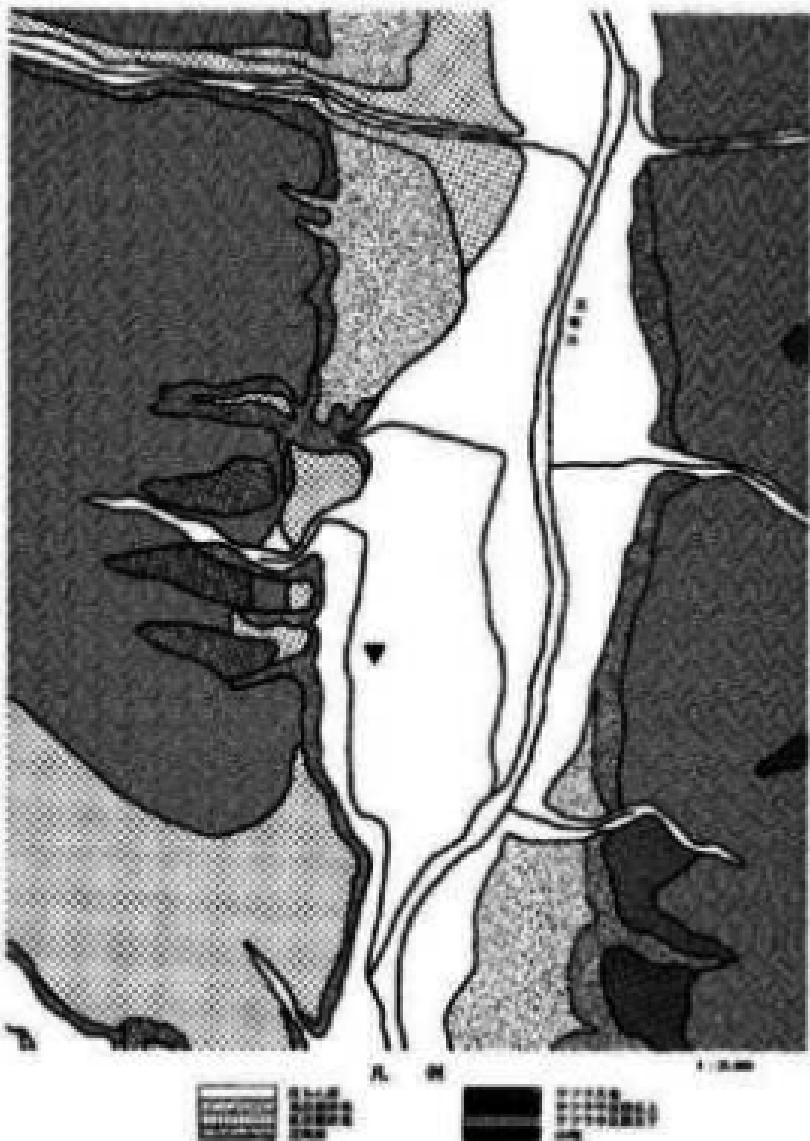


圖 2 圖 1 地質剖面圖

## 第2節 自然環境

南面山村は大竜川上流域にあり、西側の木曾山脈、東側の赤石山脈の間に開けた伊那盆地の東西の谷の端に位置する（東西約3km）。部分の大竜川が河原に形成している。支流域の山脈と大竜川をはじめとする小河川の源流地の広がる村である。木曾山脈北端の尾ヶ岳山麓から大竜川、大竜川の上流（地質学的には「飛騨土木流・南アルプス」）の流域に上りながらもかねて盆地をつくっている。高い段丘面を飛騨原、低い段丘を神子原と呼称している。またこの下に大竜盆地の上層部がおさまって開いている。段丘下には飛騨原や神子原から洪積氷となっていったのが大竜盆地と井原地との間に堆積となって流れおり、本流も其かであります。また、現在でも「飛騨わらび栽培」に利用されている。植栽段丘地から東を流れる大竜川との間は井原地として古くから水田地帯となっている。この井原平野は大竜川の沿岸部で東西から流れれる沢流のため大竜川が大きく蛇行し、輪廓により段丘に大きな曲が流れられ、本調査地（中田）・園ノ井・久保下地区は該曲喰い。

大竜川の西側に奥門道があり奥川と呼ばれ、その西側に平行して植高地があり自然界的な段丘を連ねさせていただろう。植高地の西側に広がる地帯が後背地帯であると思われ、本調査地はこの後背地帯に位置している。

園ノ井・中田地区は、昭和50年から行われた土地改良事業以前、この地は過水地・ぬれ田・沼田・畠田・圃原となっていました。人馬も跋ひ容易があちこちにも点廻し、一帯が大澤地帯であった。また大竜川開削により段丘上が水田化され、段丘下の標水の地も埋めし灌漑化に附をかけていた。土地改良により一帯が半干拓化してきている。

## 第3節 歴史的環境

### 1. 聖母巡禮の歴史

聖母巡禮については複数までに多くの書物が発表されている。特に貴編内閣文庫蔵では地図内の地名調査を執筆行なっており、その成績が発表されている。

大竜川の河原地帯に位置している。本巡礼が世界に認可されるようになつたのは、今から約40年、昭和50年から51年にあたって行われた土地改良事業によって多處の遺跡が出土したことによるものである。惜しくも土地改良事業中ということもあり、貴編調査の調査地にて検出しなかつたが、その就役は聖母巡礼研究会によって実際的に記録され、多くの出土遺物は聖母巡礼の小僧像（法人）・小村守人（法人）によって収集保存されていた。今日、本巡礼の存在は既往の多くを知らなかったが、その記録は大竜川へカーテル江上と考えられ、大竜川・小竜川・菅原・馬場・御宿田・御宿温泉・福安寺・穴川・御宿・菅原田・内屋下等の多くの小字によって区分される。出土遺物は、調査中、



● 植 物	● 土 壤	● 水	● 空 气	● 有 生 力
● 人 類 下	● 植 物 外	● 土 壤 下	● 空 气 上	● 有 生 力 外
● 土 壤	● 植 物 / 土	● 内 部	● 空 气	● 有 生 力 内
● 植 物 外	● 土 壤 外	● 土 壤	● 空 气	● 有 生 力 土 壤 外

圖三四：肉眼觀察示意图

後・複層土壌をはじめ、微生物、上部根、微生物、汎殖層等、中・底生地盤層まで時代の軸がみられる。また、河岸・川下敷・水耕層・島などの地盤層の他、河岸や砂河床に造ると思われる水耕が出土しており、水耕耕作を意味するものと見えよう。更に出土されるのは、大根の施肥から出土した水耕人蔵、高粱、ホホバ、荷車の地盤より多量に出土した糞堆を中心とする微生物、土耕層などで、水耕耕作に關係するであろう微生物の遺構の存在が明らかに予想される。しかし、これらはあくまでも土壤改良工事中に出土した遺物であり、大きな遺構は實に堅しい疑問と問題を抱すとなつた。(実験地跡を著者著ら以上より)

その遺物土壌層は実験地跡土質物質に有効され、遺物の保存及び研究が進んできている。昭和55年西宮250号線の裏側バイパス工事に伴う小堀木・大根木の発掘調査が行われ、土耕層・微生物・水耕層が検出されたが、水耕層と土耕層等が検出せず本遺跡等時代決定は困難であった。

昭和59年度年度の遺物調査の結果から本調査を行う。

昭和57年度は今年に限り第二走水本遺跡調査が行われた。遺物として私が打ち込まれた水耕層に傍行して植栽を述べ、ところどころに石の置かれた道路や水田が方面に想像られていること地図による確認、水の出入り施設が検出されたことを特に目撃される。

昭和58年西宮町西宮台山地帯遺骨墓群に隣接し西中被出地区の調査を行った。実験地の地盤が予想以上に大根木であり遺物、遺物を検すことなく全てを櫛が運びいくつしており土壌の一部から、土壌の構造を確認しようとしたが手渡かりも得られなかつた。

平成2年水下区公用地整備工事に伴う調査(西宮町・大根木)小耕層により遺構、遺物の検出は見えたなかつたが、プラント・オーパールの分野による水耕層の検出はできた。また公共下水道事業者施設整備工事に伴して実験地跡の発掘調査が行われ、本耕層に伴う本耕遺跡の検出と遺構の置かれる以前の実験地の構造する一帯における操作の実態が確認された。

平成4年多道実験施設改良事業に伴う調査が行われた軒内その他の遺物が検出されている。実験地跡においても、廻ノ井、水耕層計測実験施設で工事場跡に伴う調査が(昭和57年の検査報告書参照)、平成元年の給水施設れ瓦、平成3年のニチノク瓦瓦)小耕層ながら行われた。しかし、廻ノ井使用水耕の検出にとどまり、検定した遺構、遺物は認められなかつた。

### 2. 實験地跡との関係

実験地跡には多様な遺構が存在しているが、一番目をされているのは「种子実遺跡」である。即ち古時代遺跡の「种子実遺跡一括」(遺物大丸所指定)を検出させた遺跡である。

既述の如く実験施設は外輪堤上の遺跡であり他の遺跡は全て堤上に位置している。実験地跡は堤上での堤上上の遺跡と遺物を対象ものとに分かれることは明確であろう。

本遺跡の両邊遺跡についてみると、廻ノ井・実験地・廻ノ井・大根木・実験地・内堀・廻ノ井・廻ノ井・廻ノ井外側は実験施設が行われた廻ノ井内堀・古墳時代地盤内堀地盤が検出され

た。実地踏査これも豊岡御室の後醍醐天皇の時代～平安時代の住居跡多数を検出。城外・上人原・御室・山手村・内外堀・丸山古墳(底刀・千野町五)、実地内に入ると櫛原・南畠・北畠・上ノ井・下畠古墳と段丘上に住居跡群が確認されている。実地踏査では北畠外・御室山・櫛原寺下・上山・大原の各遺跡が見られる。

實地内松島の正高を讀(上伊賀郡第一の武方後穴場)の出現。中世(鎌倉平野)になってこの井筒平野(木綿栽培)に藤代行脚の西中城の位置。武州宿主が鶴林山城と赤磐御室が江戸町役場本社に土地の街道もこの長い矢張とかかわりを持つものと考えられる。江戸時代の丸塚・鬼ノ井の開拓資料から見ても段丘上に見てて正高になっている。

以上本遺跡を取り巻く道路を見た時、直線性道路と曲線地を結びつける道路、道路を見る二点はできないが、直線地から見た時、北坂外遺跡の屋内空洞跡がこの生産地に一つの村落を説明しているのではないかと思う。しかし、園芸において人々の生活(農業社会)とその基盤である道路を考えなければならない。その遺跡では実地踏査を絶らずして実地踏査の書を充份することはできないと思う。これから一層の努力を要すると考える。

表1表：実地踏査一覧表

番号	遺跡名	地図	土壠	東						西
				昭和	昭文	昭治	昭和	昭和	昭和	
1	高 峰	高 峰	高 峰	○	○	○	○	○	○	高峰～平山川河床跡
2	北 峰	北 下 高 峰	高 峰		○		○	○	○	
3	高 峰	北 下 高 峰	高 峰	○			○	○		
4	高 峰	北 下 高 峰	高 峰		○		○	○		
5	北 山	北 下 高 峰	高 峰							
6	丸 塚 下	丸 塚 平 壇	平 壇				○			
7	高 峰 ～	高 峰 高 峰	高 峰	○	○					
8	西 正 岩	西 正 岩	平 壇				○			
9	西 岩 ～	西 の 井 高 峰	高 峰	○	○	○	○			
10	西 の 岩	西 の 井 高 峰	高 峰	○	○					
11	西 ～	西 の 井 高 峰	高 峰	○	○	○	○			西の井河床跡
12	西 の 岩	西 の 井 高 峰	高 峰		○					
13	西 岩 ～	西 岩 平 壇	平 壇	○		○				
14	西 岩 ～	西 岩 平 壇	平 壇		○	○				
15	西 岩 ～	西 岩 平 壇	平 壇	○	○	○	○	○	○	西の井河床跡
16	西 岩 ～	西 岩 平 壇	平 壇	○	○	○	○	○	○	
17	西 岩 ～	西 岩 平 壇	平 壇	○	○	○	○	○	○	西の井河床跡
18	西 岩 ～	西 岩 平 壇	平 壇	○	○					

## 第Ⅱ章 調査の経緯

### 第1節 調査の実情

西郷建設社西郷町から西郷町にわたって広がる大庭園を本調査地として、昭和27年から行われた伊那土地改良組合による土地改良事業を軸に語られるようになつた。

西郷町の大半は西郷町地盤であるが、西郷の南端は西郷町地盤になっており、今回の調査以前に2回調査が行われてきてている。しかし、いずれの調査地も原土下は全般が礫及び砂礫の粘土層の互層で透水性は認められず、自然水・水位・風化等の影響が地盤が乾燥したが底下地盤によるものであるので鉛直な調査は行わなかつた。但し、調査地の表面部分については程度低い鉛直透水性を有する地には、詳細な透水調査が必要であるということを知つた。

村役場機能を廃止し町の機能化をはかるための一環として、工場用地の計画を推進し企画部農業課の向上をすすめてきた。これに沿つて土地改良組合は土地内に耕作にもとづき工場用の河岸堤防下、西郷町字中野45番地(150万坪)の面積約20000坪を工場用地に選定し、平成4年8月まで着工に達成することとなつた。これをうけた村役場農業課は耕作予定期が施設の造成でも実施運営の一環であり、当地が後背地といふ地質的条件に應づれ、また前記の調査結果からも調査の必要があると考へ、調査会社・農業技術者委員会文化課と後背地調査を行い、本調査地の確認調査をすることとなつた。

以上の經過の後、調査地を踏査し調査を行つた。



— 1 —

## 第2節 調査の体制

調査実行教育委員会

### 調査団

団長	木原 勝明	長野県文化財保護監査委員
副団長	友松 三郎	西伊那村教育委員会学校監査員
調査機関	飯 篠巳丸	西伊那村郷土博物館監査委員
	赤松 透	西伊那村郷土博物館監査員
	小平 敏夫	西伊那村小学校監査員

調査に参加された方々（順不同）

加藤昭和 白鳥久子 横内豊一 佐久野昌一 加藤智子 鹿沢重子 鹿沢静子  
小沢正子子 加藤千代人 加藤昌子 鹿沢久子 鹿沢静子 山口重子  
猪狩信雄 佐久野豊一 木曾義彦 木曾義徳 木曾義かつ子 鹿沢静子 佐野豊二  
原義尚 明石信司 佐野義一 井戸義之 井戸義雄 鹿沢静子 佐々木恵子  
猪 章 木曾義雄 山田英太郎 香瀬千恵 香瀬義所 小林義利江 小林義守重  
山本義子 久島義雄子 岩内義子 香瀬義雄 大原ひとみ 鹿沢静子 鹿沢義  
香瀬義雄 伊東正樹 伊東民志 鹿島うた子 小川野弘 香瀬和美 関根義  
朝久義明 阿部義平 西野亨 山口昭平 丸山義一 鶴村義人 小林義重  
野瀬義子 長尾千代子 高橋みや子

### 事務局

黒谷義五郎	西伊那村教育委員会教育長（～平成4年10月）
黒谷 義	西伊那村教育委員会教育長（平成4年10月～）
丸山 勝心	西伊那村教育委員会次長
黒谷 義雄	西伊那村教育委員会社会文化部監査員
加藤 義治	西伊那村教育委員会学校教育課監査員
木村 義治	西伊那村教育委員会学校教育課
佐藤義太郎	西伊那村教育委員会社会文化部監査員
鶴山 文男	西伊那村教育委員会社会文化部
小平 義	西伊那村教育委員会社会文化部監査員
山崎 義義	西伊那村教育委員会社会文化部監査員

### 第3節 調査の経過

平成4年4月26日、調査担当に伴う府内協議が開かれ、5月11日の本調査課題に上り試験調査を行う事となった。7日に調査課を発令し、調査課は調査を傾いて今後の調査の進め方を検討した。6月5日から現地作業に入り、22日には本格的な本調査は初めてであったので同じ面積内で行われていた調査町の調査を勉強し、研修を行った。

試験調査は6月25日から7月16日までトレンチ調査を行い調査の有無と広がりを確認した。調査町のトレンチから土器・陶器・木札等の遺物、出土時間・埋蔵用い瓦砾等の遺構も既存物を確認した。アラントオバールの分析においてもそれぞれトレンチの各層から検出され、中田跡式での本調査場の存在が明らかとなった。試験調査を終了し、7月20日に引かれた調査会社・地文化部との事務連絡の結果、研究からみて実際的に調査を行うのは複数であるが比較的土壤構造が良好し土の盛り込みが深く調査区域の中心で工事機械が走行できるであろうと思われる部分について、調査を追うことを中心に調査を行うことになった。だが、最初の試験調査ではまだ層の広がりと遺物の範囲が不明確であったため、8月3日より新たにトレンチを調査区域中央部に本設定し、内4本を配置して以降まで調査を行った。

以上の調査により、調査区域の層の式がさが確認されたので、8月18日の調査用合議でもっとも遺物のみられる区域を中心にして調査を進めて行くことになった。四日より本調査を始めた。調査地は地下水盤が多くポンプを稼動させなければならなかった。機械が走るまでには、雨が降ると調査区域に水があふれトレンチの位置がわからなくなる程だった。

機械が稼げ夏季に入ると定期的急激な水位の変動による地表面の乾燥を防ぐために定期的に水をかけなど、調査を行う前の準備だけでも一苦労であった。

当初の調査の終了予定期予月下旬頃までとなっていたが、調査面積の広さと多くの遺物・遺構の出土により延長する事態が見受けられ、9月9日の基準により10月末まで調査を継続することとなつた。



## ○調査日誌

6月5日 トレンチの設定 (A~G)

19時 トレンチの設置

20時 トレンチC-1・C-2・C-3・D-2の掘削。トレンチC-1より地盤透水、C-2より地盤内出土する。地下水多く、すぐれてトレンチに水がついてしまう。

21時 トレンチA・B-1・C-2・Gの掘削とトレンチC-1の土層剥離、測量を行う。トレンチAとB-2より自走式車と半幅車が出土する。

22時 トレンチC-2の土層剥離と測量を行う。

23時 トレンチC-2から出土した板状の鉄板とC-3の断面測量を行う。

7月1日 トレンチC-3の断面測量の継ぎと、B-3・E-2の掘削作業を行う。

2日 トレンチE-1とFの掘削。E-1からは南北方向にわたる橋板とそれを下から支える柱で柱が2本出土する。Fからは歩道の枕と斜下敷が出土する。これと平行してトレンチD-3の断面測量を行う。

3日 プラントオーパール会社の土層採取のため古墳歴史研究所の職員の方が来る。トレンチFの遺物が出土した地点を指標し、平面図をとる。

4日 トレンチE-2とD-2の断面測量を行う。

5日 トレンチFの断面測量、掘削した部分の平面測量と遺物の取り上げを行う。遺物を積み上げた後、次の場へ搬り下げるとき断面測量の下からトレンチE-1で出土したものと同じ構造が出土する。

6日 トレンチE-1・F・Gの断面測量を行う。

7日 作業員が3人になる。トレンチヨー2の断面測量を継いて行う。

8日 昨夜に就き3人でトレンチA・B-2の断面測量を行う。

9日 のトレンチヨー1・ヨー3の断面測量を行う。午後になって全ての断面測量を終え、片付けと全断面測量に入る。

10日～14日 地質調査を行う。

15日 1日目内のトレンチの名前を設定。

16日 地盤によりトレンチヨー1・ヨー2・ヨー3を掘削する。  
ヨー1より構造と柱が出土する。

17日 トレンチヨー1の断面測量を行う。

18日 トレンチヨー3の土層剥離と断面測量を行う。

19日 昨夜に継いでトレンチヨー2の断面測量を行う。

- 9月 トレンチ 1-3 の土層削除と表面調整を行う。北側より板剣と鏝剣が出土する。
- 10月 トレンチ 1-3 の表面調整を行う。
- 11月 トレンチ 1-3 の土層削除と表面調整を行う。
- 12月 午前中にトレンチ 1-3 の表面調整を終了し、片付けを行う。
- 2000 地盤でトレンチ 1-1 と C-1 をつなげて南北通にする。
- 21日 地盤により消費区域の表土の厚さを起こない、一段上部地盤を行う。
- 22日 昨日に続いて表土はがと上面整備を行う。
- 23日 上面整備を行なう。断続的の発掘、立ち候。上部地盤を確認する。
- 24日 上面整備を行なう。
- 25日 墓穴遺跡の露出と出土した土器器の等高をとる。
- 27日 トレンチ 1-1 の傾斜を深く掘り下げる。東窓間、横窓などが出土する。
- 28日 昨日、掘出した横窓を中心にして作業面を整める。
- 29日 南側の中央部を直線により掘り下げ、上面地盤確認を行う。南北方向にのびる板剣を確認する。
- 31日 機械運搬と板剣、丸井などの手掘削量をする。昨日、直線により掘り下げたトレンチ 1-1 西への機械運搬の広がりを確認する。
- 9月 1日 平面調整の焼きと西側にのびる機械運搬の撤出を行なう。平面調整のためのやぐらの開設準備をする。
- 2日 機械土運搬の平面調整とトレンチ 1-1 の西側を手作業で板剣作業を整める。
- 3日 昨日に続いて板剣作業を整める。
- 4日 板剣方のアリットを設定。平面整備を行う。
- 9月 2日～7日 板剣作業を整める。ヤリタカの設定
- 8日 南側に掘りた横窓確認しそこを中心にして板剣作業を整める。
- これぞ 2 号窓とする。
- 9日 2 号窓の掘出作業を行う。
- 10日 繰りで窓の板剣作業を整める。トレンチ 1-1 の西で板剣を確認する。これぞ 3 号窓とする。
- 11日～14日 窓の板剣作業と板剣の板剣作業を行う。窓の表面に壁の芯にしたと思われる板剣を確認する。
- 15日 2 号窓の表面調整と平行して板剣の平面調整を行う。板剣で板剣を確認する。
- 16日 2 号窓の平面調整と板剣の板剣を行う。
- 17日 1 号窓と 2 号窓の切り合いから東方の板剣確認を確認。平面調整を行う。
- 18日～21日 窓の平面調整と板剣の板剣調整をおこなう。調査が終了した後、平面整備をする。

- 24日 トレンチBの表面部分の表土層操作面を行う。ここでも立坑を複数、トレンチBとI-1の間の中立坑を再び掘り替けたり、表土層が複数に断続に延びているのを確認する。
- 25日 備他に延びる表土層を一削除出し、標子を見る。1号柱内の遺物の取り上げ作業を行う。
- 26日 ベルトを残し、表土層を跡除し、自然地盤の露出を行う。
- 27日 続いて自然地盤の露出を行う。石器・貝殻を確認する。また、1号柱内の測量を行う。
- 28日 自然地盤の平高測量と斜高測量を行う。トレンチI-1面の1号層の遺物の取り上げとその他の柱内の表面剥離作業を行う。
- 29日 自然地盤の測量を続けて終了したのも、表土層部を行う。またトレンチI-1の底を手作面で掘り下げる。
- 30日 1号柱A・自然地盤の測量と遺物の取り上げを行う。1号層の底から1号柱Aの根元と想われる骨骸が出土。表土層部を行う。
- 3月1日 著たに出土した1号柱Aの底面にサブトレンチを入れる。また自然地盤の遺物を取り上げる。トレンチD面の表土層部分の遺物の取り上げを行う。直後にようC-2とD-2層の表土層がを行う。
- 2日 今まで調査したところの遺物を取り上げ4層の底戻りを確認するため直面で2層を削る。
- 3日 トレンチC-2・D-2層をC地区とし、C地区の上面確認を行う。
- 4日 昨日の底のため作面の標準が上がらない。A地区露頭の表土層の底アリゲーションを行う。
- 5日 C地区の露頭部分で柱Aを確認。そこを中心には操作面を認める。
- 6日 表地盤で時間過多を確認する。さもに露頭に用ひ、3層上面まで掘り下げる。A柱ではさらに4層上面まで掘り下げる。
- 7日 昨日の底をとも地区で出土した馬骨の取り上げを行う。
- 8日 A地区露頭部分でサブトレンチをかけた3層上面までいっていいことを確認。直後に上り2層をとる。C地区の底面をとる。
- 9日 昨日に延びて直面が黏く、直面部分ではA柱の表土層露頭につながると思われる層を確認する。
- 10日 A地区の露頭部分を掘り下げる。各露頭上面が直面する。C地区中央で1号柱Aの根元と想われる骨柱を確認する。
- 午後に雨が降り作業は中止。

- 16日 A地区 4層の植物の取り上げと直撫により表面まで削り下げる。  
B地区では1号坑内の焼きと思われる構造とともに1号坑を確認  
トレンチD-2・E-2同士C地区とし、直撫により出土はげをする。
- 17日 1号坑内の焼きの検出と2号坑内の測量をする。C地区第3層の上面確認をし、壁を確認する。
- 18日 昨日に続けて作業をする。C地区で確認した坑の検出を終める。また、東方坑2号坑頭でサブトレンチを入れる。
- 19日 B地区全層の4層を出しにかかる。1号坑内の焼きの検査を行う。C地区西のレキの塗付して1号坑で坑内を確認。壁面作業を行う。
- 20日 B地区西で坑内を確認。坑内作業を終める。C地区的標示遺物の検出
- 21日 昨日確認した坑内はB地区全層にわたっていることが分かり、さらに掘り進める。C地区的坑内とつながると判断する。
- 22日 B地区トレンチ1-2面で土を確認。検出作業を行う。  
B-C地区にかけての坑内の検出を終める。
- 23月26日 A地区的直撫で植物の芽葉、取り上げを行った後も壁を出すため直撫で削り下げる。  
B-C地区にわたる坑内壁の検出を終める。
- 24日 昨日の作業を繰り返す。C地区的標示遺物の検出が終わり、作業を終める。
- 25日 A地区的4層を手作業により出たが、遺物は確認できなか。
- B-C地区の作業を終める。
- 26日 絶対で作業中止とするが、今日中にC地区で直撫が働く。
- 27日 トレンチC-Eの直撫を終りしレキ壁の立ち上がりを確認する。C地区的標示遺物の壁で最初に起きた砂を確認。サブトレンチを入れたところ多量の土砂が出土する。  
直撫の坑内の検出作業を終める。
- 28日 昨日につづいて作業を行う。
- 11月2日 B地区直撫の取り上げを行い、4層を出すため直撫で削る。  
C地区的標示遺物の検出測量と遺物の取り上げを行い、さもなく下へ削り下げる。
- 3日 昨日につづいて作業を行う。出土した遺物の測量と取り上げを行う。
- 4日 B地区東の4層の上面確認を行い標示のものを確認。検出作業を終める。C地区的標示遺物の底から堆積遺物が出土する。
- 5日 壁面の坑内はかかうの書きになつたが、まだ直塗に検出できないからトレンチ1-2の面で標示遺物を検出する。
- 6日-7日 調査地にわたる坑内を検出するため調査坑の調査坑の方々に手伝いに来ていただき

- く。道具で掘削にあたる。また、C地頭東側で掘削した堆積物の年輪をとる。
- 番目 索引測量ための平面撮影を行う。午後になって風が止めたため3時に作業を終了する。
- 番目 ゆき埋れなかった年輪をとる地内の植物と枝の取り上げ作業を行う。
- 午後3時に全ての作業を終了。無理のを行い本調査を全て終了する。

## 第4節 調査の方法

調査は、往復で設定された約100m方に亘りられたグリットを基準に日本のトレンチを設置し、内12本を掘削した。さらに植物の広がりを確認するため中央のトレンチに面するように本のトレンチを設定、内も本を掘削した。トレンチの掘削點、アラントオバール分野のためトレンチの土壤採取を行った。分野の結果、各採取地点の層3層から高い層でアラントオバールが確認された。また立籠などの植物が立籠に多くみられたことから、3層を中心で調査を進めて行くこととなった。

その後、直線により3層までの土をせすり、同じ段落のグリットを次の段落のグリットに切り替し直走方向のラインに調査数字、直走方向のラインにアルファベットをついた。

トレンチA-1・BとC-2をつなげ砂水路とした後、トレンチC-3とD-2を直走に調査区を3つのブロックにみて、直走に北へA・B・C地区として調査を進めた。

調査は水田層上面を直走にとらえる事が困難であることから、範囲を直走に調査を進めた。トレンチC-3調査分については、アラントオバール分野から3層のほかに4層、5層で本調査が行われていた可能性があることから、その調査は3つの層の調査を行った。

電気回路図  
トレンチ回路

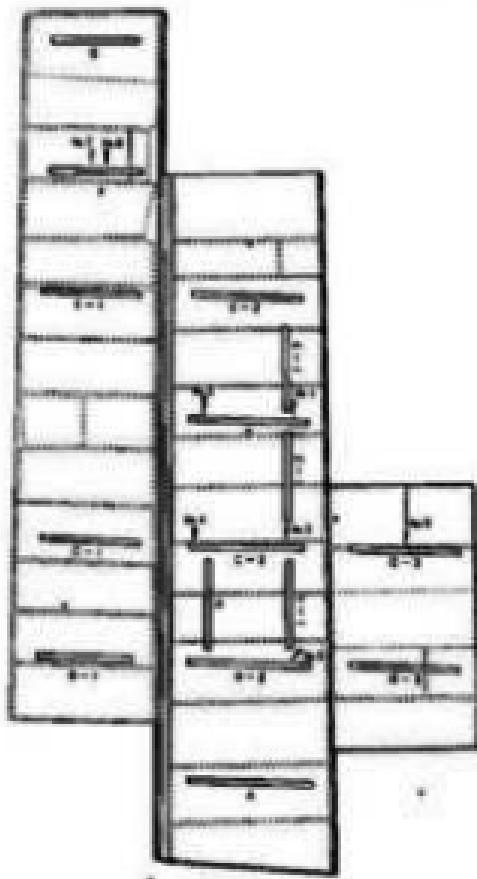
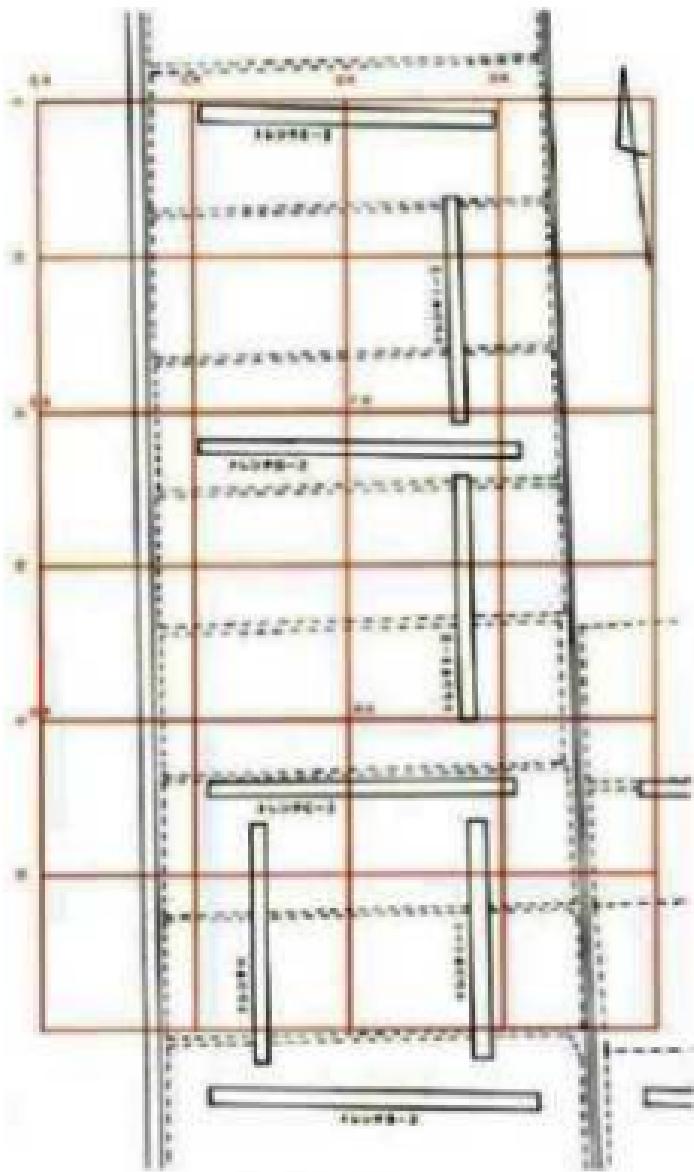


図12 回路トレンチ回路

1138



■ 建物 リビングルーム

1:100

## 第5節 試験調査の結果

調査区を横にわたってトレンチ調査を行った結果、支那川の右岸によりできた堤防の脇も込みが砂礫になっていることが判明した。それが調査区中央から西側の範囲内では4つあり、それが南北方向に伸びていることがみとめられた。

土壌の堆積状態はこの堤防の脇も込み部分が比較的安定しており、耕作による被覆も薄うるより下では明顯にはみられなかった。堤防の脇も込み部分には調査区全般にわたって河床面がみられた。調査区中央より西側では、耕土下は砂礫になっており、このあたりが生物活性以前にあつた自然地盤の一例に入ると推定した。

遺物は、木枕、木製品、土蔵系土器、陶器等などが検出された。遺物は柱列と見られるものまたは、橋脚を像いた堆疊状遺構を確認したが、すべて調査区全般にみられる第3層の黒土層中からであつた。特に下トレンチでは多量の木枕と柱下盤と思われる木製品を検出し、トレンチ底部により調査をおこなった。(図7・8)

試験調査は下トレンチの中央から西側にかけての部分で地表下45cmの第1層の上面である。

柱とんどの木枕が倒れた状態で出土したが、いくつか打ち込まれた枕もみられた。柱脚でつくられた堆疊状遺構があられるが、4層を割り込んでつくられているので遺物の中のと推定する。また、堆疊状遺構の下に南北方向に整がれた構造を抽出した。柱列や柱のもので柱間に施工してある。時代を確定する遺物は、4層中より土蔵系土器の遺物が出土したが、これがこの遺構に組びつくのか確かではないので、柱つきとした遺構の時代確定はできない。

アシント・オーバル分析では、調査区の第3層から4層で、またトレンチC-2東側の遺構の脇も込み部分に残存している柱下盤と柱下盤において水田遺構のある可能性が想かとなつた。

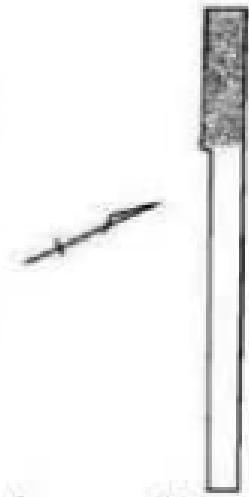


図7図 トレンチ試験調査位置

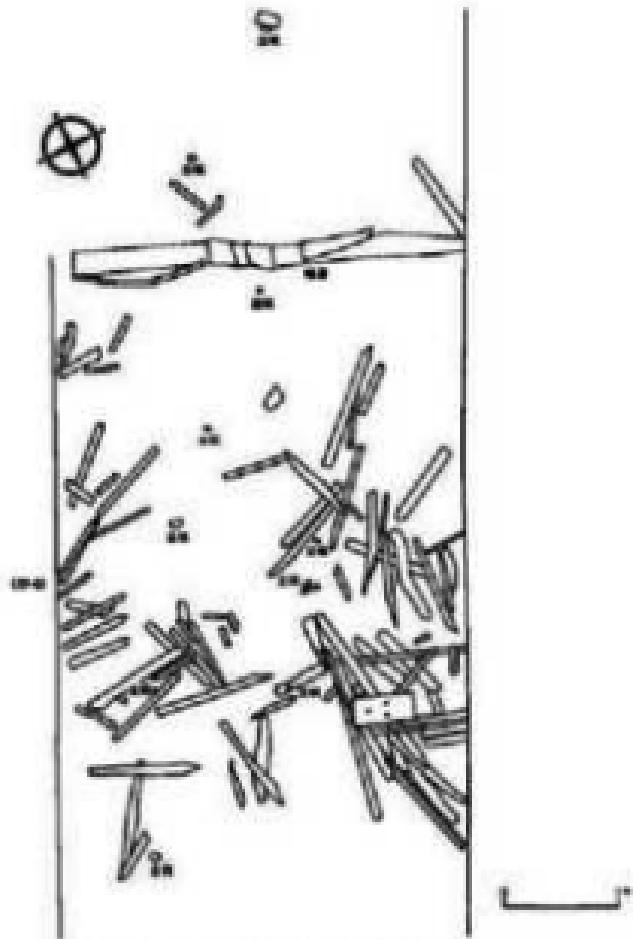


図8 図 F トレンチ排水渠地盤土木工法

## 第三章 基本層位

### 第1節 土壌種類状況

地質調査官として農業地盤会議を担当に日本中のトレンチを設定し、トレンチ調査を行なった。各トレンチの土壤種類状況はトレンチごとに異なり、唯一性は見られなかった。複数平地を形成しているが河川の堆積、海、開拓作業、土地改良の歴史土壌人工的な土壌の整備などにより種類状況が異なってるので、詳しく述べてトレンチの内容を説明する。

#### C-2 トレンチ

トレンチの構成・認めます。1：2、3、4層目に粘土層があり泥炭層となっているが表面には粘土層が見られない。泥炭層までの厚さ20cm位で最も分離された泥炭層を形成した土壤種類説を示している。

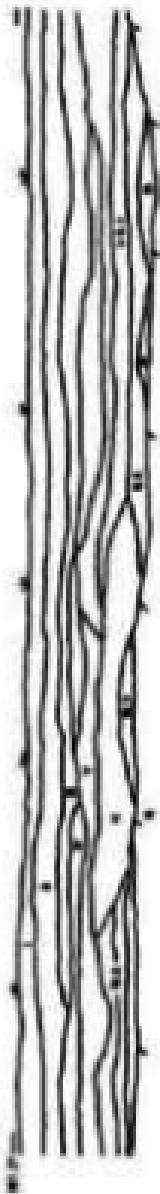
- 1層一暗赤褐色シルト層の粘土層（埋在水田地）15~20cmの厚さである。
- 2層一樹木根を含む暗赤褐色シルト層の粘土層。厚さ20cmの厚さがあり、樹木根を含む中に含んでおり粘性がある。
- 3層一暗赤色シルト層。黒々、薄々もある。厚さ15cm。
- 4層一暗赤褐色シルト層でわずかに細砂を含む。15cm位の厚さで粘性。黒々も細砂を含む。
- 5層一暗赤色の細砂土を多く含んだ暗赤褐色細砂層のシルト層。厚さ15cmで黒々が無い。
- 6層一樹木根を少しあんだ暗赤色シルト層。40cmの厚さを固り粘性。黒々も無い。
- 7層一泥炭層（泥炭層）

#### D-2 トレンチ

東へ向かって地形が傾斜が高くなって行く。西側の地盤上は耕作地を確認している。

- 1層一樹木の水面面で暗赤褐色細砂層のシルト層。厚さ20cm位である。
- 2層一樹木の根分を含む暗赤褐色細砂層のシルト層。黒々、黒々も無い。15cmの厚さ。
- 3層一暗赤色シルト粘土層。厚さ15cm以下は黒々。
- 4層一暗赤色粘土層。黒々、黒々も無い。厚さ7cmを測る。
- 5層一樹木の根分を含む暗赤色シルト層の細砂層。黒々位ある。厚さ5cm。
- 6層一暗赤色シルト層の粘土層。厚さ15cm。黒々、黒々ともに無い。
- 7層一暗赤色シルトがわずかに残る粘土層。厚さ20cm。
- 8層一暗赤褐色粘土層。厚さ7cm。
- 9層一樹木根を含む泥炭層。暗緑5cm。黒々黒々とも無い。
- 10層一樹木根灰化細砂粘土層。厚さ10cm。

1-24-1



1-24-1



1-24-1



1-24-1  
1-24-1

## II層一砂層帶（高層帶）

### Fトレンチ

高層帶までの深さが10m~15mで7分層され、比較的安定した土壤堆積状態を示しているがトレンチの側面と土壌とのうねりのあるトレンチであった。やはり高層帯からて傾くなってする。3層では特徴的水路性、横断による上部遮蔽を確認している。また地下鉄も確認された。

1層一黒灰色土層で現在水路性、厚さ約15cm。シルト層りで軟らかや固めも中程度である。

2層一堅硬性を有する黑色土層、厚さ10cm。土壤改良堆積土か他のトレンチと異なり一層に由来と思われる層がある。

3層一堅硬性シルト層、土壤改良土上面を削り取ったような跡も見られる。厚さ15cm。水路性堆積物の特徴が出土した。堅り、軟らかい。

4層一非水路の層などの腐化物を含む暗褐色の泥炭層約10cmの厚さに堆積、堅りは弱い。

5層一堅硬性堆積層りのシルト層、堅りは弱いが、堅りは上り、10cmの厚さ。

6層一堅硬性堆積層りの粘土層、厚さ10cm位の。堅り層りとも上り。

7層一堅硬性の粘土層、厚さ10cmの厚さ。

## II層一砂層帶（高層帶）

### I-Eトレンチ

北より西へ一のトレンチで地盤層もやはり南へ傾斜している。10m~20mで7分層に堆積している。第3層からの植物の検出されている。

1層一灰褐色堆積層りのシルト層、軟らかの水路性、10cm位の厚さ。

2層一堅硬性を有する黑色堆積層りのシルト層、5cmの厚さ。

3層一小量の非水路の堆積物、堆積物を含む暗褐色シルト層、厚さ20cm位の。

4層一腐植土を含む暗褐色堆積層りの粘土層、15cm位の厚さ。

5層一堅硬土を含む粘土層、10cmの厚さ。

6層一腐植物を少し含んだ暗褐色土層、10cmの厚さ、堅り、堅り上り。

7層一やや中程度の腐植物を含む暗褐色粘土層、1.5cmの厚さ。

8層一小量の泥炭を含む暗褐色シルト層、10cmの厚さ。

9層一堅冰層、多い堅冰層、20cmの堆積。

## II層一砂層帶（高層帶）

### C-Dトレンチ

D-Eトレンチ層に続いたトレンチである。D-Eトレンチと異なり土壤堆積がやや複雑化している。堅りとがれている。高層帶まで3mと層く10m~15mで10分層に堆積しているが他のトレンチより粘土層が厚い、堆積時期的には大きく覆瓦されている。

1層一堅硬の水路性で堆積褐色シルト層り粘土層、15cmの厚さ。

- 1層 - 墓地色シルト層で礫化をもつていい心層、厚さ 10m。
- 2層 - 墓地灰褐色砂質土のシルト層、10mの厚さ。
- 3層 - 墓地灰褐色砂質土のシルト層、10mの厚さ。
- 4層 - 墓地灰褐色シルト層、厚さ 10m。
- 5層 - 墓地灰褐色砂質土のシルト層 7cm の厚さ。
- 6層 - 墓地灰褐色砂質土のシルト層 10cm 厚さ。
- 7層 - 墓地色シルト層、10mの厚さ。
- 8層 - 砂質層、厚さ 10m。
- 9層 - 砂質層の墓地灰褐色粘土層、厚さ 10m。
- 10層 - 墓地灰褐色粘土層 5cm の厚さ。
- 11層 - 砂質層

地盤調査手帳

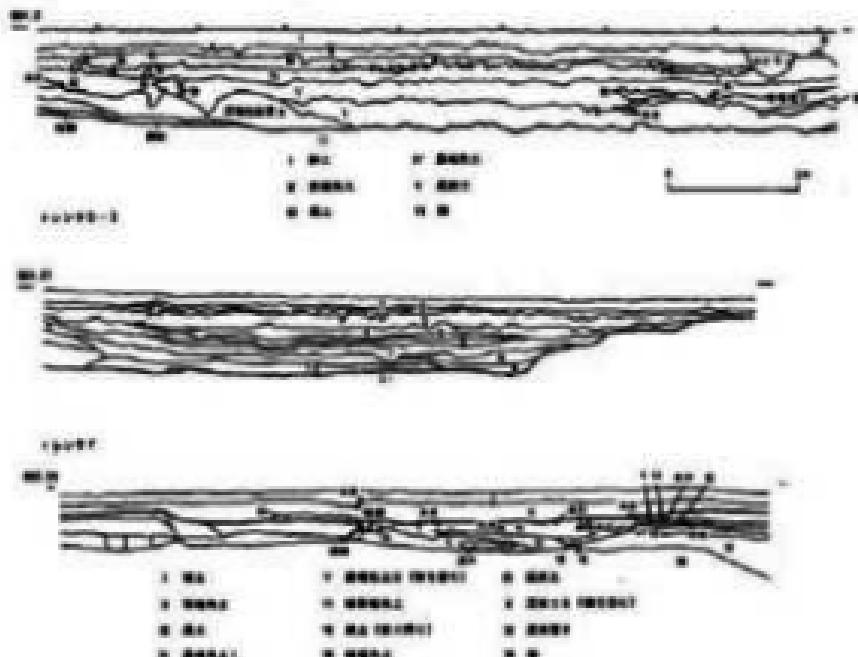


図102 トレンチ土壤剖面図2

## 第2節 基本層序

調査地に全場を対象にトレンチ調査（トレンチ18本）を行なった結果、各トレンチに同一層ないか、トレンチC-2を基準として基本層序を確認した。

このうち断面Eはこの断面の外側北端を形成する高層の河岸段階であるこの層の表面は一帯砂の部分が見られるが多くの砂である。第3層は粘土層、第4層は粘質風化土層である。第5層は腐植土に泥炭状が進じている層、第4層は泥炭土層と風化土層、第2層部分を含んだ風化土、第1層は土であり耕土である。第1層及び第2層はこの地盤に亘り土壌改良地の位置、耕土による土壤の人工的な影響が目につく、第3層以下が一切自然堆積状態と考えられる。

## 第3節 基本層序と遺構、遺物

以上の基本層序によって断面が打ち出され、その着作からも遺構、遺物が多量検出された。主に層中より出土した遺物について見ると第1層及び第2層からの遺物はほとんど検出されていない。これは土壌改良地以降のためだと考えられる。第3層からは古代から近代までの遺物が集中して多量検出された。現代の鋸・馬具・籠等や古墳の遺跡が上層部から、下層部からは中世東夷遺跡の陶器、丸州豪族の陶器、土師質土器、古代土器等、鐵器類、木製品のみ、下下部が検出されている。これらの遺物は検出層が断面断面を跨わたるのではないかと思われるが、それとも年代製作されていたことから複数されているものと考えるべきであり、第1層及び第2層からの流入とも考えられる。第4層からは土器類、第5層からは陶土器が少量ではあるが検出されている。

遺構は第3層に集中して検出された。通過して打ち込まれた水路跡、礎石を伴う水路跡、点滅と打ち込まれた水路跡、流れ水を伴う上どみくぼは、第4層からは礎石を伴う水路跡、第7号土器上（第4層）の堆疊地、阿川塙が検出されている。これらの遺構には押出しした遺物が付随している。

以上の点から各層を見た時、それぞれの時代は歴史的上位に考えられる。第5層は平安時代、第4層は古墳時代平安、第3層と粘土層を切っている阿川塙は平安時代か鎌倉時代以前、第2層は鎌倉時代以前と各層の遺物の上から考えることができる。

## 第Ⅳ章 造構と造物

### 第1節 造 構

#### 1. 開拓遺構

##### ○1号遺構

開拓地北区の表面に位置する遺構で、トレンチNo.1を掘削した際一帯がお表しているがアラット・ド・モードー川東方にかけての地点で東西方向に向かう開拓遺構と変わると思われる。遺構であると想はれるあたり、リーフラーE方向に延びるが、E面上面までの土壌を直接削った跡を削り取ってし生いその跡をつかむことはできなかった。頂1層は耕土であり、土地改良時の耕土と考えられることから、この遺構は3層に押す近代のものと思われる。

開拓地全体にわたってつながってはおらず、途中で盛が上がって残されている。

西面・C面においてもE面でA面の開拓遺構と向くE・西壁などをそのまま遺用いたため形状がいい。主要の土壌耕土とする場が東西方向に延びている。また未成しかみられない開拓遺構からは19世紀後半から20世紀にかけての標識の破片が出土している。ことから、つながりは複数でなかったものの土壌の埋蔵状況、構造、遺物、遺構の方向性などから同じ遺構とみなした。A面の西方向よりのE面との各面地點は同じ位置も込んでおり中からE・西壁を用いた未成と土地改良地に入ったと思われる事例の遺跡が出土した。面の一側の縁には同じ未成が打ち込まれているので、一時は本體として機能していたと思われるが、西口面での本體遺構が付近に残らぬれいため、消滅なことは確かでない。構造、遺物などをみてこの遺跡は近代のものとみて間違いないと思われる。(図1)

##### ○2号遺構

開拓地より検出した遺構で、リーフラーE面を含む1号構と並んでいる。(図2)

1号構との接する古い部分は1号構の遺跡の存在本体が2号構に対して進行していることから、1号構より古いものである。

4層上面から露出したもので既に打ち込み既成の壁であるが、平均1mの標高を最近間に動き切っている。この標高は既成壁の表面の標高に比べて同一方向に突出しているので、既存ではなく他の芯として入れられたものであろう。遺跡の西側壁は壁で人為的に手を入れた様子はない。面の中からは遺物は特に検出されなかった。遺跡の壁の位置同レベルで遺跡のすぐ隣から直木垣が出土しているが、上層からの流入も考えられる。遺物が少なく時代の遺跡は遺跡である。面の方向から水路開拓地からの引きと思われるが、水路が遺跡のようを意識した

他の打ち込みはない。3号層の下層である4層が最も上の強い粘土層なのでそれほど杭を打ち込む必要がなかったと推定される。トレントロードを走しており、その西側分にも他の打ち込みが見られるものも既述により判明としないが、2号層は水路改修側の方へ傾いており、道路の西がすぐ海面になっていることから、水路改修側につながる可能性が高い。

#### ○3号層

調査記述文部で提出した遺物で1号～4号を示している。調査記述文部からものびてきて西にむかって緩やかにカーブをしている。トレントロードにより欠損しそれより東からは露出できなかった。杭はなく深い層であるが、底から少量の土器片の確認が出土した。(図2-2)

層厚であると想う層にあたり、上面は常に埋められていた。ほかの時代の遺物が混入していることから、この遺物は古流跡に付随つけられよう。

#### ○4号層

調査記述文部で提出した。層厚は第4層であり、1号～4号を示している。遺物中大層より最初の砂生土器の破片を確認した。3号層と同じく深い層である。板厚の確認は見られない。砂生土器片(図2-3)の他に遺物はなく、混入して来たことも考えられる為、時代は不明としない。

#### ○5号層

1号層の北側で1号層と平行している遺物である。トレント1～3により遺物の北側分を欠いている。この遺物の上面は常に埋められていた。1号層と平行して南へのびているが北側に1号層に接続されていく。底から円筒の水製品(図4-4)が出土したが、時代を確定する遺物はない。

### 2. 横向遺物

#### ○1号柱列

調査記述文部から提出した。トレントC-2とE-1により2ヶ月間欠断しているが、横筋方面、櫛状、方内性などからみて同一の遺物と判断する。3号層に分かれているので底から1・2・3とすると、この遺物は第3層から提出し、横筋と並により確認されている。

1号～1(図2-4)は3～4号～Eを示し、4種の横筋と底からなっている。横筋は完全に削れた形態で出土した。柱列は横筋に沿って、斜めに打ち込まれている。杭は横筋の下で壁に対し直角あるいは斜面を走り、壁の沈み込みを防ぎえていたものと考えられる。この遺物の横

から内蔵土器が出土している。

1号一帯は同じく横腹と横よりよくなっている。(図27) 1号一帯を示している。

1号北側すると横腹の幅が狭く他の打ち込まれている箇所が若干広い。西側で最も横腹の幅が2~3cmで方向に凸出したが、これがこの遺構に含まれていたのかは、はっきりとしない。やはりここも横腹に対して杭が廻行、あるいは設置している。時代を確定する遺物は見られないが、4層下より放工頭が出土している。これが繩文時代のか判別としない。

1号一帯はこの遺構のなかで一番左に位置して1号一帯にのける横腹と1号一帯にのげる横腹から構成されている。(図28) 1号の横腹も1~2cmの間で横に沿って杭が廻行、あるいは設置するよう打ち込まれている。また立柱だけの範囲が1号一帯に伸びている。1号一帯にのげる横腹の方向性は1・2とほぼ同じであるが、1号一帯を示す横腹の左には、両端の遺構は見られない。また、1・2で示す横腹が一枚であるのにに対し、この部分は3枚の横腹が同じ様子で並んで平行している。横の傾きと同じ様に杭が横に廻行する様にうちこまれている。横腹を持かない範囲もこれとほぼ同じ方向性の伸びていることから、この部分は複数が行われていたことが考えられる。打ち込まれている杭は長いものと短いものが混在しており、この部分が一帯究みころの感じいところであったことがうかがわれる。

遺構は12世紀後葉の土器群が出土している上層からの組みの可能性があるでの明確な時代は判別としないが、少なくとも平安時代を経ることはないと思われる。

## ○ 2号範囲

1号範囲の西側上を標出した。標示は断き縫であり1号一帯を示している。(図29) 打ち込まれている杭は平均して30~35cmほどのかなり短いものであり、先端部もそれほど鋭利に加工しておらず、中に起毛痕跡の加工があらわれないものもある。現代における遺物標識に上層の標が実施していることが考えられるが、この遺構には既に打ち込まれて長さ2m、幅10cmに加工された細い横腹の跡を多くが見られており、それをみると横に上からもの留めで杭の標が実施していくと想しても、この遺構の杭は始めから地にみられる杭より比較的短くつくられていたことが予想される。この杭の打ち込まれた跡とんどが横腹に対して遺構に打ち込まれており、部分的に遺構に打ち込まれている杭が見られる。この遺構もトレシナC-2により一帯を標しているが、表面では當時の高まりは遺構です。また附近にも遺構の横腹時軟の高まりの内傾角も見られないのです。この遺構がどのような機能を持っていたのかは判別としない。遺物は繩文時代より17世紀から18世紀後半にかけての本陶・陶器・瓦・漆器など、また次の下層になる第4層の陶器や陶質土器より古横腹のものと思われる遺物石器が出土している。遺物以外のものは上層からの組みの可能性があるが、横の上下関係からみて近寄る事はないと思われる。

### 3. 横造土壁面

西造地盤の表面で検出した。何本かの杭が打ち込まれているが、規則性や方向性は既の例と同様であるため特異としない。箇所は13世紀から14世紀の土壁面の破片がまとまって出土している。また、本井が多くちらばって掘り立っている。順序は擾乱が多かった為、はっきりしないが3層のものと思われる。時代は初期としない。(図10)

### 4. 水路壁面

西造地盤の表面で検出した。南北約40mにわたり最もその他の杭が打ち込まれている箇所である。(図11、12~22) 箇所は3層であり主として瓦を用いている。他の打ち込み実況にも繋がる箇所と他の箇所があり、また削り材を用いたものと丸削り用いた工具の杭が混在する。削り材の杭が最も多く用いられており、これも既述的鋭いものと、一端が変化しているものの二つがある。丸削り杭は既に既に直立して打ち込まれているがほとんどが水路の外側に集中している。また、外側に多い丸削りには水路に平行するかたちで沿岸がされている所もある。

北側部分は恐らく、西造地盤外の壁面でも内に逆内に掘りていると思われる。西側と比較すると杭の打ち込まれた箇所は複数である。この箇所を抽出する際、近隣部分で部分的にかなり複数箇所に認められ、西側では浮遊地土に埋められていたことから人為的に埋められたものと思われる。この箇所は西側からの流れがみられ、一時的に水が滞っていたのではなく、かなりの間その流れを止めながらさしかかれていたことが前の箇所と並により推測される。少なくとも3箇所の流れが重なっており、その間に杭を打ち込んで修理していた箇所である。杭州は3箇所に大別できる。壁に位置する2箇所の杭州は打ち込んである内側も外側の剥離など不規則である。またこの杭州は最終的に既の一端が変化している。この杭州がこの箇所の中で最も古いものと思われる。この杭州は既にのがらがらに剥離する杭州に埋められ、それより先に同一の杭は見られない。

この杭州の変遷に沿って述べておきたいのが2つ目の杭州である。すべてサクラの削り材によつくりもれた杭で、その形状と加工にある程度の規則性が見られる。この杭州は3つの杭州中、最も多く杭がうもこまれておらず、西側部の一端では剥離のない箇所に打ち込まれている。この杭州に対応する外側の杭州はそれがどうにか打ち込まれていない。東方とも水路の中心から東にかけて斜めに打ち込まれている。既に上どみ底の底が深く打ち込んでいる箇所ではそれが剥離にあらわれている。杭を意識的に斜めに打ち込むことにより水路の構造物を保護していると思われる。杭を斜めに打ち込むという工法は、既に示された西側部の箇所でも確認されており、確実にあわせた杭の打ち込み方法の1種とみることができます。(図14~17) この杭州に対応する西側部の箇所には、幾つかの杭が打ち込まれているが、その流れにようその大部分が剥離している。このことから、共通性の見られる削り材の杭が使用され始めたから、杭州に移行する時

にも表面の変化と何回かの修理が行われていることが見えられる。

丸底は水面の外側部分に多く見られ、丸底からなる板の端は他の板と接觸すると最も高い。表面の内は丸太による横木があり、左側と右側にみられるが中央部ではない。裏面の内には横木は見えないが、割り板の端に丸底が打ち込まれているものが見られる。調査区での丸板を弾き退避は1号物があるが、この退避は近世のもと思われる所以この丸底による板もそれに追従できよう。船体については骨牌式・瓦屋敷板の表面・その他脚踏板・箆舟通定など等々ものが出土し、造船の時代確定は非常に困難であるが、中世を経ることはないと思われる。

この水路的退避は弾き板から丸底への変遷、通定の横木方面など、今後の課題となる部分を多く含んだ退避であるといえよう。

#### 6. 土蔵板退避

本層の着板は底面分の方に位置している退避である。ヨーローブを示し、水路的退避と共にその説明があると思われるが、水路的退避とのつながりは明白としない。

調査対象外部分のところで、水路的退避と交わっていると思われる、組み立て板の断面になっており、その直前に通定の中身にひびかって板が間にならんでいる。打ち込まれた板も見られるが、板にならぬ板が全く何も込まれていない。柱脚板板が丸底したものとしてみると板の先が傾斜的にほとんど同一方向に向いていたため、人為的なものと推測される。この退避の時代、水路製作における施設としての機能などは明白としないが丸底を保わないことから、水路的退避での弾き板が弾きられたのと同時期に退避していたものと思われる。

#### 7. 番板退避

調査対象では、3種類4本の番板退避を確認した。4本のうち3本はヨーローブも土蔵板と並時に退避したと思われる退避を使って作られており調査区の板が残る最遠まで残されていた箇所の底面につながっていることから土蔵板と番板はつくられたものである可能性が極めて高い。調査区北側で検出した1号物の底から剥離した番板退避のみが土蔵板と並んでつくられたものと思われる。小板をひいて上に小板を積みた簡単なつくりであり、ヨーローブを示すが、番板の底が手で握りられる。一例だけである。番板退避の下からの構造であるため、番板承板、番板などが確認できず、番板退避以外のものであることは確かであるが、その他のことは不明である。

#### 7. 直接退避

調査区東より検出した。G2000-1番手は直4型で、ヨーローブを示す。退避の上面は丸底に覆われていたので漆器に露出することができた。直角の直角は途中までかなりの高さに残る

れているが、下段にいくに従い層が黄土と砂地になる。表面に向かうにつれ層は緩くカーブをし砂地以外に入る。道端や台頭のレキから出る(図50)。道端下部の砂地のところからは、砂中の自然風化と砂舟とおもわれるものが出土した。(図51) 黄土土が堆積していることから、底層は大堀川の氾濫によるものと思われるが一過性のものではなく、水位の範囲は不明であるが一定の期間は水が流れていたものと想定される。道端を越出した範囲内では水の取り入れのしき跡跡が見れないことから、水位変動との直接関係はないと思われる。トレンチC-2を開いた北側では、この道端の傾きは強調しなかった。南北間に作うことから他の砂地とのおおよその位置関係は推測できるものの時代区分は明瞭としない。

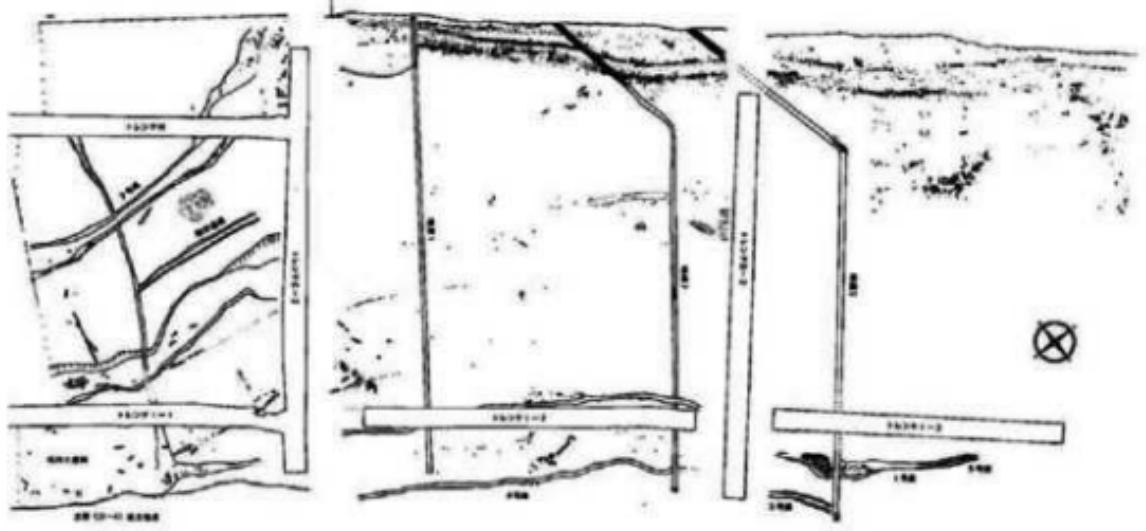


圖 1-14 稀土礦物分佈圖



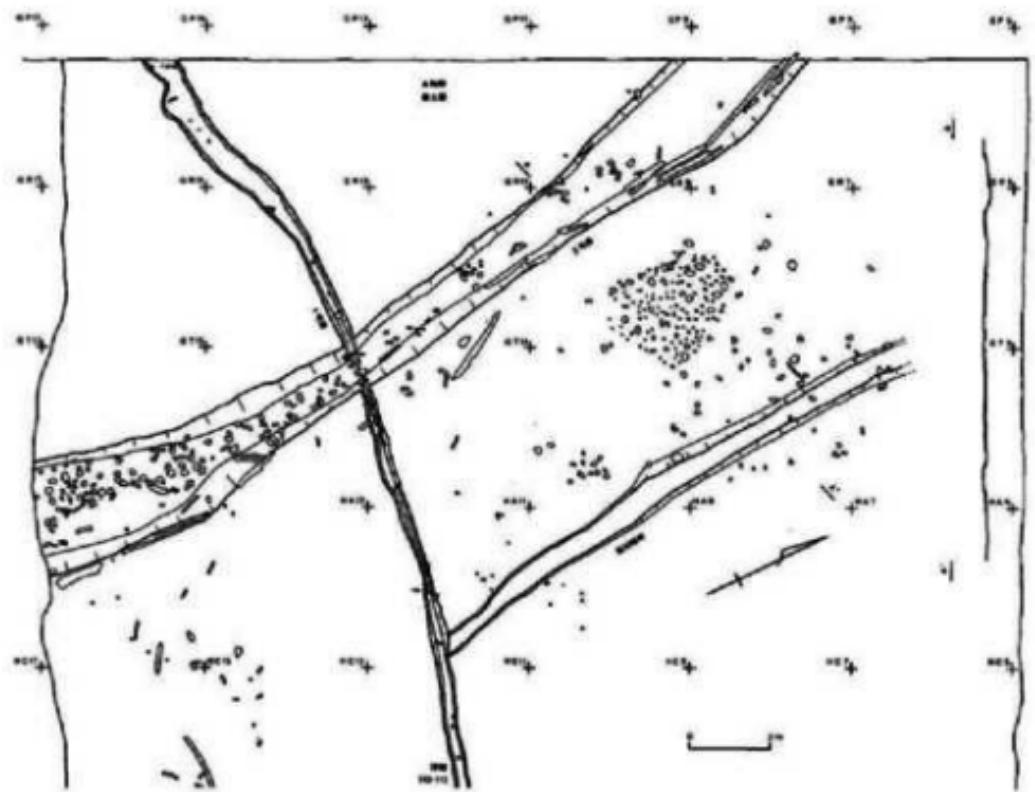
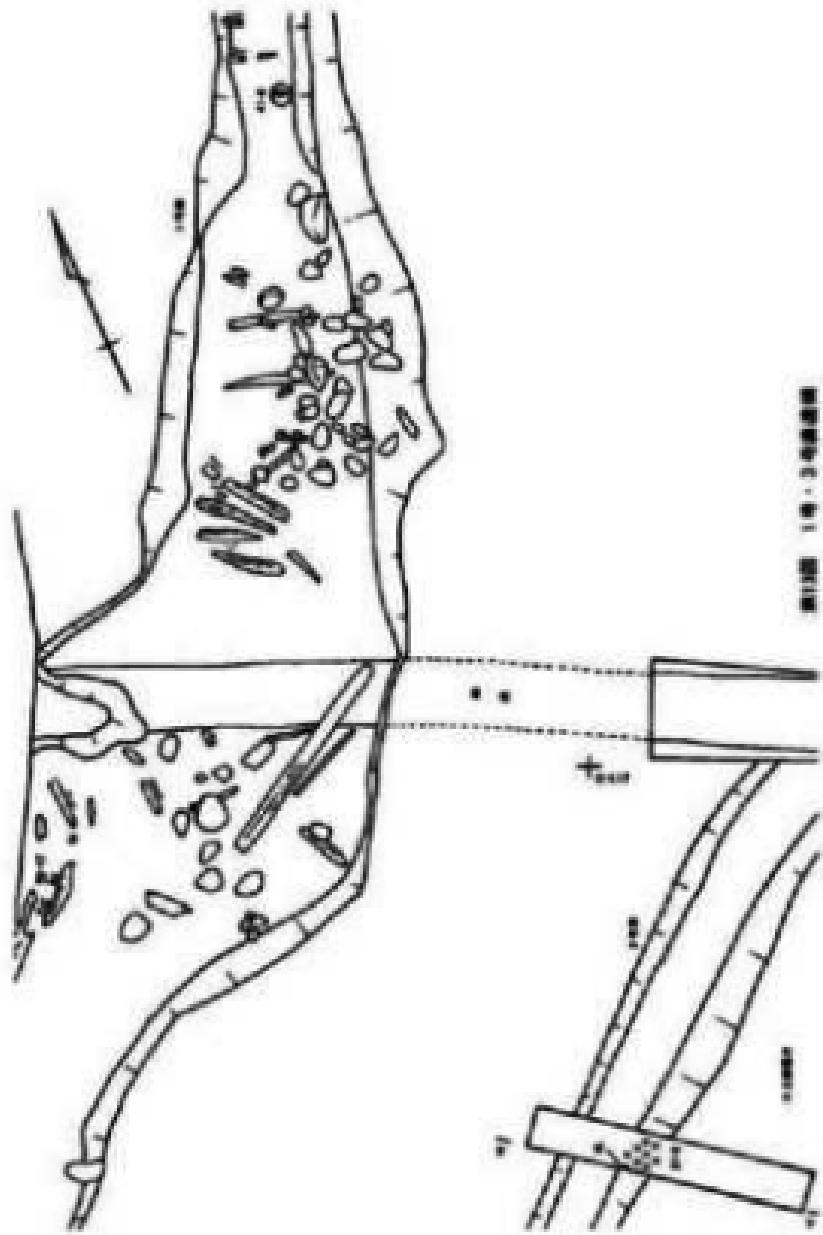
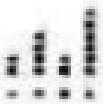
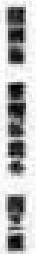


图123 1号·2号断面图







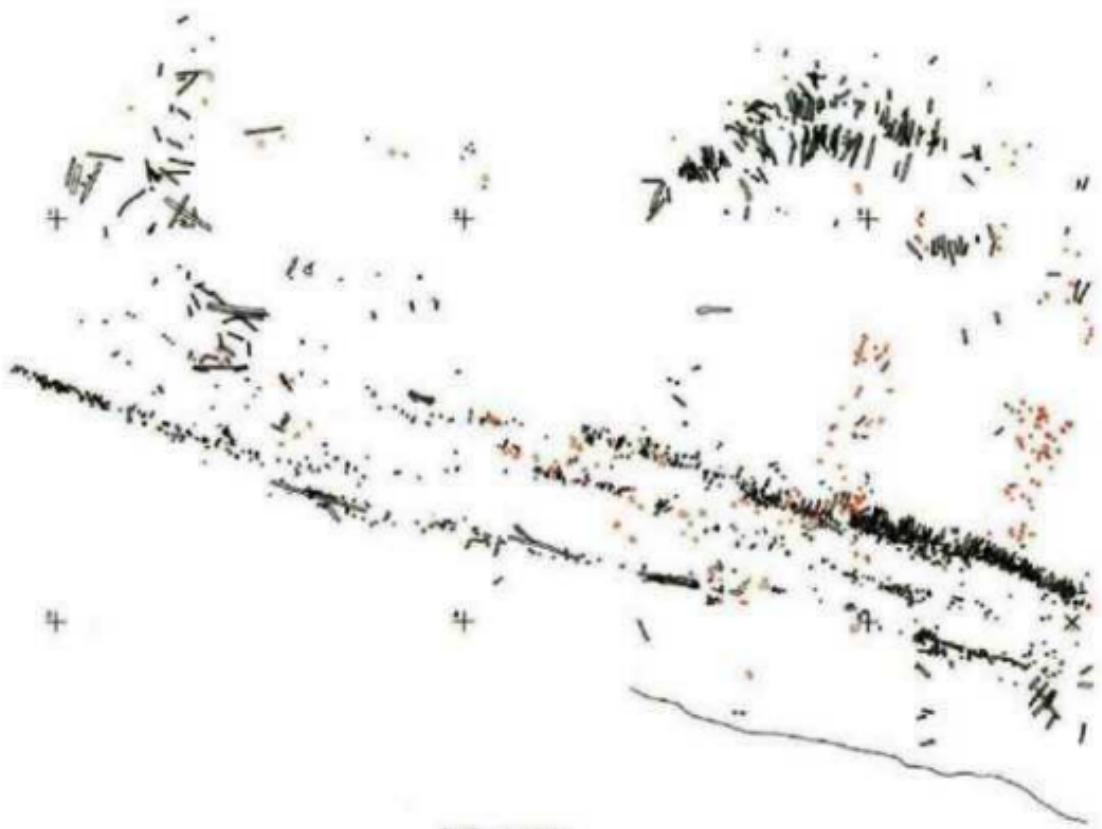


图102 小西沟组



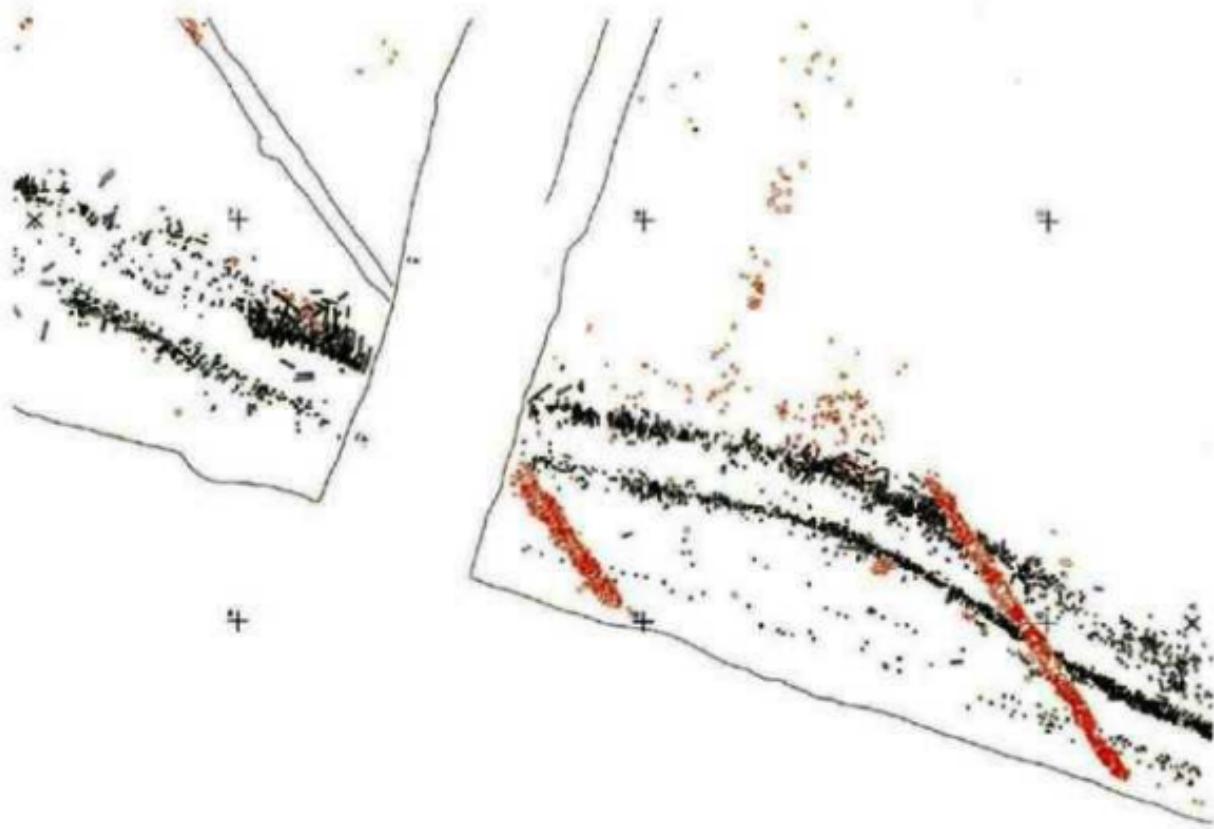


圖17四 水路與道路



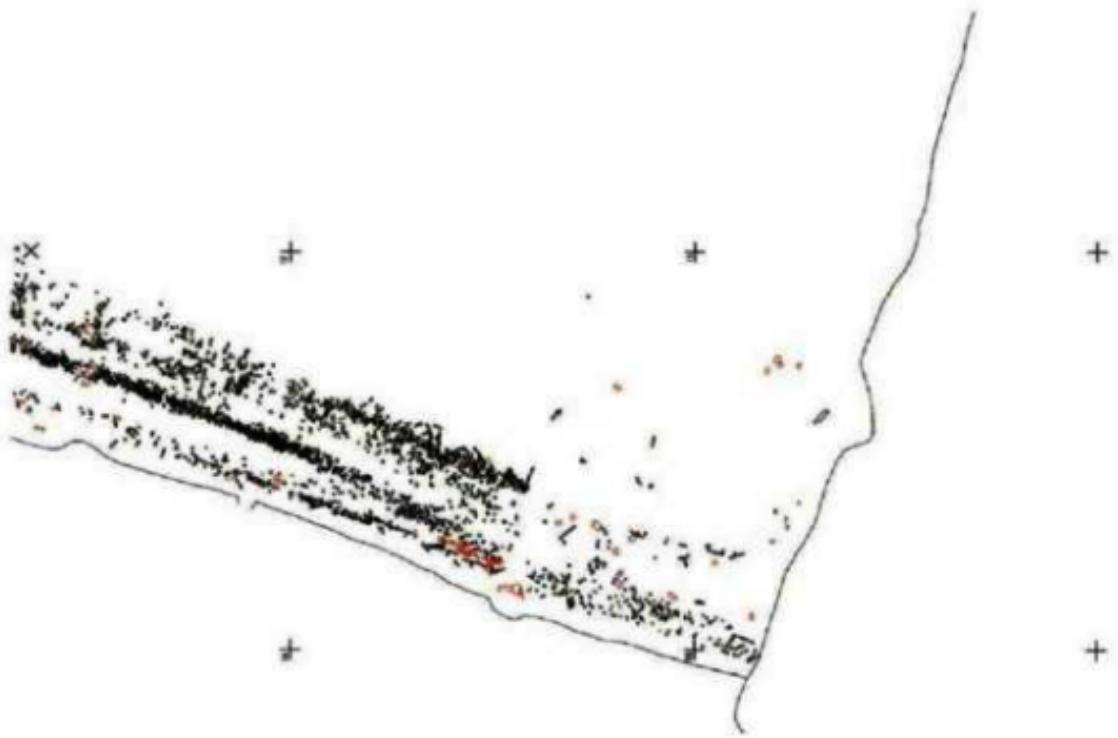


圖102 水路航線圖





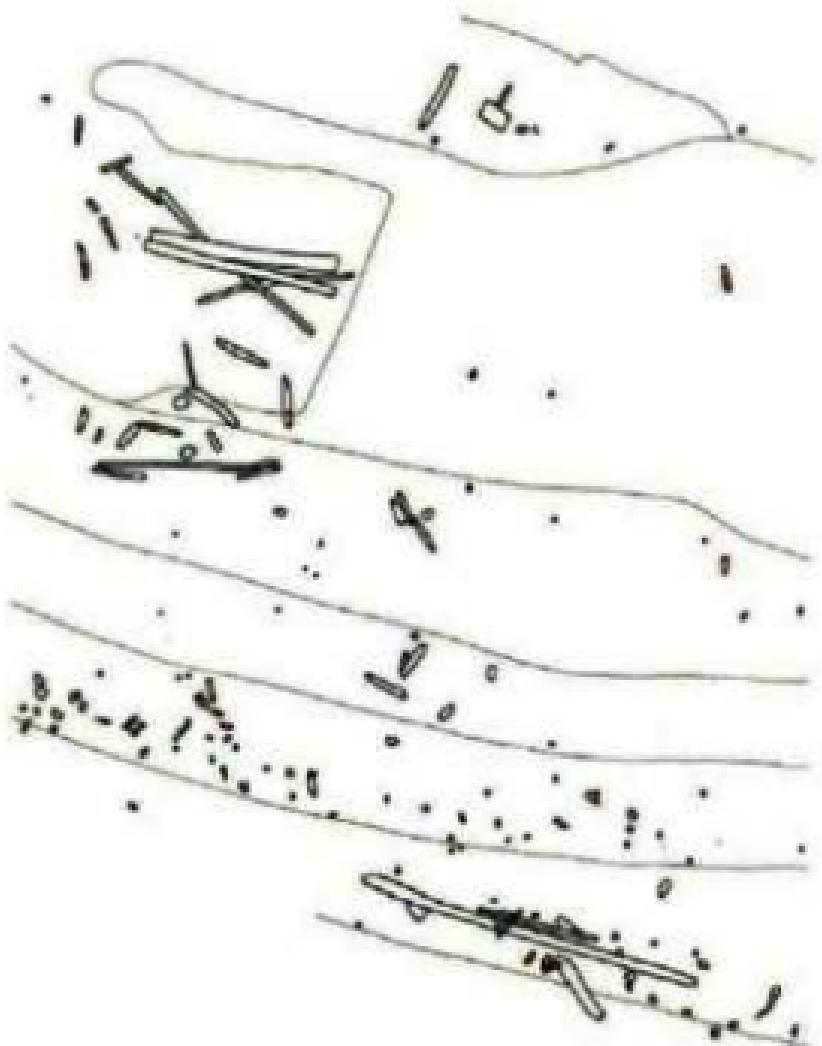


图 11 地面沉降带

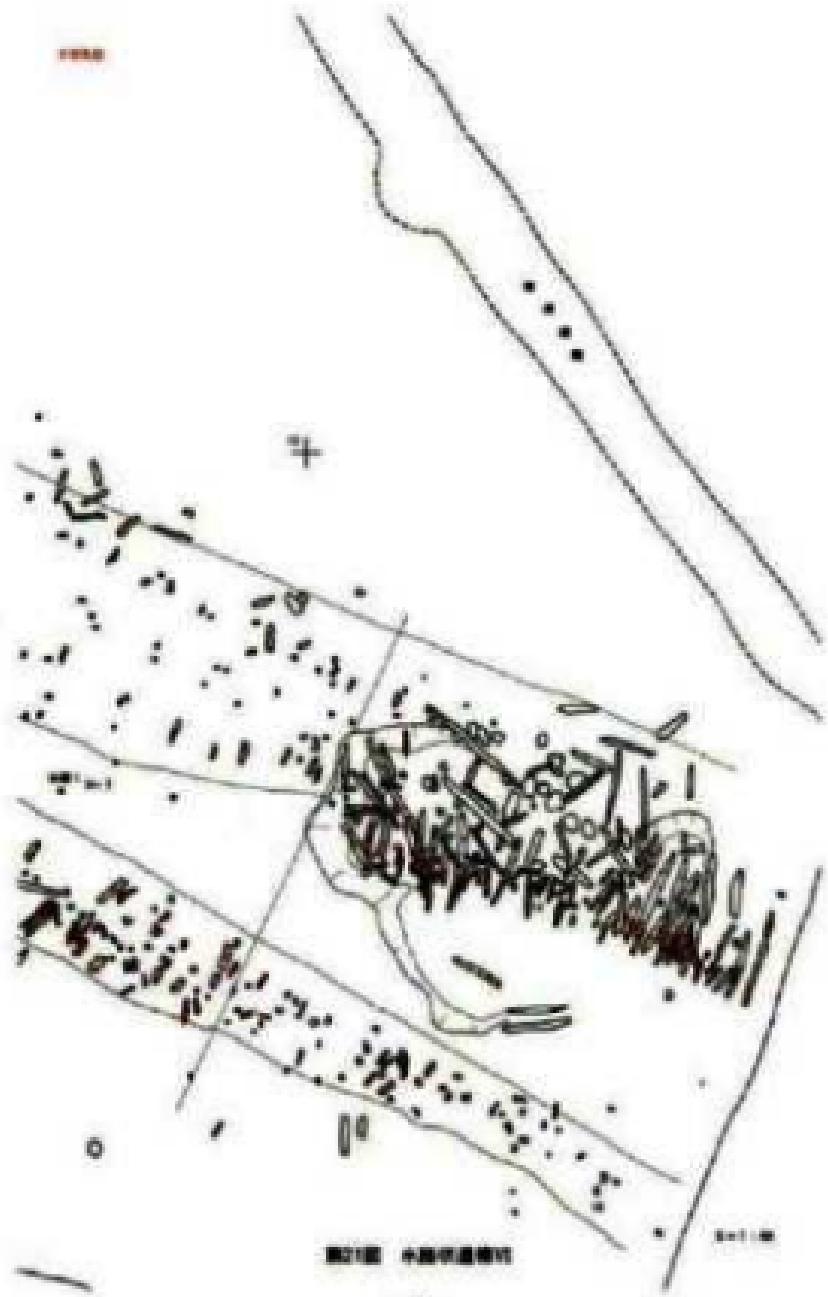
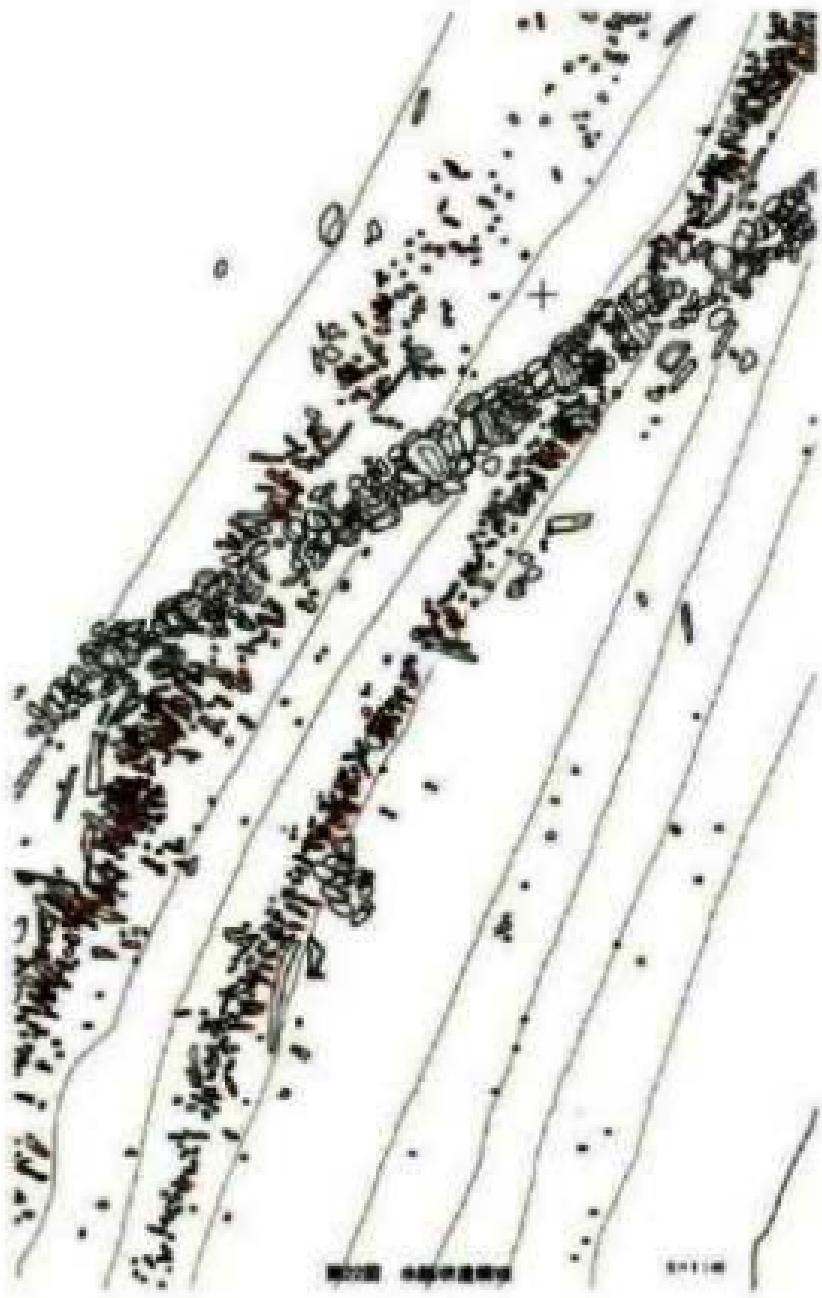
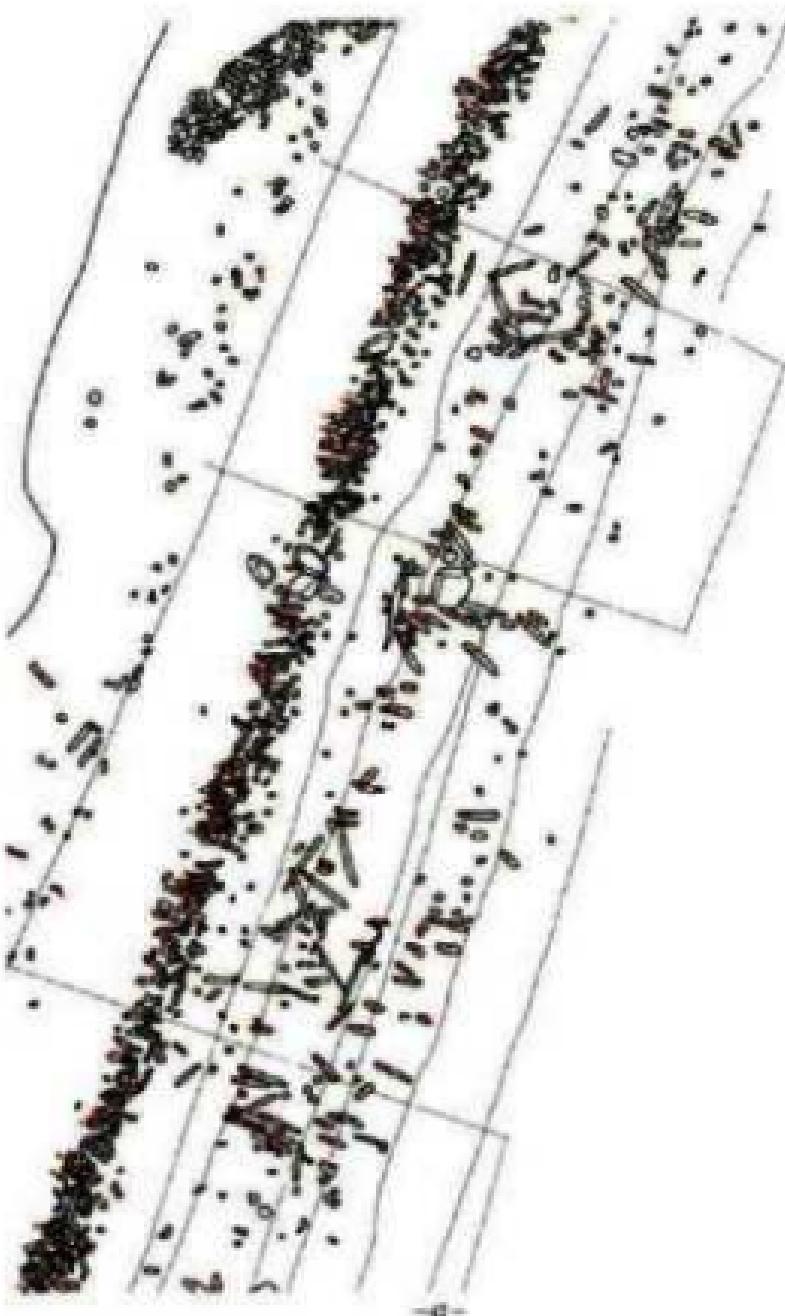
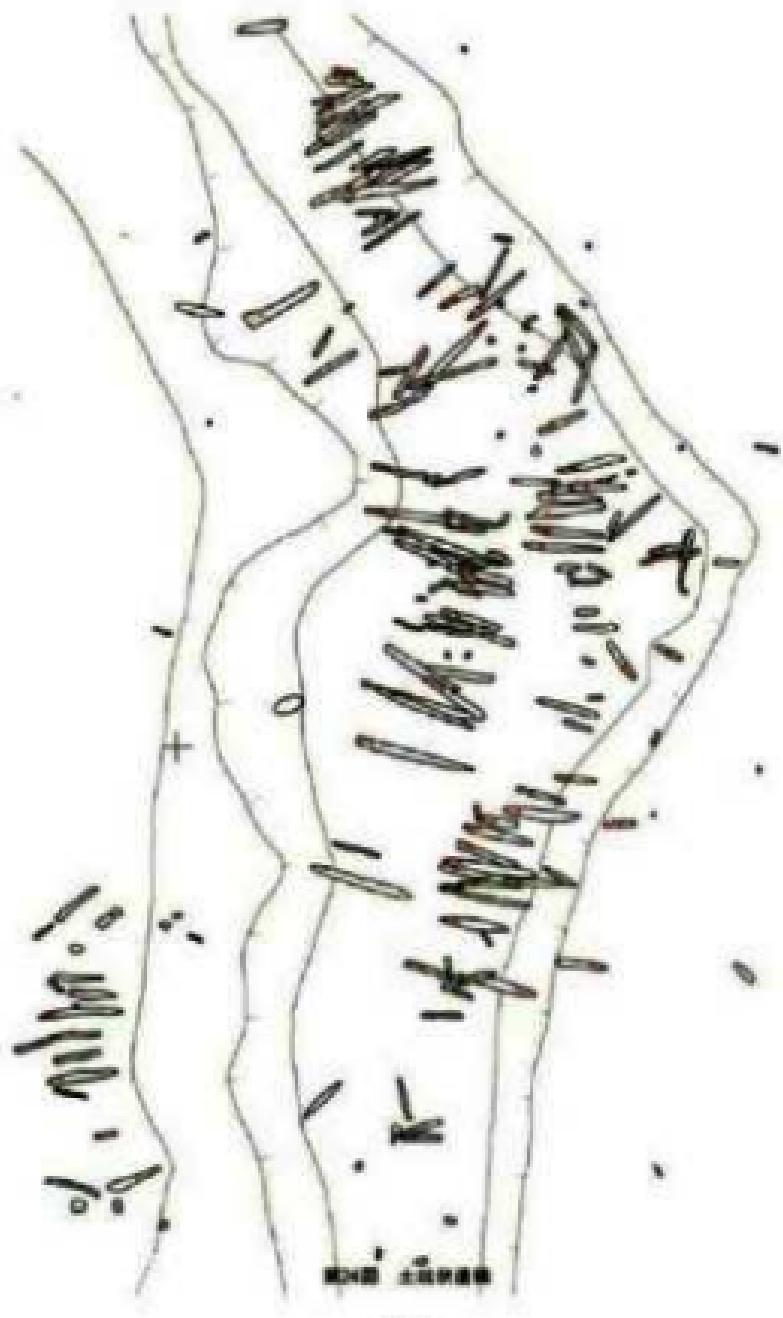


图219 中南半幅地质图







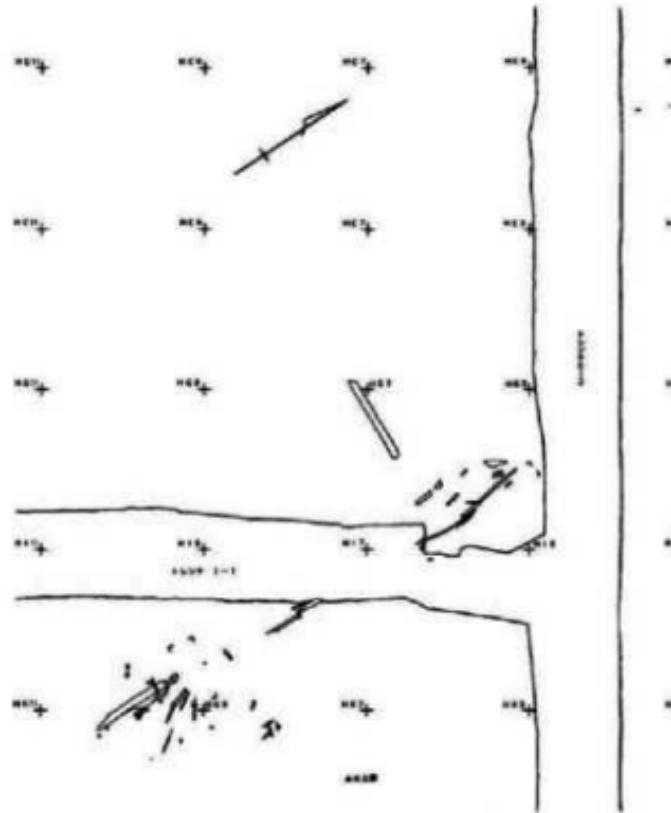
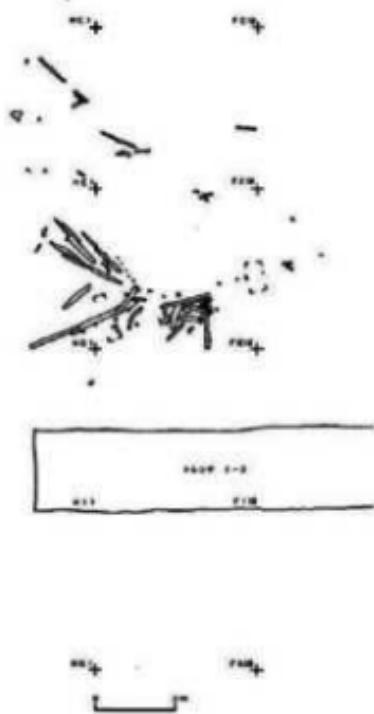
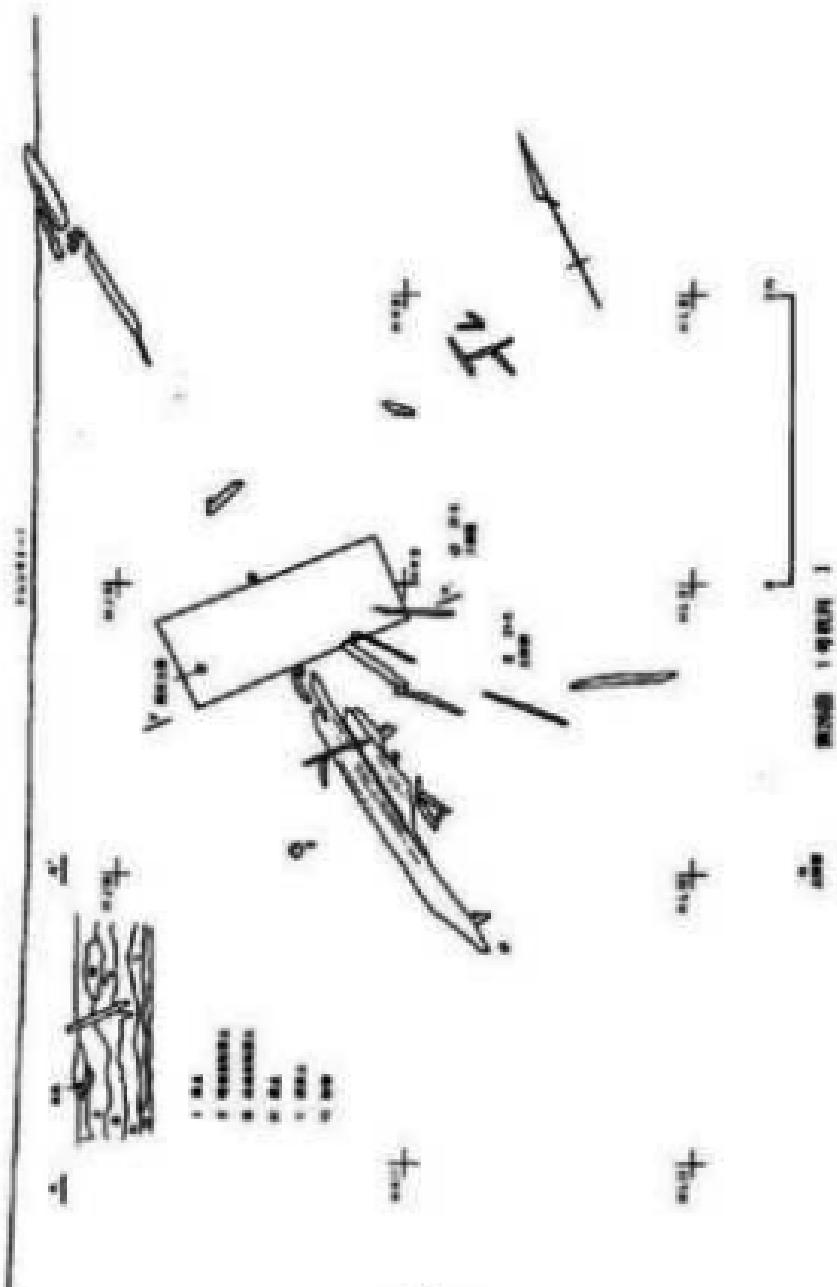
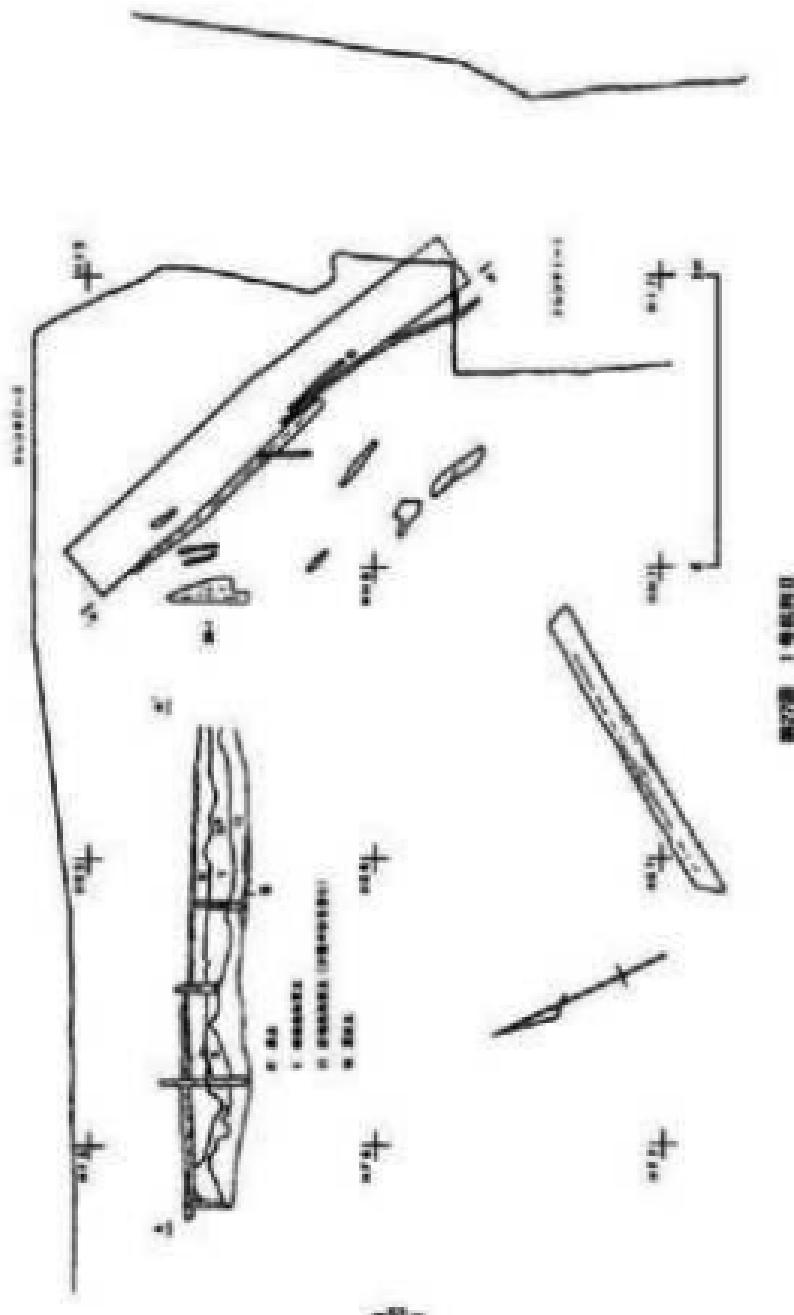


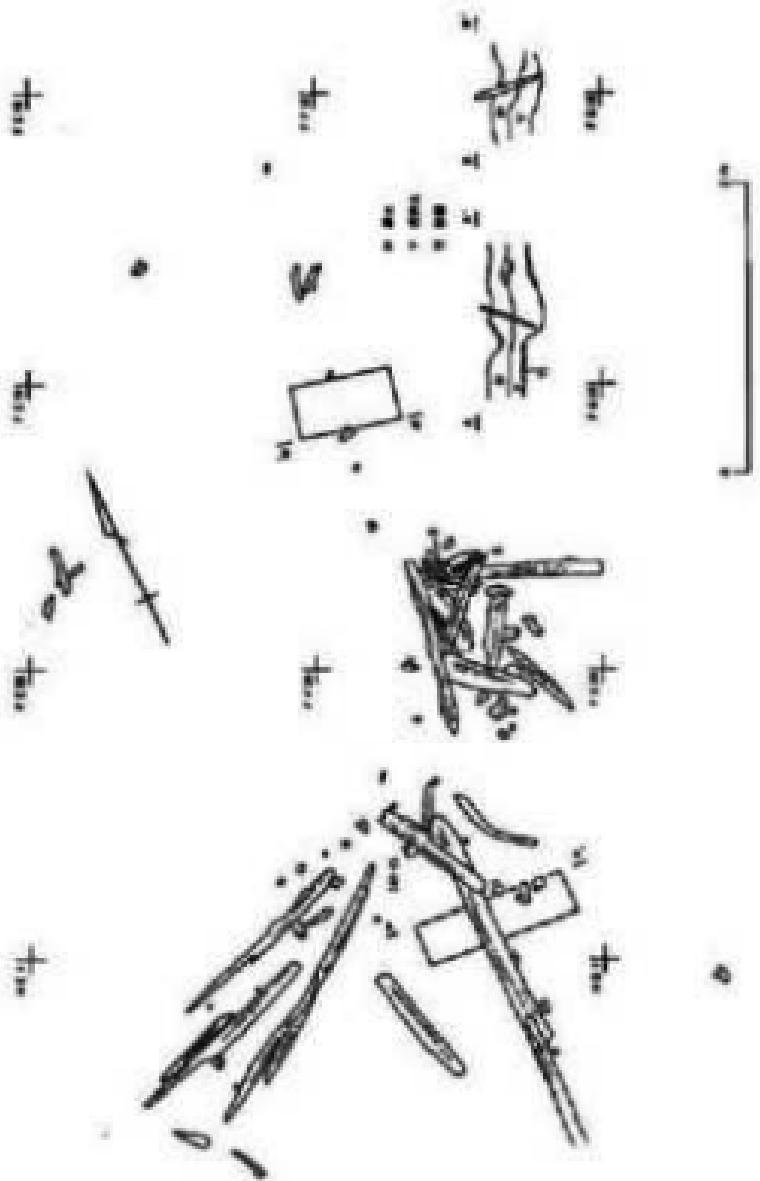
圖20 1號樣件 施工圖













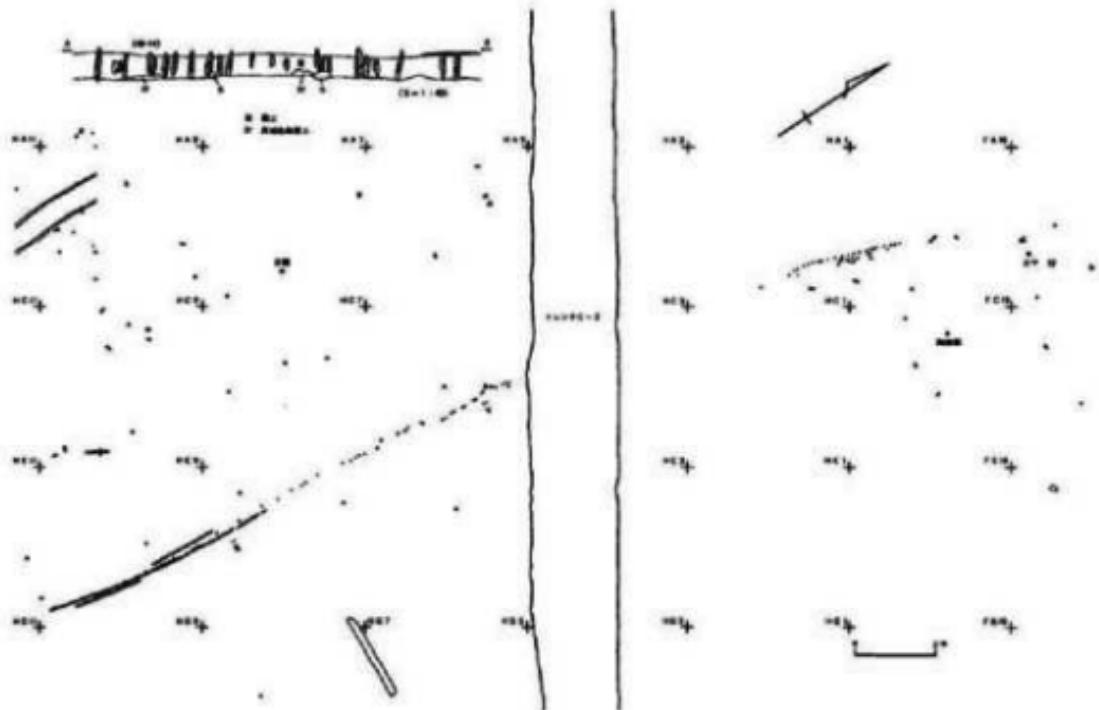


图292 2号标本



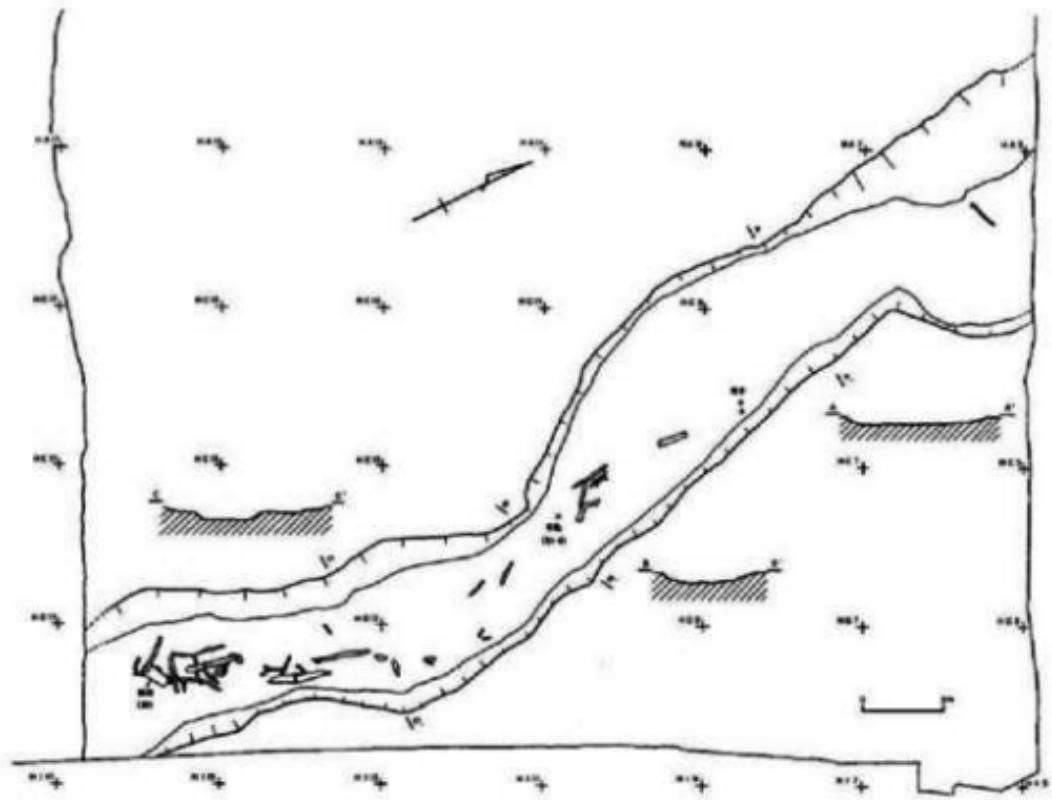


图300 古地磁



## 第2節 造 物

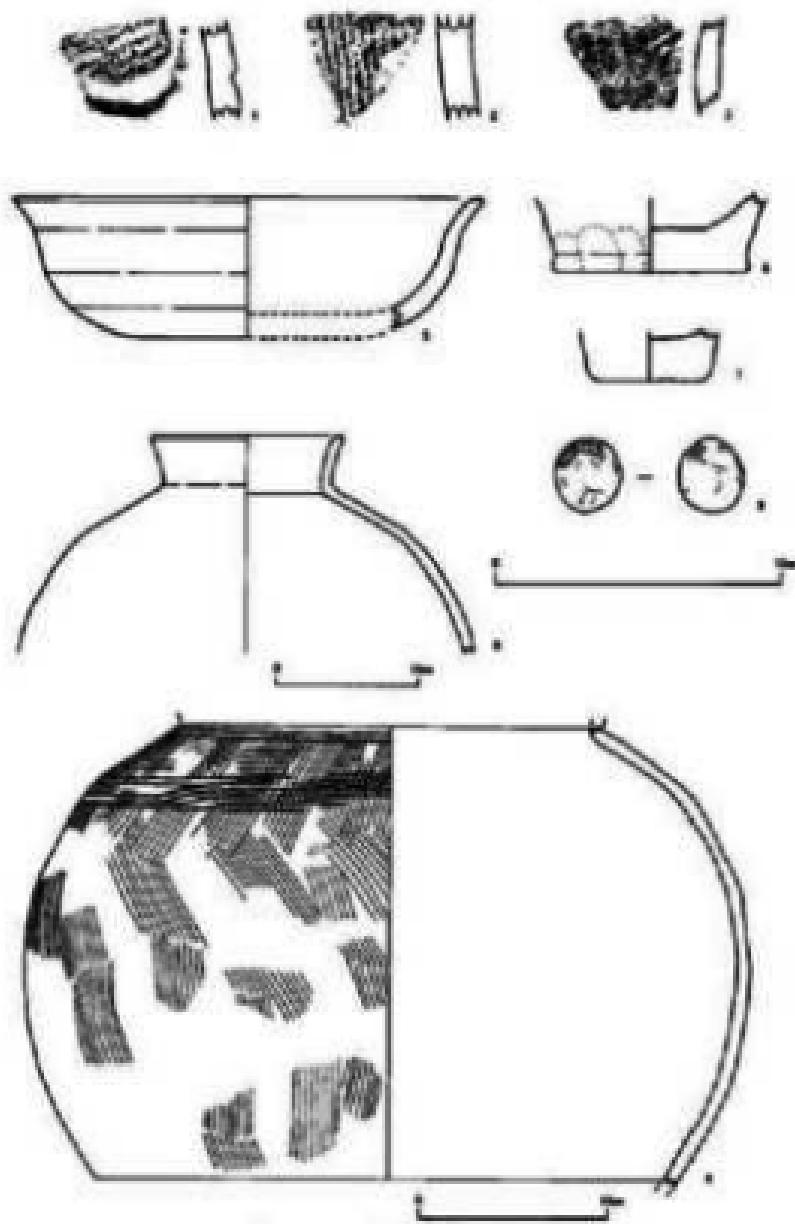
### 1. 土器類、土器、陶器、磁器

本調査区から検出されたものは、両次土器、高次土器、土器類、瓦器陶器を中心とする各種の物語。陶器と両次土器から江戸時代、近代までの遺物が小量片で多數出土した。多くの遺物が數3種に跨りして検出された。小量片であるが実物可推なものの一例を示す。

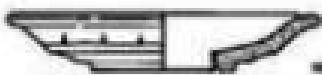
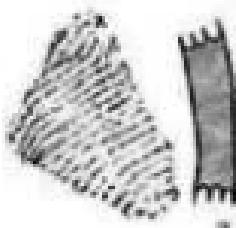
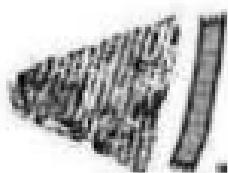
#### (1) 江戸代の遺物 (図29-32)

図29 土器・陶器・磁器等 上一回窓・中窓型 下一回窓

遺物名	地 点	出土状況	目 標	文 字	圖	考 文
1	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパを意味する。西洋食器	西式
2	-	C-1	横口 窓	-	ヨーロッパを意味する。洋服より取る	西式
3	-	1980年 秋	横口 窓	-	横口窓が特徴としている。西洋食器や洋服等、洋風の物を意味する。	西式
4	-	1980年 秋	横口 窓	-	横口窓が特徴としている。西洋食器や洋服等、洋風の物を意味する。	西式
5	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
6	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
7	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
8	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
9	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
10	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
11	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
12	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
13	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
14	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
15	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
16	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
17	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
18	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
19	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式
20	-	1980年 秋	横口 窓	-	ヨーロッパの窓を意味する。洋服等、洋風の物を意味する。	西式



圖六四 出土土壤剖面・地圖



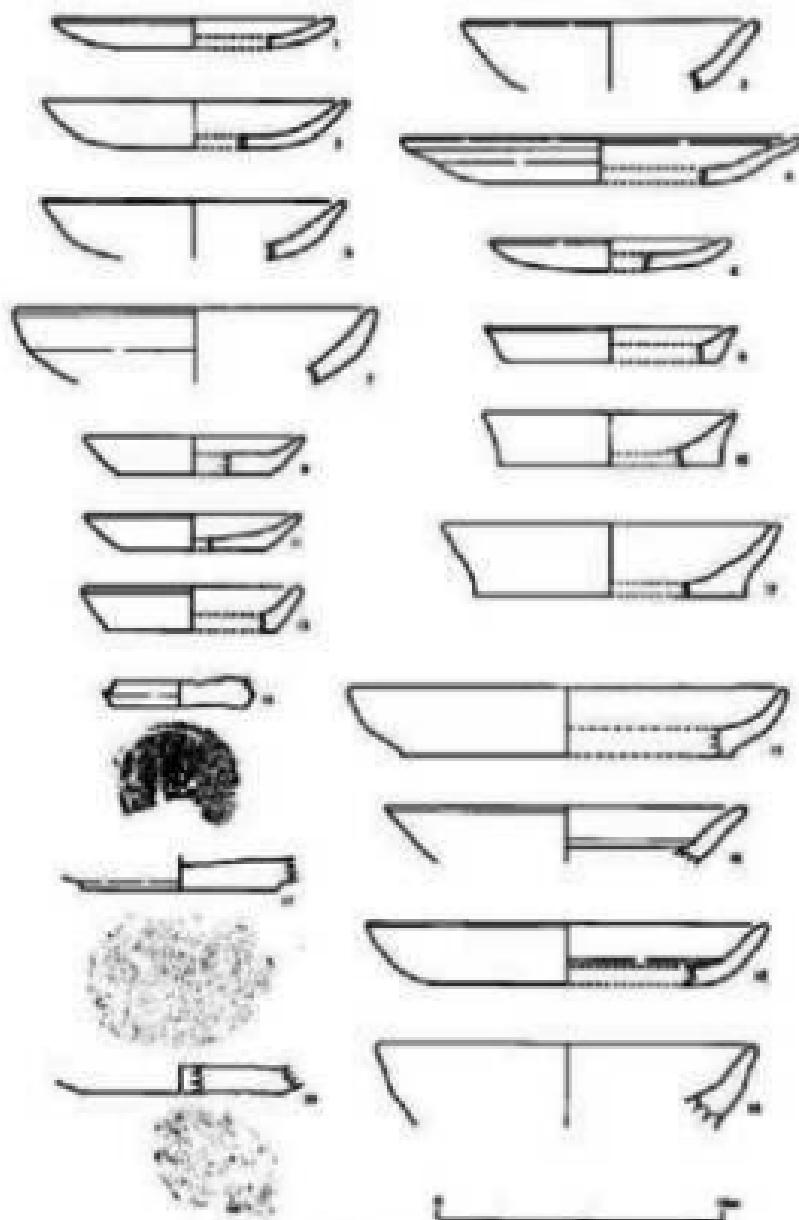
卷之三

手標尺取上部厚く三角形を示すものB、底面から口縫部へと内曲しているものC、底面側に  
こみのあるものD、口縫部からみのあるものをE、その他のFとした。

卷之三十一

$\Delta = \text{[redacted]}$     $\Theta = \text{[redacted]}$     $T = \text{[redacted]}$

卷数	页数	卷数	页数	卷数	页数
1	1-10	1-10	1-10	1-10	1-10
2	11-20	11-20	11-20	11-20	11-20
3	21-30	21-30	21-30	21-30	21-30
4	31-40	31-40	31-40	31-40	31-40
5	41-50	41-50	41-50	41-50	41-50
6	51-60	51-60	51-60	51-60	51-60
7	61-70	61-70	61-70	61-70	61-70
8	71-80	71-80	71-80	71-80	71-80
9	81-90	81-90	81-90	81-90	81-90
10	91-100	91-100	91-100	91-100	91-100
11	101-110	101-110	101-110	101-110	101-110
12	111-120	111-120	111-120	111-120	111-120
13	121-130	121-130	121-130	121-130	121-130
14	131-140	131-140	131-140	131-140	131-140
15	141-150	141-150	141-150	141-150	141-150
16	151-160	151-160	151-160	151-160	151-160
17	161-170	161-170	161-170	161-170	161-170
18	171-180	171-180	171-180	171-180	171-180
19	181-190	181-190	181-190	181-190	181-190
20	191-200	191-200	191-200	191-200	191-200
21	201-210	201-210	201-210	201-210	201-210
22	211-220	211-220	211-220	211-220	211-220
23	221-230	221-230	221-230	221-230	221-230
24	231-240	231-240	231-240	231-240	231-240
25	241-250	241-250	241-250	241-250	241-250
26	251-260	251-260	251-260	251-260	251-260
27	261-270	261-270	261-270	261-270	261-270
28	271-280	271-280	271-280	271-280	271-280
29	281-290	281-290	281-290	281-290	281-290
30	291-300	291-300	291-300	291-300	291-300
31	301-310	301-310	301-310	301-310	301-310
32	311-320	311-320	311-320	311-320	311-320
33	321-330	321-330	321-330	321-330	321-330
34	331-340	331-340	331-340	331-340	331-340
35	341-350	341-350	341-350	341-350	341-350
36	351-360	351-360	351-360	351-360	351-360
37	361-370	361-370	361-370	361-370	361-370
38	371-380	371-380	371-380	371-380	371-380
39	381-390	381-390	381-390	381-390	381-390
40	391-400	391-400	391-400	391-400	391-400
41	401-410	401-410	401-410	401-410	401-410
42	411-420	411-420	411-420	411-420	411-420
43	421-430	421-430	421-430	421-430	421-430
44	431-440	431-440	431-440	431-440	431-440
45	441-450	441-450	441-450	441-450	441-450
46	451-460	451-460	451-460	451-460	451-460
47	461-470	461-470	461-470	461-470	461-470
48	471-480	471-480	471-480	471-480	471-480
49	481-490	481-490	481-490	481-490	481-490
50	491-500	491-500	491-500	491-500	491-500



图一 出土青铜器物 · 铜器

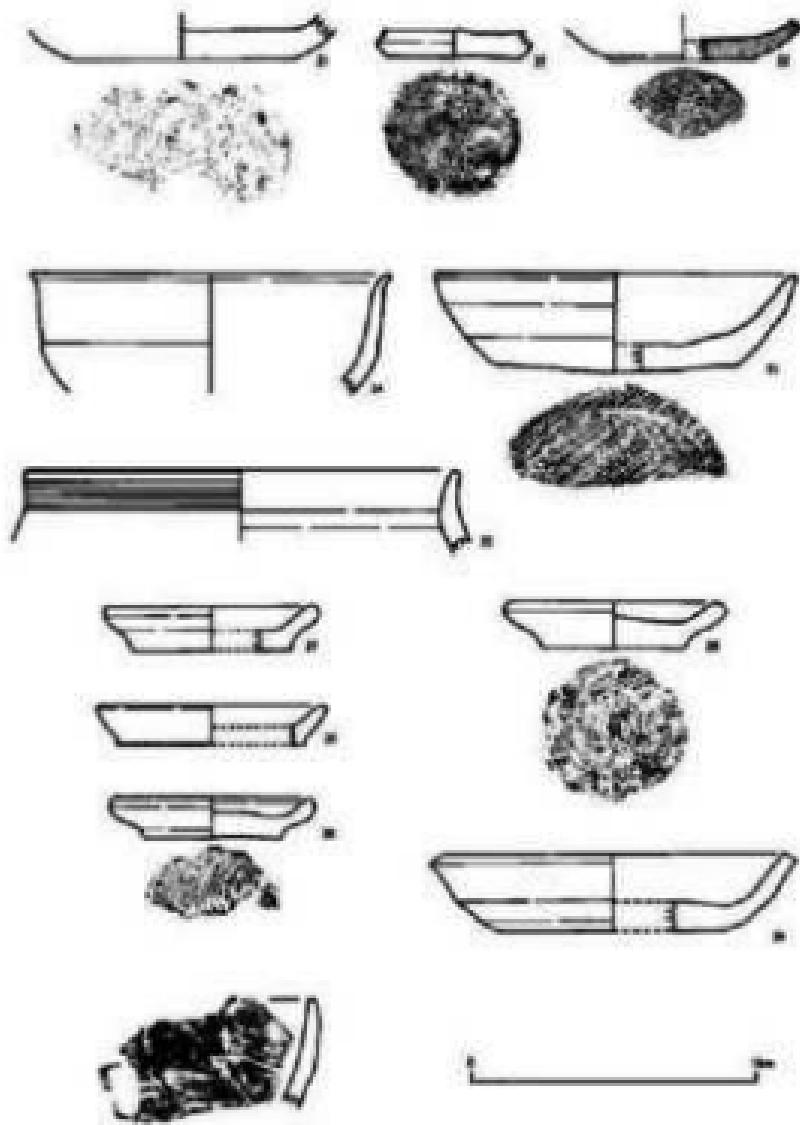


图 243 土土船、海豚形状模型·实物图

### (3) 中世以後の歴史、発展について

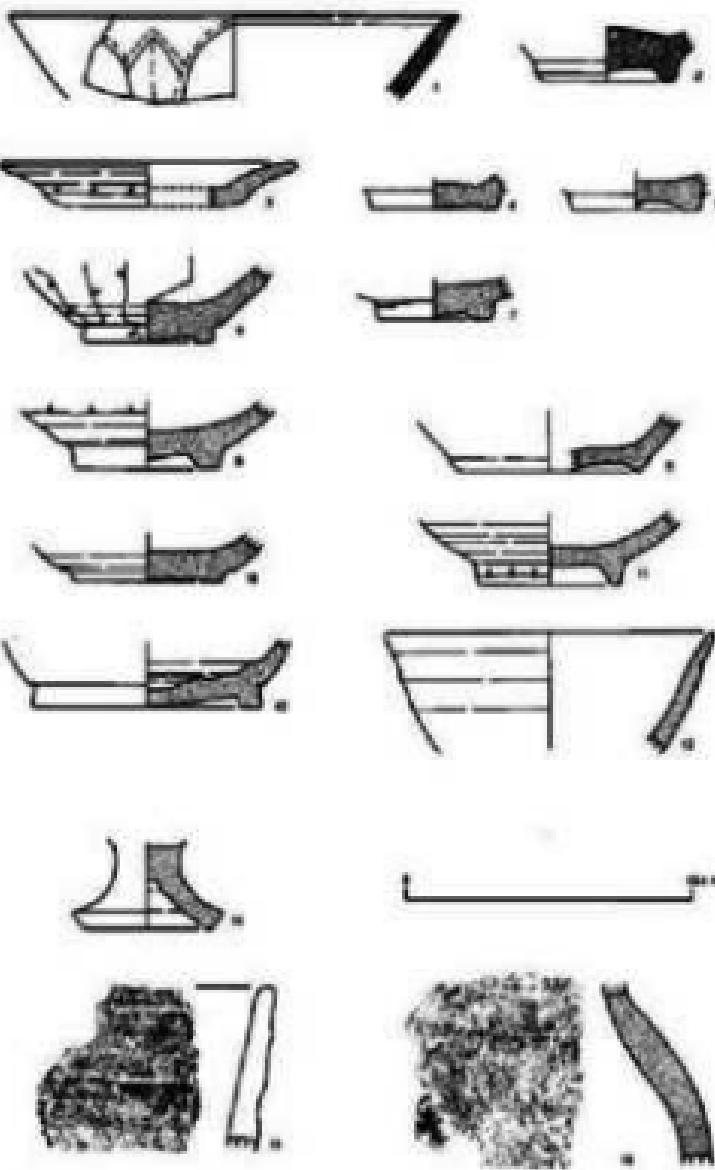
歴史、発展は多くの面、また領域も非常に複雑化された。いづれも小競争であるが一応歴史、  
地理、時代に分類を試みた。次の通りである。

図4 図　上部、地図、地図一覧表

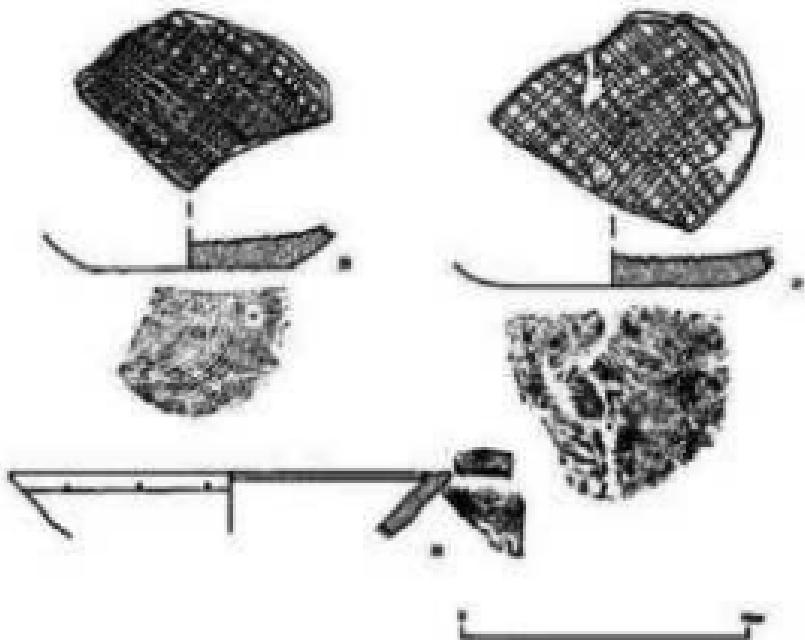
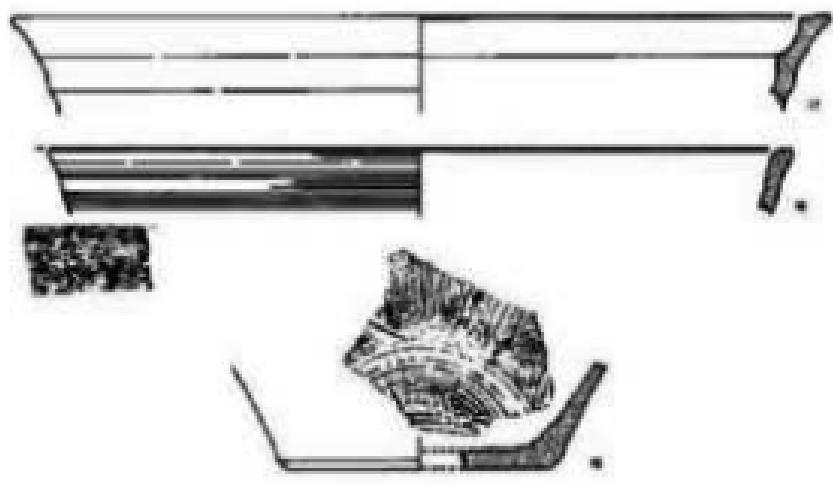
地図名	原書名	著者	年	出版社	原書名	原書名	年	出版社	原書名	原書名	年	出版社
地図	地図解説				地図	地図	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	
地図学 (地図)	地図	1	18世紀		地図	地図	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	1	18-19世紀		地図	地図	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	1	18世紀		地図	地図	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	1	18-19世紀		地図	地図	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	1	18世紀		地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
地図学	地図解説	4	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	4			地図	地図	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	
地図学 (地図)	地図	1	18世紀		地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	1	18世紀		地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	1	18世紀		地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	1	18世紀		地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
地図学 (地図)	地図	18世紀	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	17	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	1	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	1	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	11	18-19世紀	地図	地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	
	地図	1	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	地図	地図	地図	18世紀	

(4) 單獨的事件 (第 8 章)

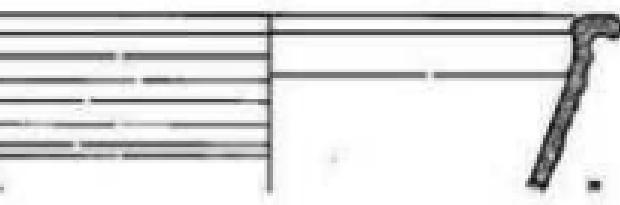
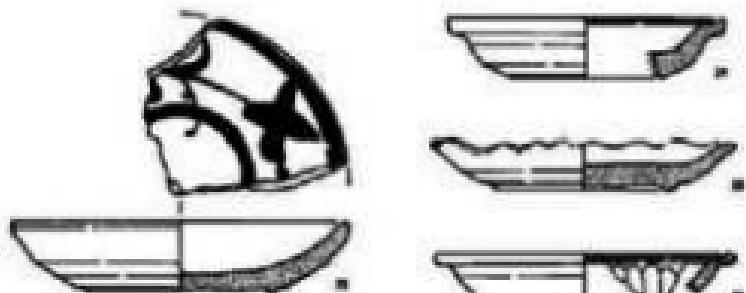
[Home](#) | [About](#) | [Contact](#) | [Privacy Policy](#) | [Terms of Service](#)



圖三三一 青銅鑄件、鐵鑄件與鐵器 - 鋸齒刀



圖三三〇 出土陶器殘片 - 雜物



圖二四一 土陶盤與漆器 · 形狀圖

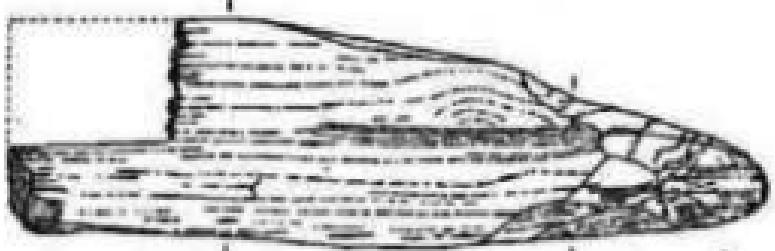
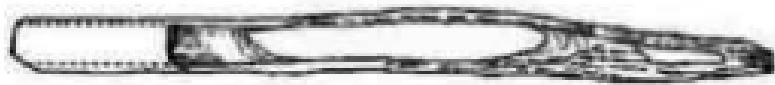
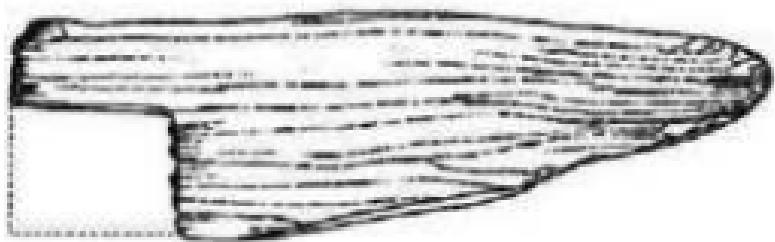
## 2. 本製品（第Ⅱ回）

本選別における本製品の種類についてではすでに実施行動検査委員会による実施行動検査報告書で報告されているよう多くの種類の本製品が提出していることは明らかである。

本実施評定における本製品は2000年当時の本種の本格と小量の量販及び包装製品である。その中の一部を示した。

図表2 本製品種別一覧表

実施順序	品種	提出者名	評定者	備考
1	本製	トヨタ セニア	ササキ	箱の内側をした横幅に方角で丁寧に仕立ててお手頃な感じ。 トヨタセニアさんのお手頃な価格のお手頃の一例かな感。
2	本製	川崎	ササキ	箱の裏面は4枚の紙の裏用紙、片端から引いた状態で組み込まれ、組み立ても簡単の一例で、表面は糊を貼り付けていて、一端だけは糊は手前に貼らされている。糊剥がれ、糊剥がれ部分の内側部が手前側で剥がれ、その箇所の底面にうりくさないように、糊手の端が糊跡に残っている。糊手側の糊跡が残っていると、この糊手は使用しないと困る。
3	本製	トヨタセニア	ササキ	トヨタセニア、組み難いのが、出来し方から、組み立てる手順圖に記載されておらず自分で組み立てる感じでした。組み立てる手順圖がないのが欠点。
4	本製	トヨタセニア	ササキ	お組した人のやせる筋が結構的一見が難いと感じるが内側に止まっている。組み立てる手順圖した感じが悪い。
5	本製	C-1	シノモ	組立難易度低である。組み立てる手順もさすがに手書きの手写体で、組み立てる手順圖が読み難くなっている。
6	組み立て	C-1	ササキ	組立難易度低している。内側や外側が一見難しく感じている。
7	下駄 組み立て	川崎工場	ササキ	一見立派、組み立てる人が迷う感じしておけられない。組み立てる手順が手書きで難しく感じている。組立がへってない。
8	下駄 組み立て	川崎工場	ササキ	組立難易度低である。組み立てる人に迷う感じで内側や外側が見えない。
9	本製 トヨタ	C-1	ササキ	組み立てる手順が手書きで見えない感じがする。組み立てる手順が複雑で複数の手順で組み立てる。
10	本製 平野	トヨタセニア	シノモ	組立難易度低にしてみた組み立てる感じである。組立、組み立てる手順が複雑で、組み立てる手順图?
11	本製 平野	川崎工場	シノモ	組立難易度低である。内側と外側に糊跡が残っている。手洗子場を手前側



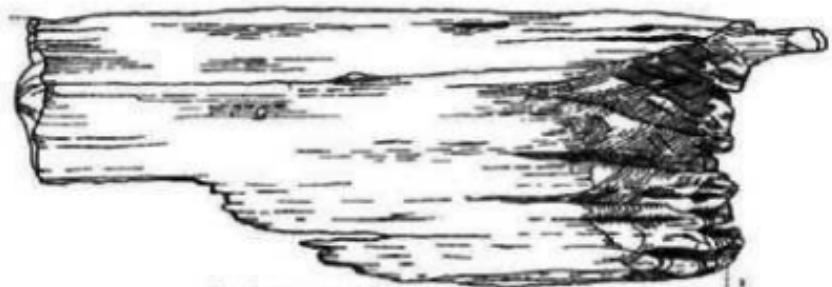
图版四 出土木器品实物图

（三）



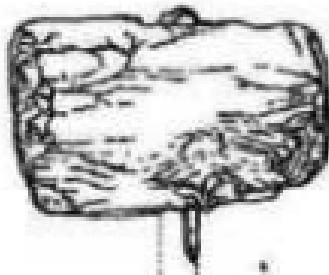
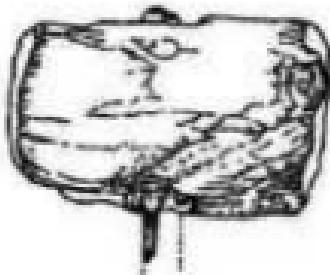
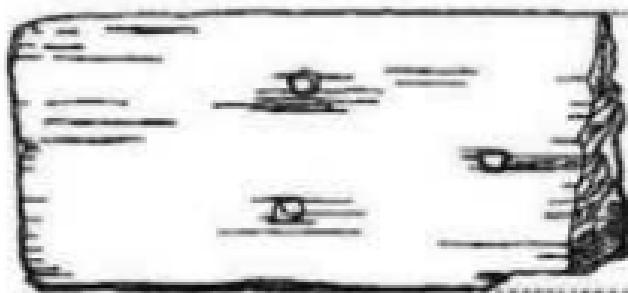
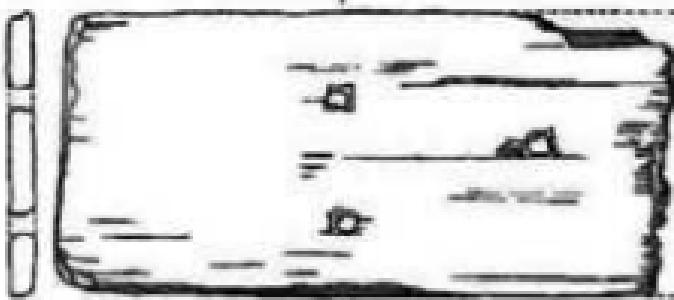


(349.1.6)

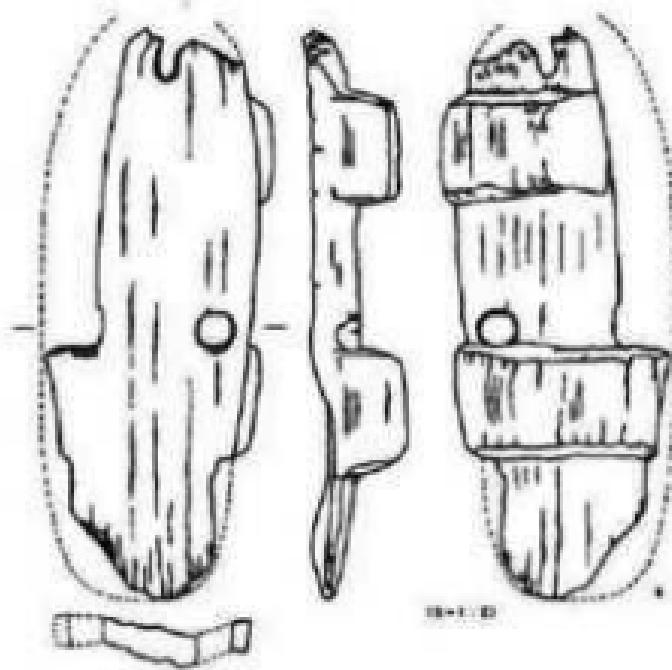


349.6 土木器物圖2

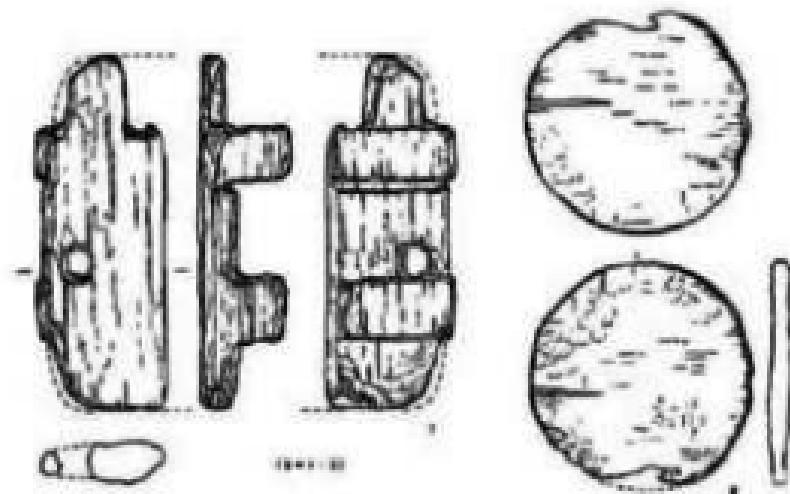




图版三  
出土木器表面图



圖四一·三



圖四一·四

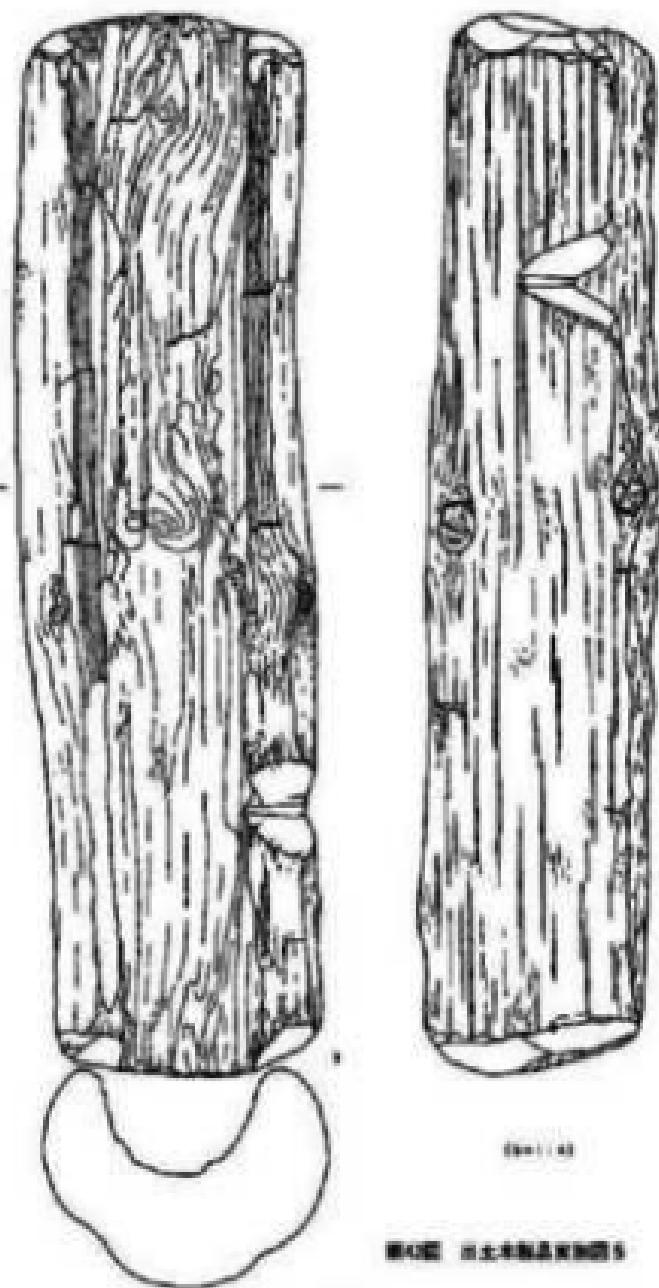


圖42 土木船

圖42 土木船

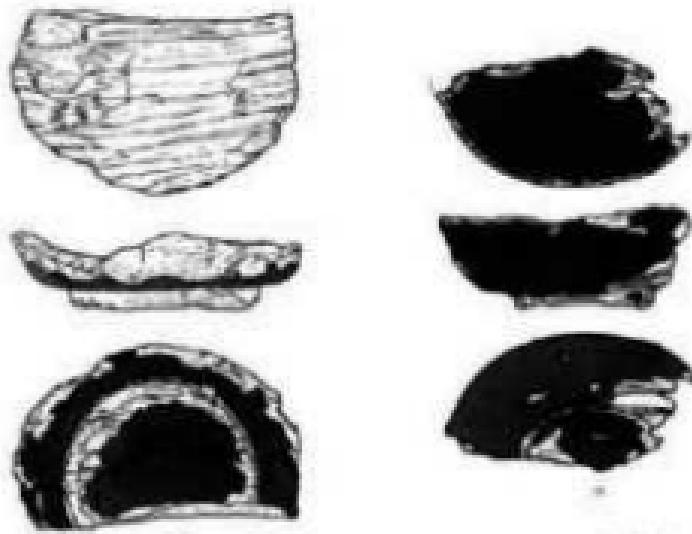


図4-20 出土木器表面調査

#### 1種 (図4-20)

本組は第3種と第4種木表面に關する。材料として打ちこまれたもので樹脂用木栓にも該している。本組のほとんどは複数時に於いて面に痕跡が強く作用しているものもあり複数にハサウェイも取り上げたが破損してしまったものもある。また痕跡度の小さいものもある。

痕跡も樹脂面したのと先端面面したものの二通りがある。ほとんど樹脂面である。これは面立等、面立等上部の面筋時に痕跡現れ、帶状化されて打ち込んだ当時の痕跡を見る事のできるのは少ない。現存状態のよいものだけに限ってその加工痕跡の範囲から木栓を観てみた。本組の痕跡の大半は、サワラ材で打ち面によるみかん樹脂栓での取りを行つてある。先端部の加工は各種の刃物を利用して数回～10回ほどの打撃により施されているものが多い。

1種 第4種下面から抽出されたもので先端部の加工が他の木栓の加工痕跡が残り面には残存有し尚且して刃物使用とは思われないもの。刃物を用了とすれば開拓であると思われる一般。

2種 木口が三角形、または正角形に近い形を留めているもので打撃法によるみかん樹脂栓でサワラ材を過塗とするもの。

3種 木口が正方形ないし正形を留めるもの、材質サワラ材の紀日表栓を基準とするもの、やや細長いものとよく細かいものが見られる。

4種、木の倒伏状のもの、倒、倒のバランスのとれていないもの、やはりサツサ材であるが、倒で倒ったものと倒があり倒がったものがある。

5種、木口が丸型のもの、自然のまま丸太形を加工してあるもの、材質は松、白樺を利用してもやはりサツサ材以外の木材であるもの。

図7 基本樹分調査

左上=倒木 中一倒木 下=倒木

目	種別	年輪 数	直径 cm	高さ m	材質	倒木		目	種別	年輪 数	直径 cm	高さ m	材質	倒木	
						倒木 数	倒木 率							倒木 数	倒木 率
1	倒木	1	10.0 12.0 14.0	4	1.0 2.0 3.0	1	100%	1	倒木	1	10.0 12.0 14.0	4	1.0 2.0 3.0	1	100%
2	倒木	2	10.0 12.0 14.0	3	1.0 2.0 3.0	1	33.3%	2	倒木	2	10.0 12.0 14.0	3	1.0 2.0 3.0	1	33.3%
		3	10.0 12.0 14.0	2	1.0 2.0 3.0	1	50.0%			3	10.0 12.0 14.0	3	1.0 2.0 3.0	1	33.3%
		4	10.0 12.0 14.0	3	1.0 2.0 3.0	1	33.3%			4	10.0 12.0 14.0	3	1.0 2.0 3.0	1	33.3%
3	倒木	5	10.0 12.0 14.0	7	1.0 2.0 3.0	1	14.3%	3	倒木	5	10.0 12.0 14.0	7	1.0 2.0 3.0	1	14.3%
		6	10.0 12.0 14.0	8	1.0 2.0 3.0	1	12.5%			6	10.0 12.0 14.0	7	1.0 2.0 3.0	1	12.5%
		7	10.0 12.0 14.0	9	1.0 2.0 3.0	1	11.1%			7	10.0 12.0 14.0	7	1.0 2.0 3.0	1	11.1%
		8	10.0 12.0 14.0	9	1.0 2.0 3.0	1	11.1%			8	10.0 12.0 14.0	7	1.0 2.0 3.0	1	11.1%
		9	10.0 12.0 14.0	7	0-1	1	100%			9	10.0 12.0 14.0	7	0-1	1	100%

樹木本数は合算的に見るとき倒木が圧倒的に多い。1個の被倒木の一回(倒木)に見られた倒木を1つとして倒木率を算出している。木札の中では一番新しいものと土壌被倒木からもほっきりしている時間は1~16。全てサツサ材である。倒木原因については角割を切ったもの、三面を削り、一面を削したもの、四面まで削り込んだもの、倒木部を倒化処理されているものもある。

#### 被倒木(倒木)

図2種、倒木率から削除されたもので、現時土壌の形、未調査土壌の形として残いられたものであります。木札を算出している。材質はサツサ材で被倒木を削除している。倒木率は1%から2%、厚さ2cmから3cm、中30~150cmのものが10本検出された。倒木による倒木であるが倒木の行動度は見られない。(厚さ125.0cmの3cm厚3種被倒木)

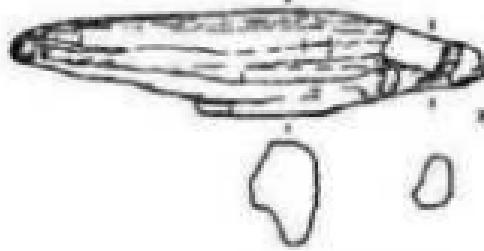
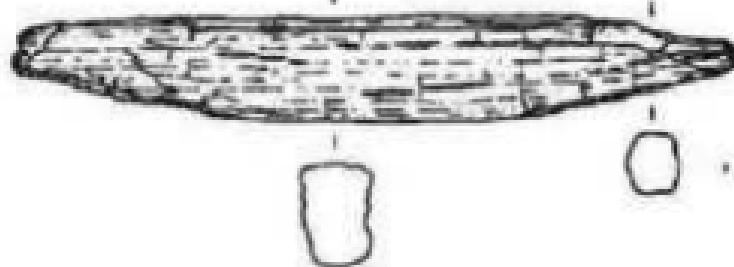
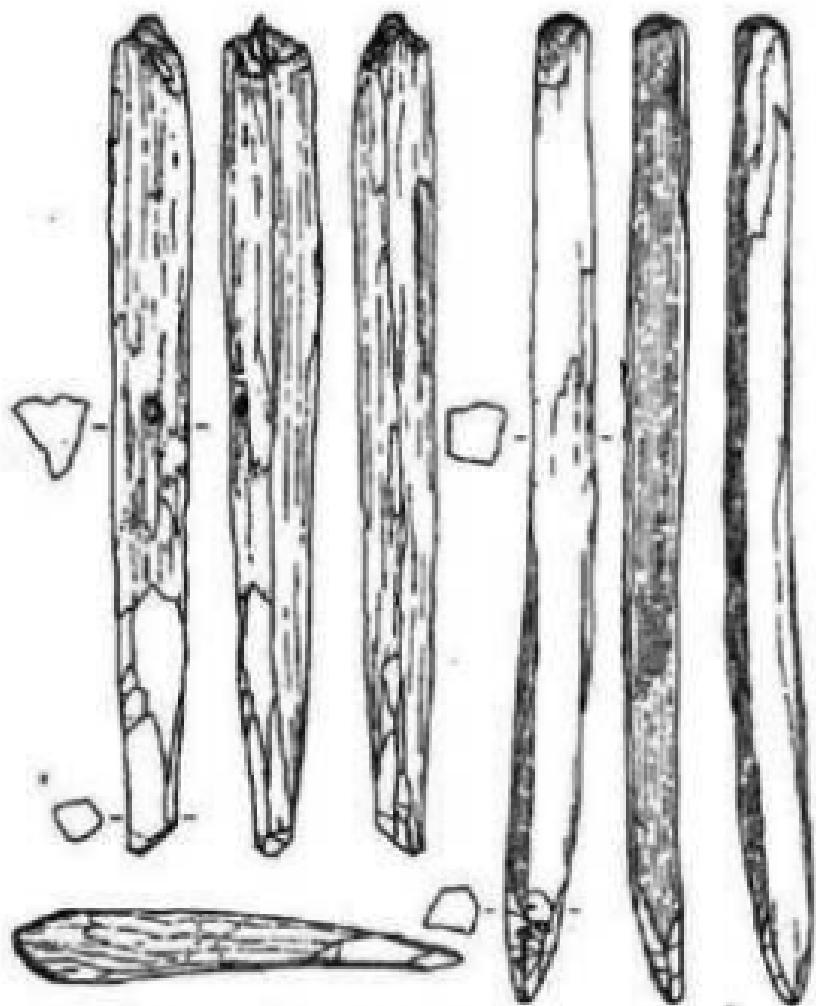
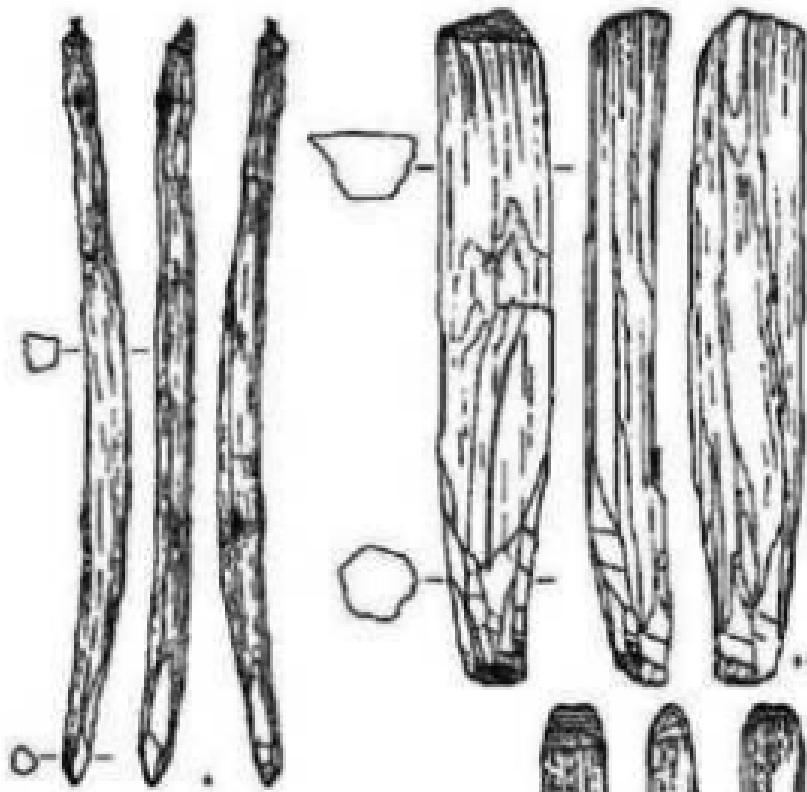


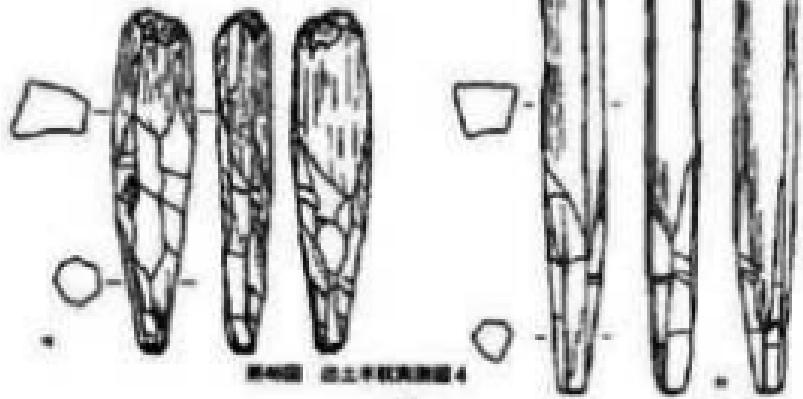
图432 长足水虱类属



圖版二 土庫層帶標本



图版二十一



图版二十一 土中发现的遗物 4

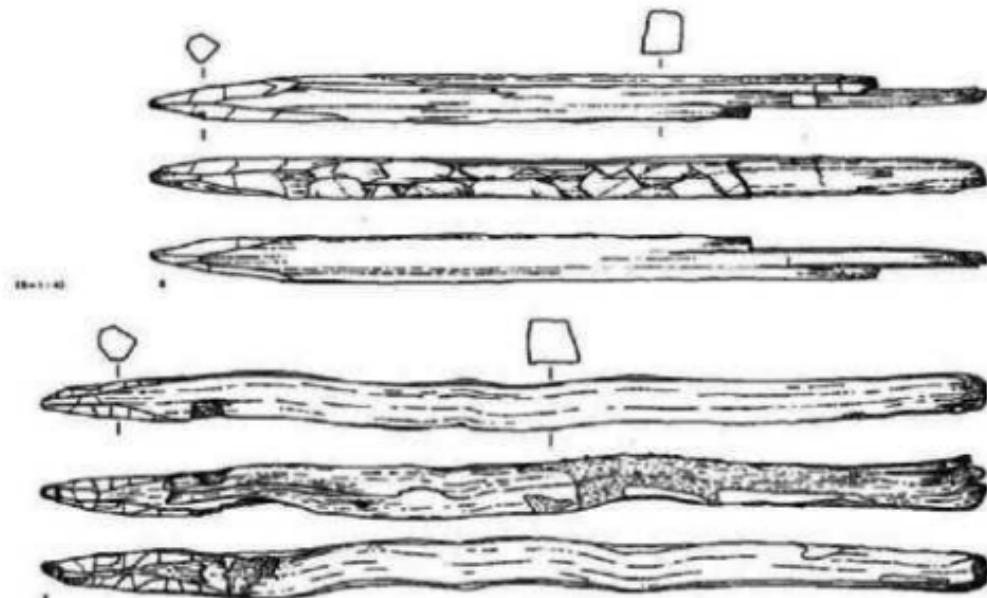
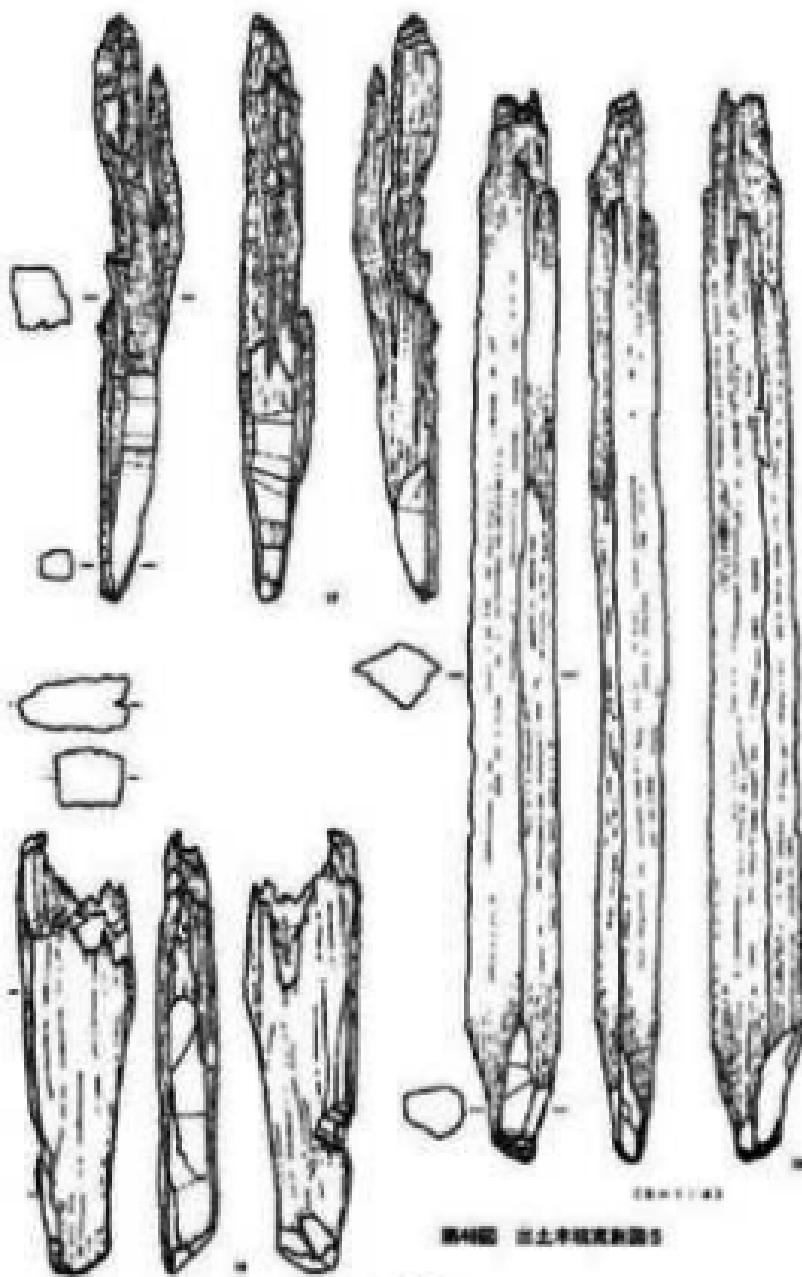
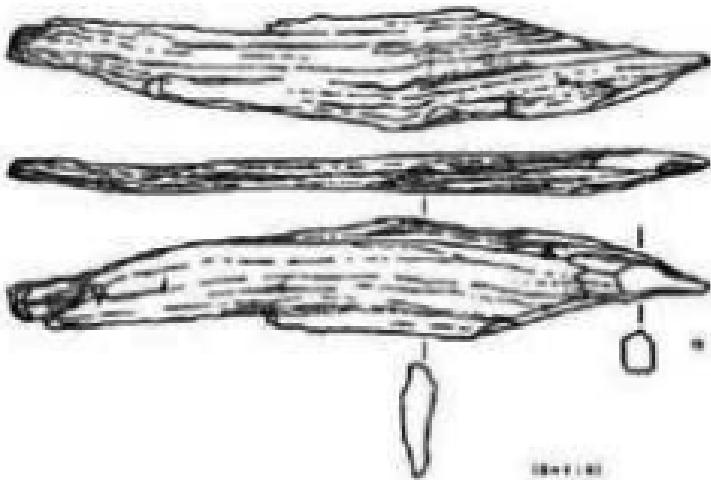
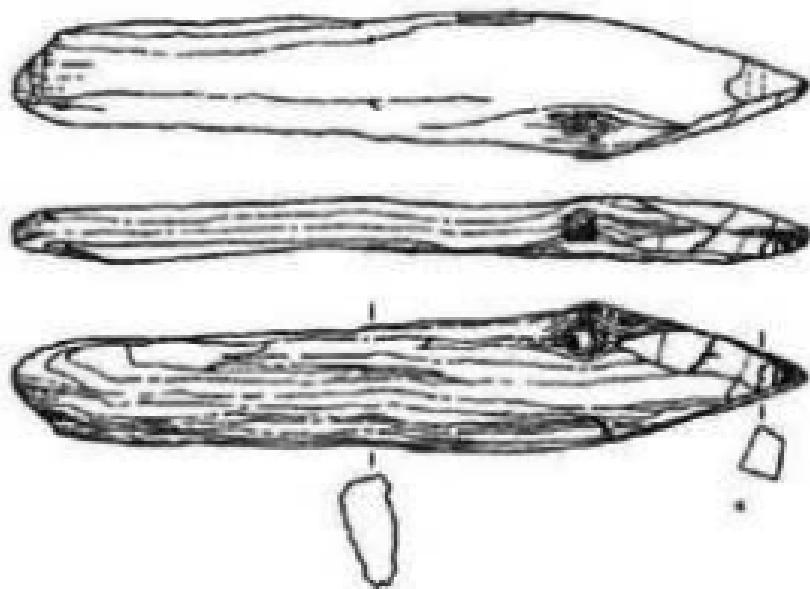


圖47 圖 出土木柄·標本實測圖



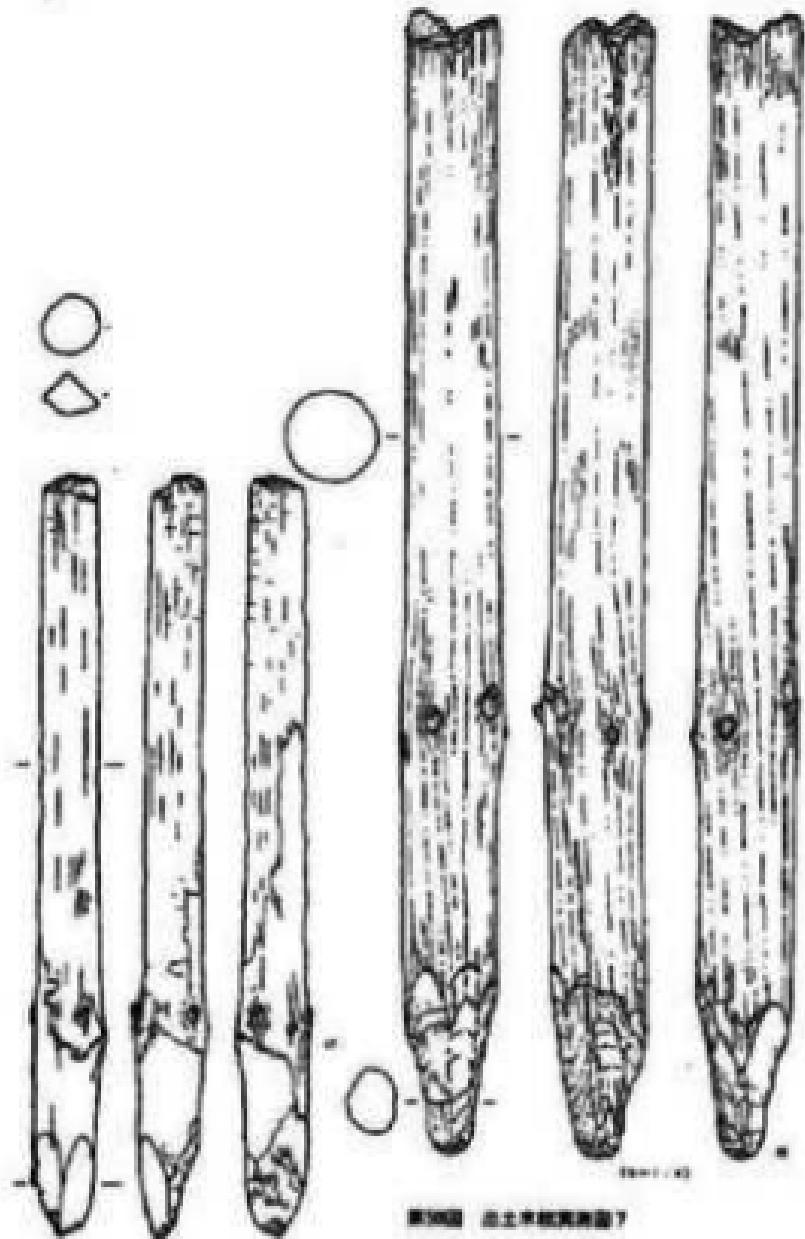


圖版四 土中植物遺物



圖四二一 土中發現的器物

（三）



圖版三 地質剖面圖 7

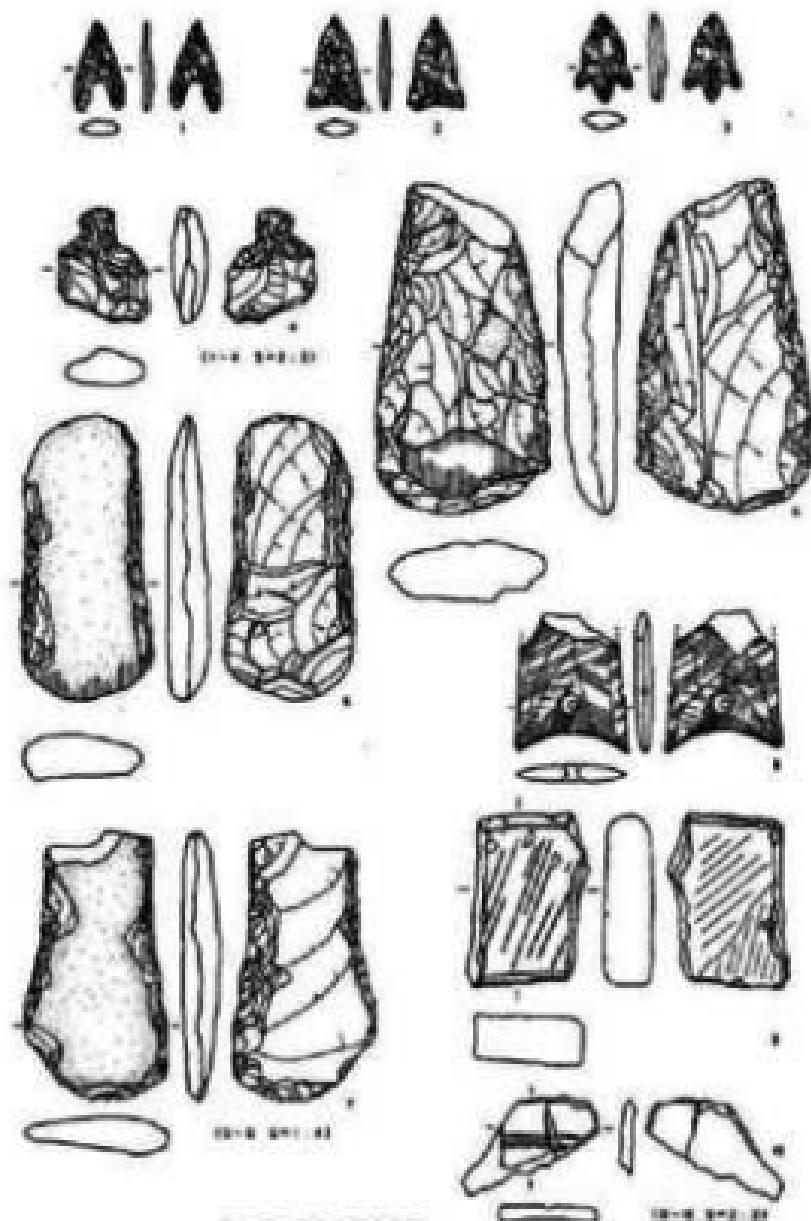
### 3. 石 壁 (300)

今回の調査地において確認された石壁は獨立時代の石壁や打削石壁・石塀・界石時代の石壁を指し、及び中世初期の石垣である。

#### 石 壁 の 調 査 確 定 一 覧 表

調査番号	材 种	石 壁	石 壁 状	調査結果	調 査	備 注
1	石	石 壁	C-1	石壁は直立式。内側内側に上部手すりが組まれてあり、内側に石垣が組み立てられている。		
2	石	石 壁	C-2	石壁は直立式。頂部の手すりは見えない。内側内側手すりあり、内側に石垣が組み立てられている。	直立式	
3	石	石 壁	C-3	石壁は直立式。 内側内側で見るが一端は石垣が組み立てられた石壁。		
4	石	石 壁	C-4	石壁であるが傾斜している。一端が手すりなし、内側に石垣が組み立てられている。	傾斜式	
5	石	石 壁	C-5	石壁に直する。 内側に石垣が組み立てられ、また、内側の石垣は手すりなし。		
6	石	石 壁	C-6	石壁に直するが傾斜が少しで傾斜されている。内側に石垣が組み立てられ、内側に石垣が組み立てられている。	傾斜式	
7	石	石 壁	C-7	石壁は、内側内側を内側に、外側を内側内側手すりに接続してある。内側が丸い。		
8	石	石 壁	C-8	石壁を組む内側内側が内側に組み立てている。内側に石垣が組み立てられ、内側に石垣が組み立てられている。	直立式	
9	石	石 壁	C-9	石壁は内側内側の二端で内側とともに内側内側に組み立てられた石壁。	内側	
10	石	石 壁	C-10	石壁は一端手すり、手すり側の側面、内側に石垣が組み立てられる。	内側式	

石壁は既存石垣の中より抽出されたものであり組み入れたものと考えられる。石壁の多く同じことと考えられる。但しものは構造上より抽出されていて、調査地近隣の石垣等石垣に内側側の石垣等上から抽出された石がC1以上より調査時期に属する石垣がありこのことは組入ではないと考えたい。調査地の石垣は本統領の前の直下より抽出されておりその直下層にあたり石垣であるのでこれも組入したものでないと考えられる。



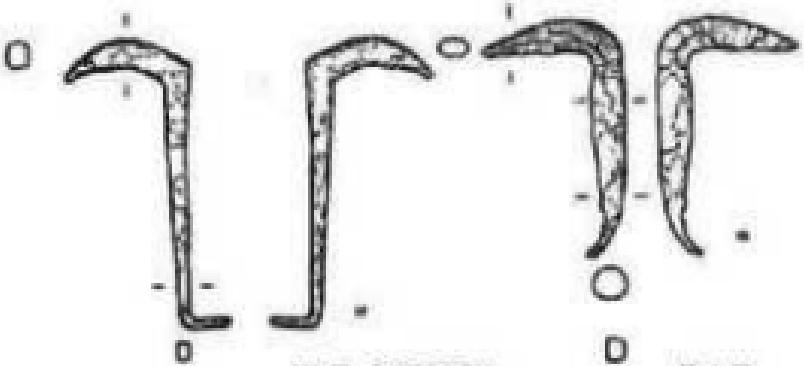
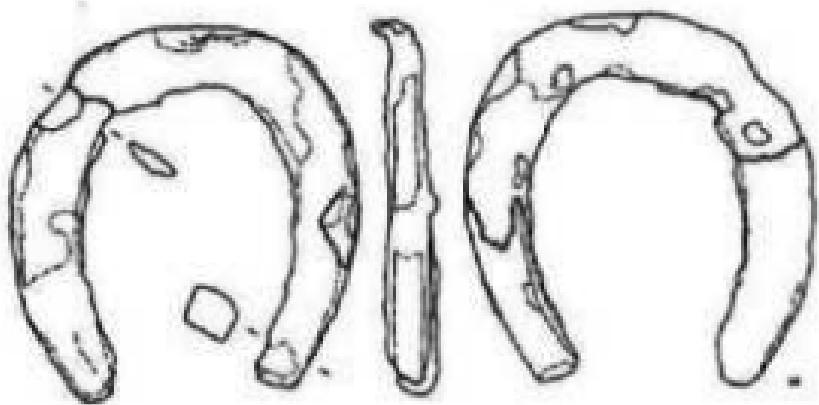
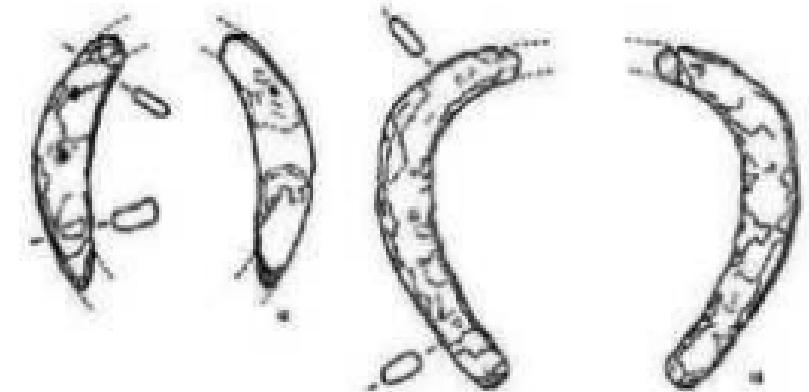
图版四 煤土石植物图

#### REFERENCES

细胞学、生物化学、遗传学、免疫学、微生物学、植物学、动物学、生态学、环境科学、土壤学、农业工程、农业经济管理等。

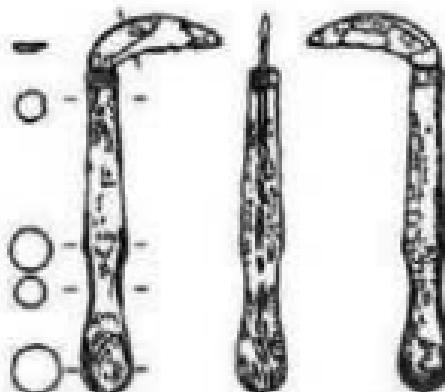
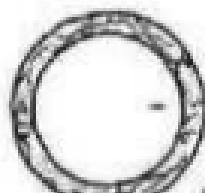
Barcodes:    

— 1 —

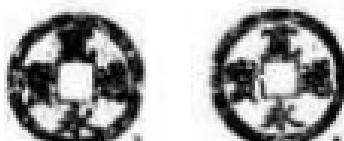
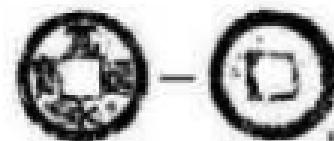
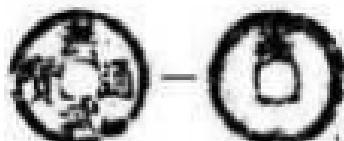


图版四 鳞翅目新种

图版四-1



圖版一 銅錢形器物



圖版二 銅錢形器物

浜田地区は大蔵より移入されたものである。更に淀屋が一棟ごと手間に移入された。本郷町内開拓地図からも北ヶ原7点が塗りつぶされた状態で一般出土している。(第7回)また菅文「淀」の字が確認されているが、本郷地区は全て菅文しなじであった。本地区では一般開拓の始めまでは半圓の使用は無難にしかけてあり、ふさそりは利用できなかったとのこと淀屋町はこの半圓を以て他の全員だと考えられる。これらの全員類は西口側に集中しており、上下関係なく混在して出土している。小糸堀御前は相模守野守藤原作守の時移入(相模守野守中より出土)したものと見る。淀屋と菅文の遺物その他の。

#### REFERENCES

Figure 1. A schematic diagram of the experimental setup.

くるみに白、かしぐるみ、ひめぐるみ、黒ぐるみの3種が確認された。他の果が一箇多く計測。種の茎も1箇出土した。これらの中には埋蔵以前に土に置かれていたものもある。トナの根状茎の部分だけが残っていた。

問題3の1)はかしてみると、2はひめてるみ、3は飛ぐるみ、4は風の気、5は夜景、6は船の音である。箇句問題、第3題から出題しているが、この題から作成している箇句題。本稿と問題題のものであるとは限らない。今後の問題題において問題に反対しなくてはならない。

# 第V章 プラント・オバール分析結果

## 土壤分析法

### 1. はじめに

この調査は、プラント・オバール分析において、農業地盤（中性地盤）における耕作層の検査を試みたものである。

### 2. 試料

1960年7月3日に現場調査を行った。調査地点は、山1～山2の交差点である（図2）。試料は、各耕作地の土壤表面において各場ごとに約10cmの深度で採取した。試料採取には、直径25mmの植土管およびガラス管等を用いた。試料数は計46点である。

なお、場名は各場点において標示の変化ごとに付けた番号であり、地名の付記は省略をしたものではない。

### 3. 分析法

プラント・オバールの抽出と定量は、「プラント・オバール定量分析法」（農研、1959）をもとに、次の手順を行った。

- (1) 土壤上の被覆 (100°C・2時間)、恒温窯乾燥
- (2) 被覆土約1.0gを採取、ガラスビーズ抽出 (被覆約0.5cm、約0.02kg)
- 被覆子分級試験により1万分の1の精度で評定
- (3) 被覆子分級試験による粗有機物抽出
- (4) 過濾液による分離 (1000ml・恒温10°C・50分間)
- (5) 滤液による懸濁液 (5ml以下) 抽出、洗浄
- (6) 被覆液 (オイキット) 中に分離、プレーパーテー作成
- (7) 検査・計算

同式は、植物細胞の液体に由来するプラント・オバール (以下、プラント・オバールと略す) を最も効率的とし、経済的の観点から実施して行った。計算は、ガラスビーズ抽出が100以上になるまで行った。これはほぼプレーパーテー1枚分の精度に相当する。被覆1枚あたりのガラスビーズ抽出に、測定されたプラント・オバールとガラスビーズ抽出の比率をかけて、被覆1枚中のプラント・オバール量を求めた。

また、この間に被覆の粗有機と各種物の純度抽出 (植物細胞抽出物) 約あたりの粗有機質量、濃度：被覆1枚をかけて、被覆表面で被覆1枚あたりの粗有機生重量を算出した。被覆表面は、イギリス標準、シン製造ヨシ、タケ高野はヨキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.34 (被覆は1.02)、4.31、6.63である (村山・農研、1959)。

#### 4. 分析結果

プラント・オペール分析の結果を表1および図4、図5に示す。なお、操作部の操作および装置が目的であるため、判定および結果は、イネ、タシ葉、タケ葉料、ウシクチ芋（ススキキサギなどが含まれる）、牛乳（ミルなどが含まれる）の主要なる分類別に整理した。特に各分類別の細胞壁率を示す。

#### 5. 考察

##### (1) 横作の可塑性について

本研究（操作部）の横作吟醸度を行う場合、一般にイネのプラント・オペールが認定1段以上あたるか上そら2段以上と高い密度で抽出された場合に、そこで操作が行われていた可塑性が高いと判断している。また、その際にはプラント・オペール密度のピークが認められれば、上層から個別の中ものが混入した均一性は考えにくくなり、その際で操作が行われていた可塑性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各種点ごとに操作の可塑性について検討を行った。

##### ① 極1地点

極1地点では、1～4層について分析を行った。その結果、1～4層においてイネのプラント・オペールが検出された。このうち、1層（底面土）ではプラント・オペール密度が約7,000個／mlと非常に高い値である。これは調査時点の横作が最高であることを示唆する。また、2層についても比較的最近の本研究操作に由来するものと考えられる。3層と4層では、密度が約3,000個／ml以上と非常に低い値である。したがって、これらの層で操作が行われていた可塑性は極めて高いと考えられる。

##### ② 極2地点

極2地点では、2～4層について分析を行った。その結果、2層と3層からイネのプラント・オペールが検出された。密度は7,000～8,500個／mlと高い値であることから、これらの層で操作が行われていた可塑性は高いと考えられる。

##### ③ 極3地点

極3地点では、1～7層について分析を行った。その結果、全ての試料からイネのプラント・オペールが検出された。このうち、1層（底面土）および2層で検出されたプラント・オペールは、個数もしくは比較的最近の本研究操作に由来するものと考えられる。3層、4層、5層、7層では密度がいずれも5,000個／ml以上と高い値であり、6層や7層では初期なピークが認められた。したがって、これらの層で操作が行われていた可塑性は高いと考えられる。8層では、密度が約1,700～2,500個／mlと比較的低い値であることから操作の可塑性は考えられるものの、上層や地表からの混入の危険性も否定できない。

#### ④ 4号地点

4号地点では、3層と4層について分析を行った。その結果、両層からイネのプランツ・オーパールが検出された。このうち3層では密度が12,000個／m<sup>3</sup>以上と極めて高く、4層でも密度が7,000個／m<sup>3</sup>以上と高い値である。したがって、これらの層で耕作が行われた可能性が高いと考えられる。

#### ⑤ 5号地点

5号地点では、3～5層について分析を行った。その結果、全ての試料からイネのプランツ・オーパールが検出された。このうち、4層上部では密度が9,000個／m<sup>3</sup>と高い値である。両層を比べて確認された。したがって、両層で耕作が行われていた可能性は高いと考えられる。3層と5層では密度が2,000個／m<sup>3</sup>以下と比較的低い値であることから耕作の可能性はほとんどないものの、上層などからの流入の危険性も否定できない。

#### ⑥ 6号地点

6号地点では、3層と4層について分析を行った。その結果、3層からイネのプランツ・オーパールが検出されたが密度が12,000個／m<sup>3</sup>と比較的高い値である。したがって、両層で耕作が行われていた可能性は考えられるものの、上層などからの流入の危険性も否定できない。

#### ⑦ 7号地点

7号地点では、1～6層について分析を行った。その結果、1～4層でイネのプランツ・オーパールが検出された。このうち、1層および2層で検出されたプランツ・オーパールは、密度もしくは比較的最近の水田耕作に由来するものと考えられる。3層と4層では密度が6,000個／m<sup>3</sup>以上と高い値である。したがって、これらの層で耕作が行われていた可能性は高いと考えられる。

#### ⑧ 8号地点

8号地点では、2～4層について分析を行った。その結果、2層と3層上部からイネのプランツ・オーパールが検出された。このうち、2層では、密度が12,000個／m<sup>3</sup>と高い値である。したがって、両層で耕作が行われていた可能性は高いと考えられる。3層上部では密度が1,000個／m<sup>3</sup>と低い値であることから耕作の可能性は考えられるものの、上層などからの流入の危険性も否定できない。

### (2) 土壌構造推定(説明書)

ホザナなどのアケモ科植物は比較的高い土壌条件のところに生育し、ヨシは比較的低い土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土壌の堆積性質(熟度)を推定することができる。

本調査では、全体的にヨシが優勢であり、アケモ科は比較的小量である。特に、イネの出現率があまりイネの減少する層中ではヨシが圧倒的に優勢している。このことから、調査区

一種は操作の開始以前に起おむねタシ風が発達する場所帯であったものと考えられ、そこを開拓して本日が造成されたものと想定される。また、イネの出現以後も依然としてタシ風が多く見られることから、本耕種風などとしてタシ風が生育していた可能性も考えられる。

#### ⑨. まとめ

以上のように、No.1地点の3層、4層、No.2地点の2層、No.3地点の3層、4層、5層、7層、No.4地点の3層、4層、No.5地点の4層、No.7地点の3層、4層の各層ではイネのプラント・オーバールが多量に検出され、これらの層に操作跡が確認されている可能性が高いと判断された。

#### 【参考文献】

- 松山真二・藤原忠志 1987 丹波市喜山地区遺跡におけるプラント・オーバール分析。  
藤山・吉澤尚樹一、丹波市遺跡調査会報告、第10集、231-238。
- 藤原忠志 1976 プラント・オーバール分析法の基礎的研究(1)  
—穀糧イネ科栽培植物の性質評価と電気分野法—。  
考古学と自然科学、9：15-28。
- 藤原忠志 1979 プラント・オーバール分析法の基礎的研究(2)  
—穀糧、稲作遺跡(複合式)土壤および根糸、茎葉遺跡  
(物生時代) 本日におけるイネ (O. sativa L.) 生育範囲の  
検定—。  
考古学と自然科学、12：39-45。
- 藤原忠志・松山真二 1984 プラント・オーバール分析法の基礎的研究(3)  
—プラント・オーバール分析による水田地の検定—。  
考古学と自然科学、17：73-85。

## ■1 フラント・アボート法の問題

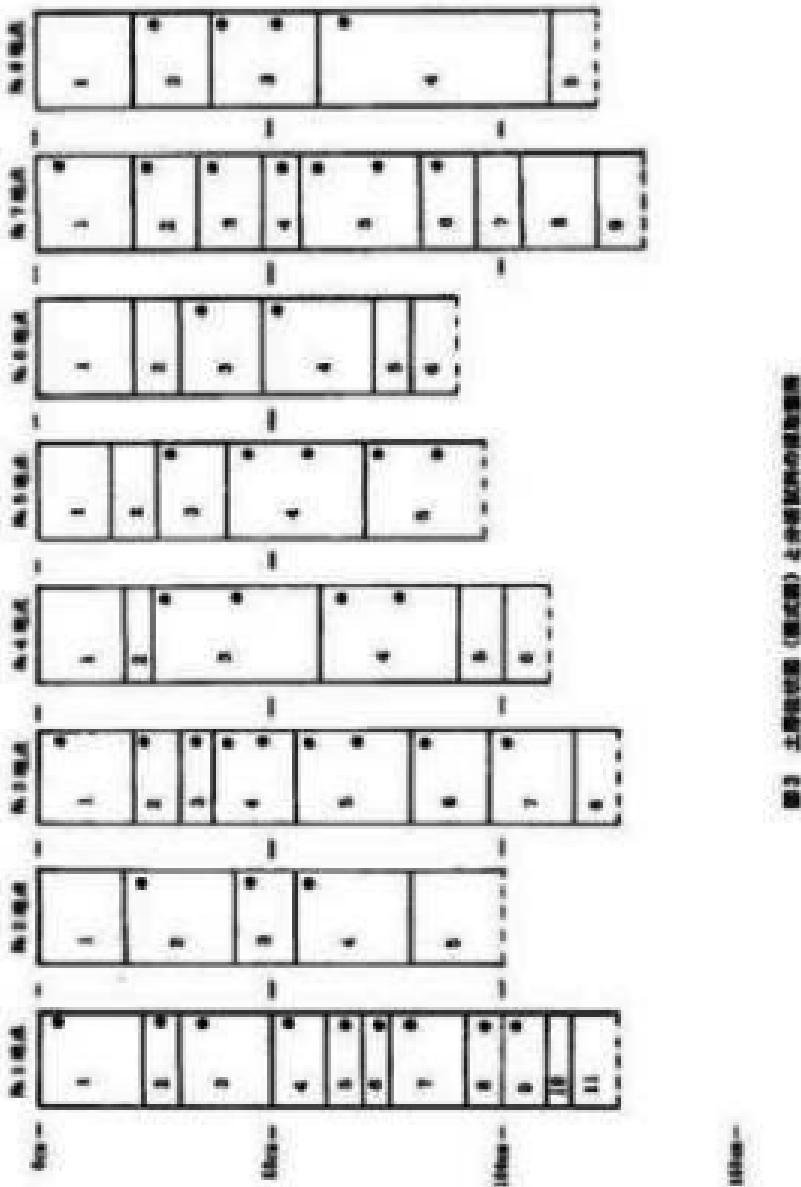
Annual Summary of Crop Production											
Year 2000											
Category	Crop Type	Area (ha)	Yield (t/ha)	Production (t)		Harvested Area (ha)		Production (t)		Harvested Area (ha)	
				Actual	Target	Actual	Target	Actual	Target	Actual	Target
1	Wheat	1000	4.5	4500	4600	1000	1000	4500	4600	1000	1000
2	Rice	500	3.0	1500	1500	500	500	1500	1500	500	500
3	Soybean	300	1.8	540	540	300	300	540	540	300	300
4	Corn	800	2.0	1600	1600	800	800	1600	1600	800	800
5	Maize	1200	1.5	1800	1800	1200	1200	1800	1800	1200	1200
6	Peanut	200	1.0	200	200	200	200	200	200	200	200
7	Barley	400	3.5	1400	1400	400	400	1400	1400	400	400
8	Oats	300	2.5	750	750	300	300	750	750	300	300
9	Oilseed Rape	150	1.2	180	180	150	150	180	180	150	150
10	Linseed	100	1.0	100	100	100	100	100	100	100	100
11	Flax	50	0.8	40	40	50	50	40	40	50	50
12	Mustard	20	0.5	10	10	20	20	10	10	20	20
13	Alfalfa	100	0.5	50	50	100	100	50	50	100	100
14	Hay	200	0.5	100	100	200	200	100	100	200	200
15	Grass	500	0.5	250	250	500	500	250	250	500	500
16	Total	4000	-	-	-	4000	-	4000	-	4000	-

## No. 7000

ITEM	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000
1.	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000
2.	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000

## No. 7000

ITEM	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000
1.	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000



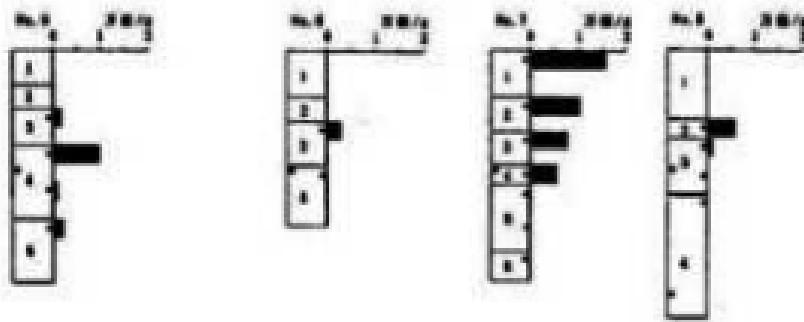
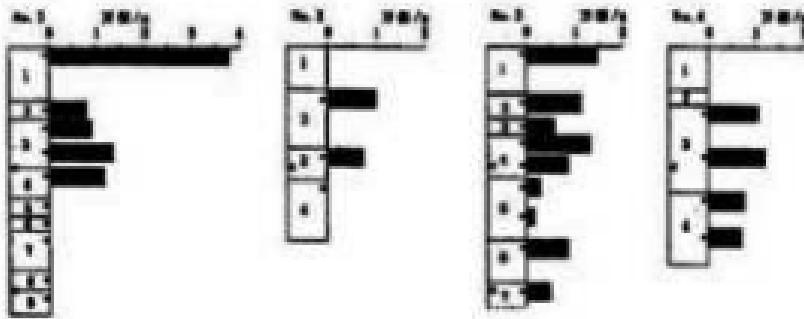
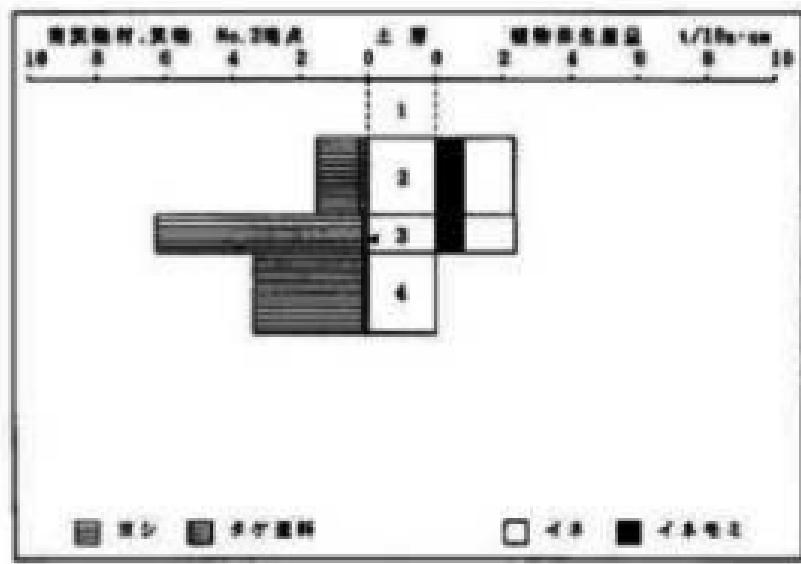
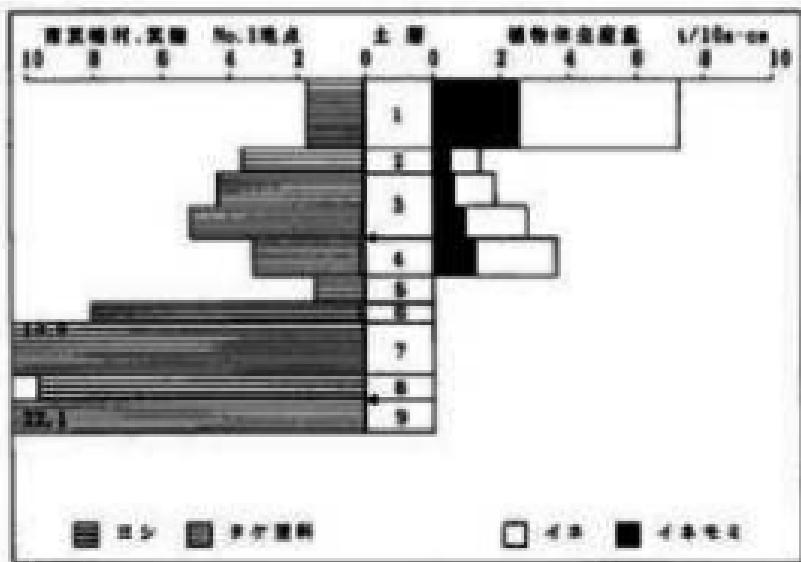
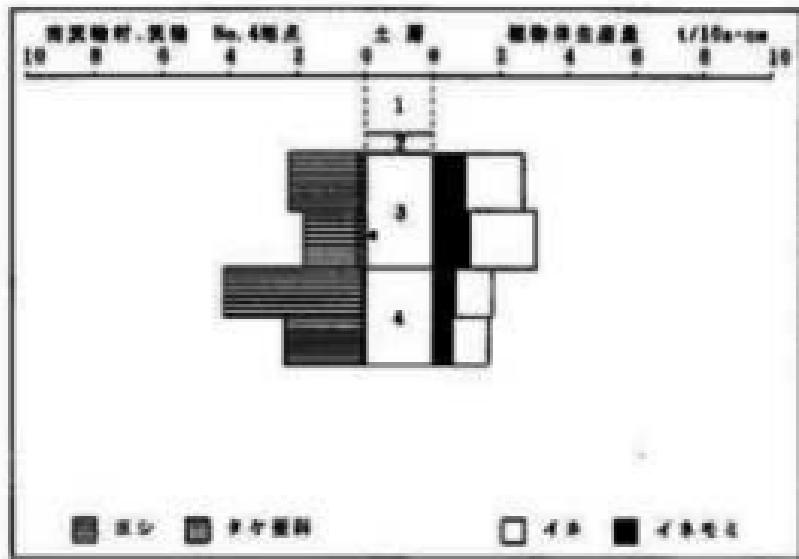
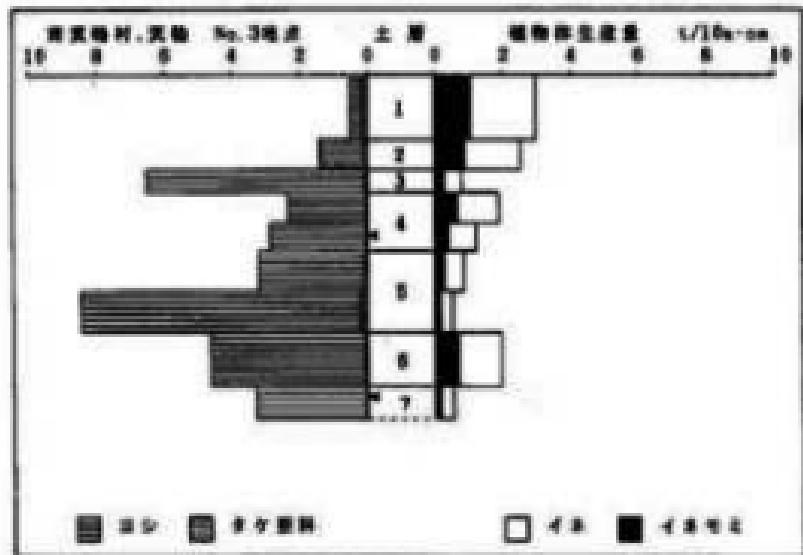


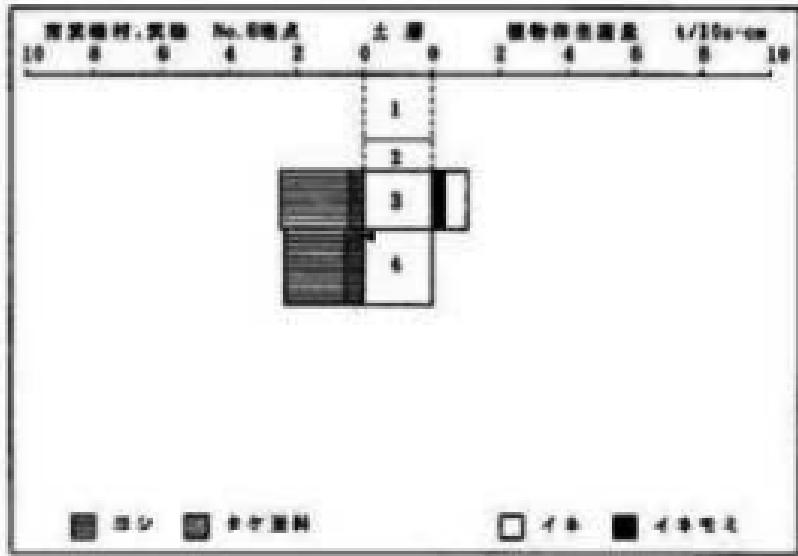
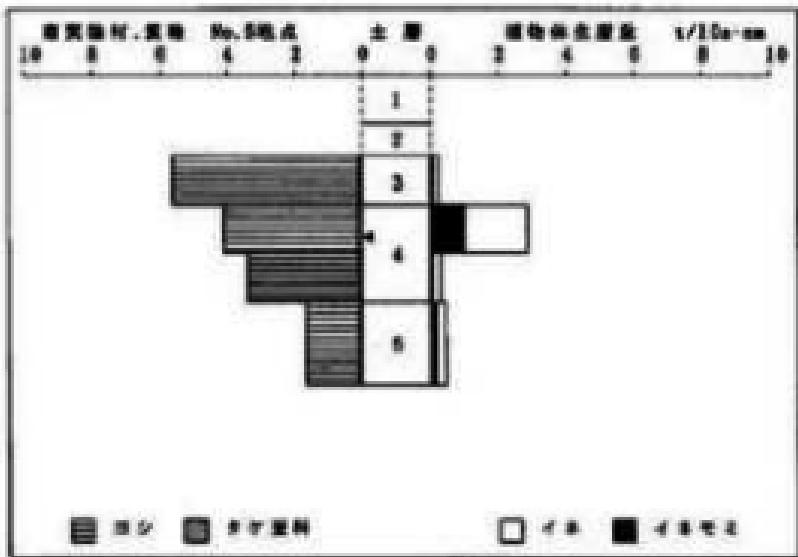
図4 イネのプラント・オバールの選出実験

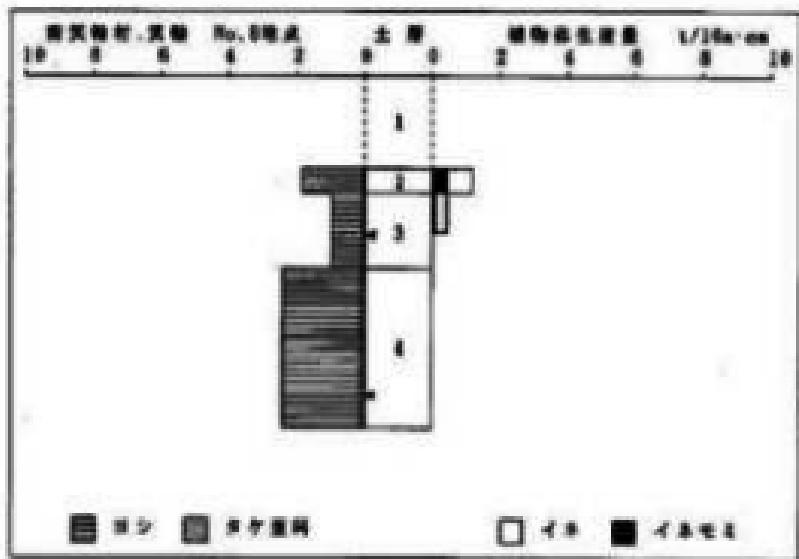
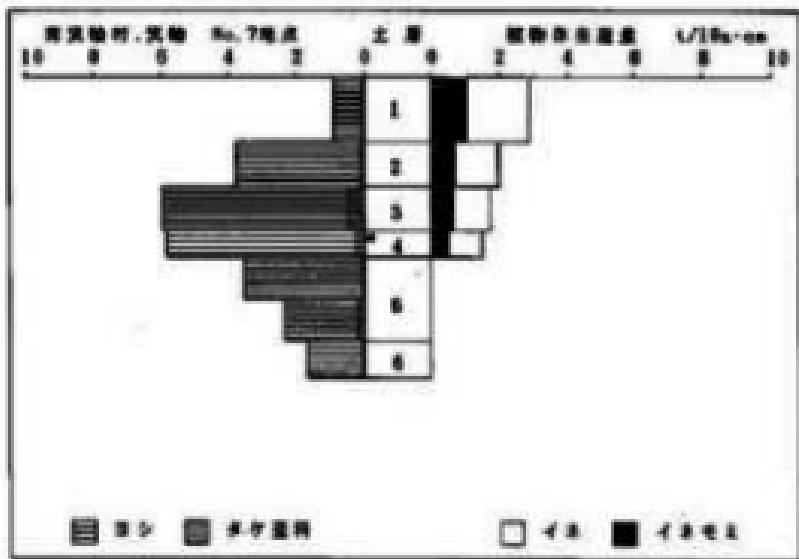
(左) リード・リムーバル、(右) リード・リムーバル



### ■ 5. 茎も木植物の種子生産量と育苗





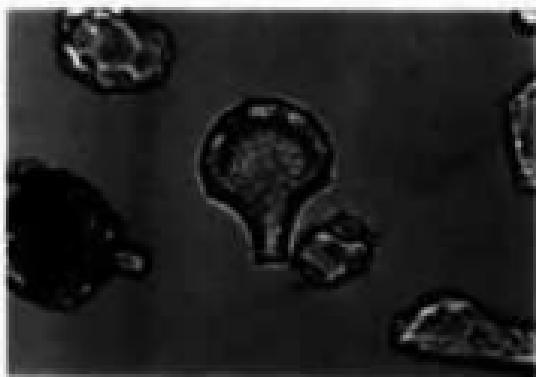


## 実物画像から抽出されたプラント・オペールの感想類半度

実感率はすべて40%

No.	分類	度数	実感度
1	イタ	No.4	3-1
2	イタ	No.3	4-1
3	イタ	No.3	1
4	イタの感想(他の感度相違)	No.2	1
5	ヨシ風	No.3	1
6	シバ風	No.4	3-1
7	タケ風等	No.4	3-1
8	ウシタツサ(スヌヌ半度など)	No.3	4-1
9	イタ風の感想相違	No.3	4-1

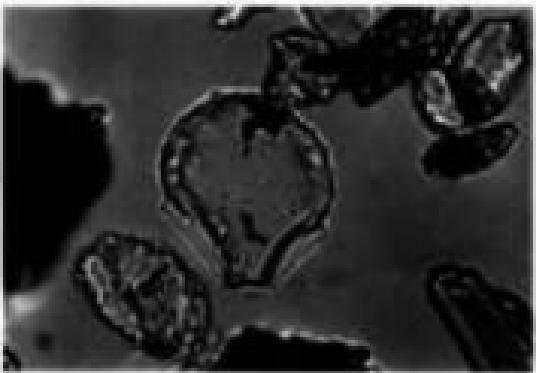
No. 1



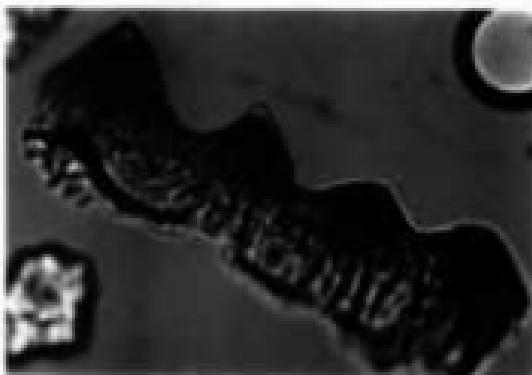
No. 2



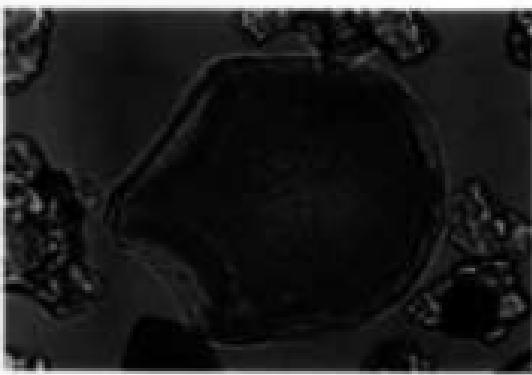
No. 3



No. 4

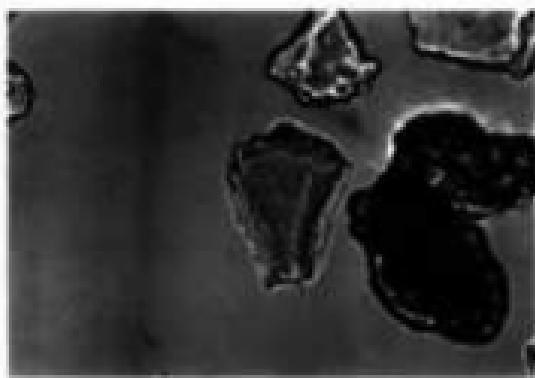


No. 5



No. 6

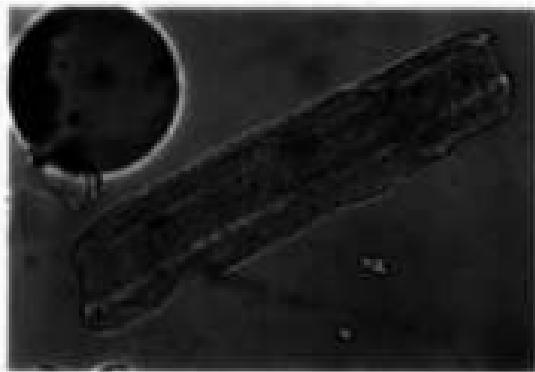




No. 7



No. 8



No. 9

## 第六章 総 括

調査地の調査は調査地と西高麗川の双方でそれぞれ調査が行われて来たが、総合的な調査であり、今回の調査は実地調査における最大規模の調査であった。それ故、新たに確認されたものが多く、古よりみた遺物の量も多かった。今回の調査地が後背湿地と地表地帯地がよく土壤の堆積状態が良好であったことなどから、実地調査における水田耕作の史跡などについて豊かな事実と認識を加えることができたことは、調査実績調査というあわただしく行われた中での最大の収穫といえよう。実地調査の問題である層の層幅の時代確定が問題である。各時代の水田耕作の全過程が検出されていないところにある。それには表面の技術的な問題として取り組んで行く必要がある。

今回の調査では地盤を考慮の基にいわる耕種方法、耕作に既を行な込み茎を實施させる方針等、水田耕作の遺構の様式が実地調査内ではほどのことである。全國的に見られる水田耕作の耕種技術が伊賀谷にも伝わってきたことを推定する上でひとつの資料となつたが、これらの遺構の時代を明確化することはできなかつた。

調査地が後背湿地とあっても実地調査は実地川の河岸を境に置いており、実地川によりできたよどみの部分に土壤が堆積していったために場に大きなうねりが見られ、堆積の最も込んだ下層以上の土壤の堆積が見られる部分に遺構、遺物が残っていることが明らかとなつた。これ等時代を遡るほど遺構となってくるように思われる。中間地帯に屬するではあるが、各時代の遺物を含む地盤が技術的確定しており、層による段階とその時代的判斷ができる。遺物は昭和37年から行われた土地改良時に遺物の堆積、廃棄物を切り取し、土をのみ取ただけであつたので第1層から3層はその時代の断土である。第3層は廃棄はあるが遺物から見てかなりの時代の物をも、中世から近代とすることができる。第4層は、上層からの遺物の混入も少なく平安後醍醐から鎌倉時代の季節と見ることができる。第5層から層は下層より遺物が少く、名古屋城から鎌倉時代の季節と見ることができる。第6層から層は下層より遺物が少く、平安後醍醐土器が出土しているので後生時代後醍醐から鎌倉時代に止まるできる。アントオバール分析の調査では、土壤の堆積状況の上いところでは測定なビーグルがみとめられ第7層では第7層下層もアントオバールを抽出し、科学的にもこの層で古くから耕作が行われていたことが証明された。先に述べた、古い時代になるほど水田の耕作が進むるというのとは、名勝の広がりが農業者へで河川網に連絡に繋いでおり、そこには耕作地の後背湿地に代表される失墾・被などによる人為的な水田耕作が見られないことから、歴史的には古き農耕地での耕作で初步的な耕作歴が確定できる。つまり收穫量を増やすための耕作技術が最初、この地にその程度“水”と河に入つて来たのが問題となる。これは実地調査がもつ山地農耕技術として種群を知らうえて1つの面白になると考える。今回の調査だけでは判断することはできない。

ので、今後の調査では出土物の表面磨耗で過去に調査をする必要がある。

出土した遺物についてであるが、調査面積の広さに比例してその量も過去の実験調査の調査の中でも一番のものとなり、種々なものが出土しておらずとも土器・陶器類は出土の実験調査とこの他の調査分野も一つの資料となった。また、1990年から1991年までの一年が実験調査しかかも得なかった遺物が多数出土したことである。これほど既時この地に有力者がいたことを物語るが、文献などでもこの時期のこと記録っきりしておらず、今後の調査研究の参考になることである。また陶器類の発掘により当時の経済活動、物品の流通規則など過去の生活様相を窺うことができた。

しかし、実験調査は未開墾地であることを考える時、疑問が生れる。石遺物が最も多く集中し、土器・陶器類が散在していること。石遺物は有力者の使用するものが多かったこと。東西山が古い時の本田山であれども、調査面積は南北200mのところに実験的田中耕作がある。この耕作は既時の施設地に位置していた。昔からこの施設地から半圓周弧の東西延長について出土。または植木をして植えられる。昭和時代の土地改良事業においてもトヨタ式で土を運んできたという。平成元年実験で田や施設を調査したが、遺構・遺物が少しある歩行があった。(報告書)未開墾地から出土した遺物の一部は運ばれてきたものと考えたい。そこで直接実験地が使用したものでないと疑問が解ける。

実験調査が学会に採用されて以来の中、調査面積縮小、調査者の努力により少しだいにその範囲が縮らなくなってきてている。しかし、いまだその影響めどとんどなかつてないのが現状である。しかし、実験調査内における実験は年とともに複数し、調査の度につづれない範囲にまでいる。過去の調査を終て百十の連絡を今後、いかにして実験し後悔に悩んでいくかを調査者に問題に今考えていくべきであろう。



また今回の調査で取り扱った、既に知った本田村(本郷)と昭和初期の荒原部分を中心とする実験した近畿の行動により取り出し調整できるようにもなれば、幸せである。ことに農作物育成、農業の歴史を見て、過去に続けてきた農業技術の歴史を見ることができるといふ宇宙に夢らせます。

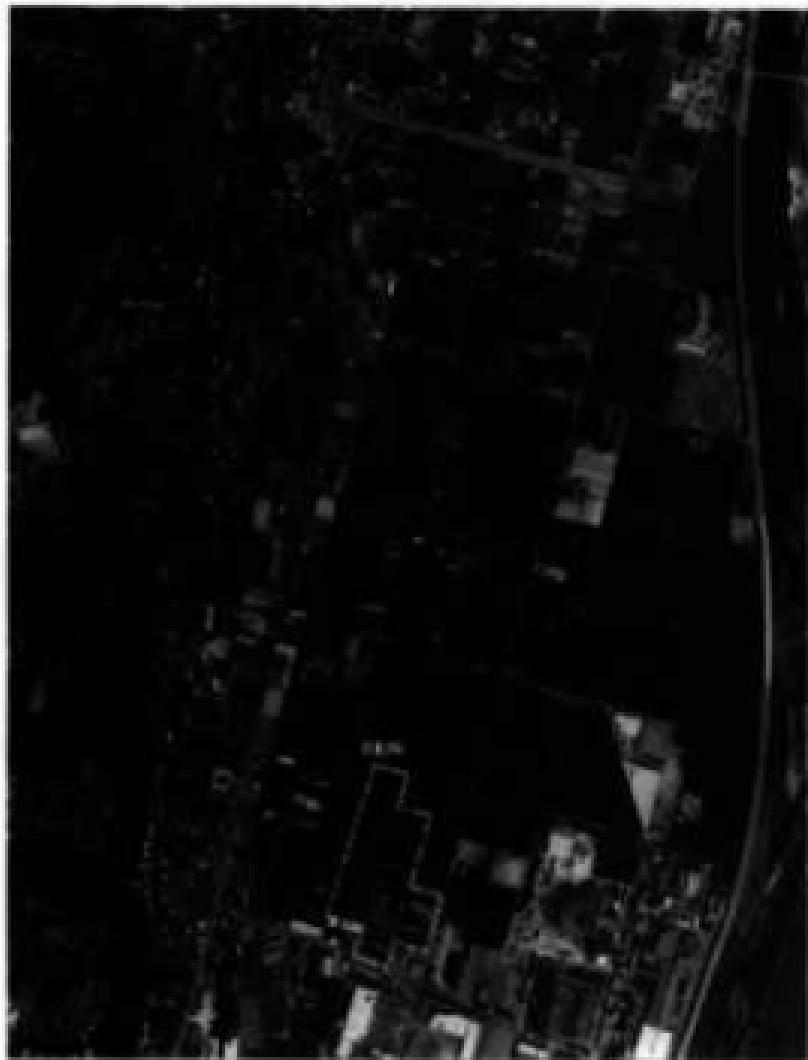
最後になりましたが農業界の方々、長い間調査にご協力、ご努力いただきました関係機関、関係者の方々、調査評議をしていただいた原丈を調査員丸山先生、小畠圭三、浜田調査方法の相談動画をいたいたいな大竹主事、平成以前の陶器類について丁寧にご教示いただいた調査センター浜田専門主事の方々に深く感謝し深く御礼申し上げます。

調査評議　本郷　農業

## 参考文献

- 1 芦原町教育委員会編「芦原郷史」第1巻
- 2 芦原町教育委員会編「芦原郷史」第2巻
- 3 芦原町教育委員会編「芦原郷史」第3巻
- 4 芦原町教育委員会編「芦原郷史」第4巻
- 5 芦原町教育委員会編「芦原郷史」第5巻
- 6 芦原町教育委員会編「芦原郷史」第6巻
- 7 芦原町教育委員会編「芦原郷史」第7巻
- 8 長野県教育委員会編「信濃川流域（信州・魚沼地域）」
- 9 長野県教育委員会編「信濃川流域」
- 10 長野県教育委員会編「信濃川」
- 11 長野県信濃川文化センター編「信濃エーネアカン遺跡」
- 12 中村建設協会編「信濃川上流域地質図」
- 13 田中謙輔 1993 「やきもの鑑定入門」
- 14 江原吉郎 1993 「日本やきものの入門」
- 15 野村恭徳文化財研究所 1986 「川合遺跡」
- 16 野村恭徳文化財研究所 1986 「鶴名遺跡」
- 17 野村恭徳文化財研究所 1986 「長野遺跡」
- 18 長野県教育委員会 1990 「信濃川流域遺跡（6）」
- 19 長野県史料館 1991 「長野県史」考古資料編下・信濃郡
- 20 長野県史料館 1991 「長野県史」信濃・信物
- 21 信濃町教育委員会編「信濃町史」上巻
- 22 信濃町教育委員会編「信濃町史」下巻
- 23 稲崎彰一監修 1976 「信濃の古陶」
- 24 加藤新九郎 1979 「信濃陶器大辞典」

# 図 版



1--8000

植物园植物标本图集



圖版2a



圖版2b



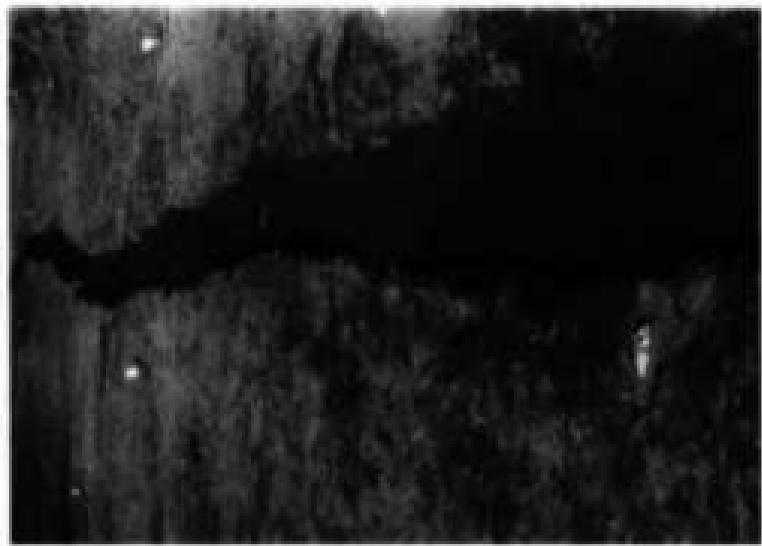
トランセクルA 土壌剖面



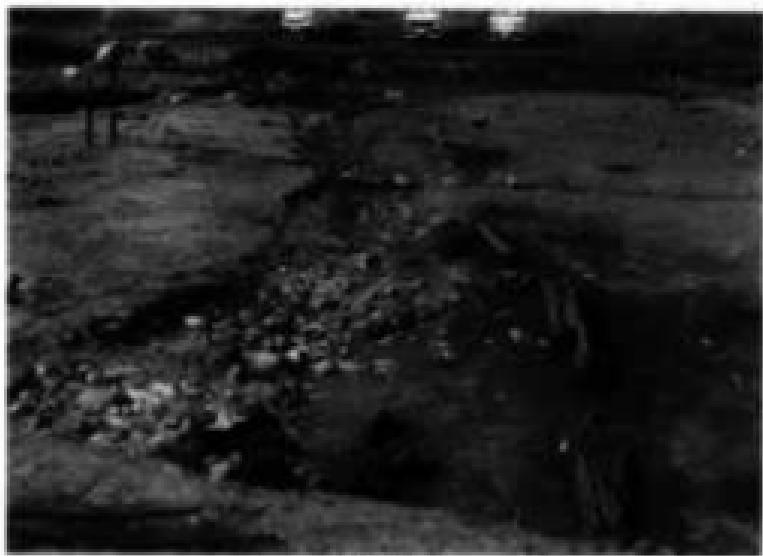
トランセクルB 土壌剖面



圖示這種 1 号



圖示這種 2 号



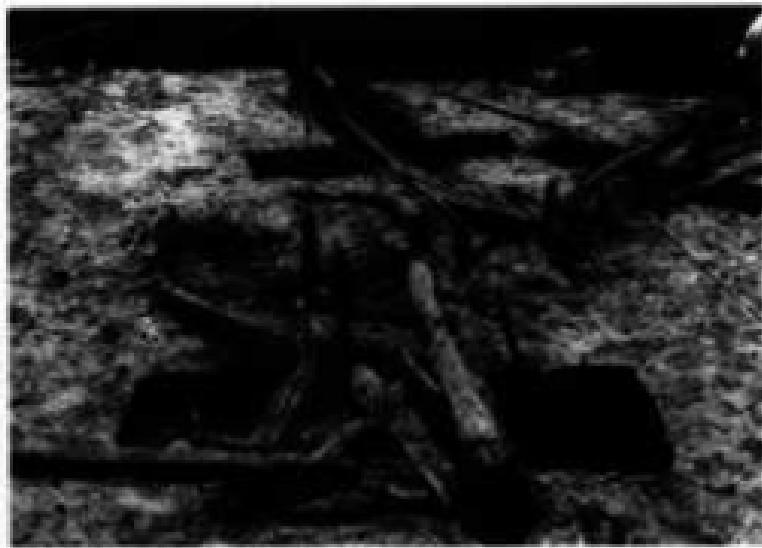
遺址遺物2号



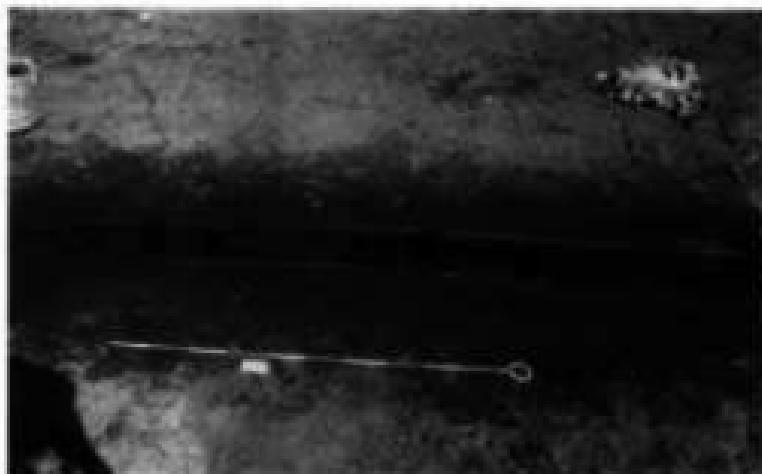
小西村遺物



1号纵切面



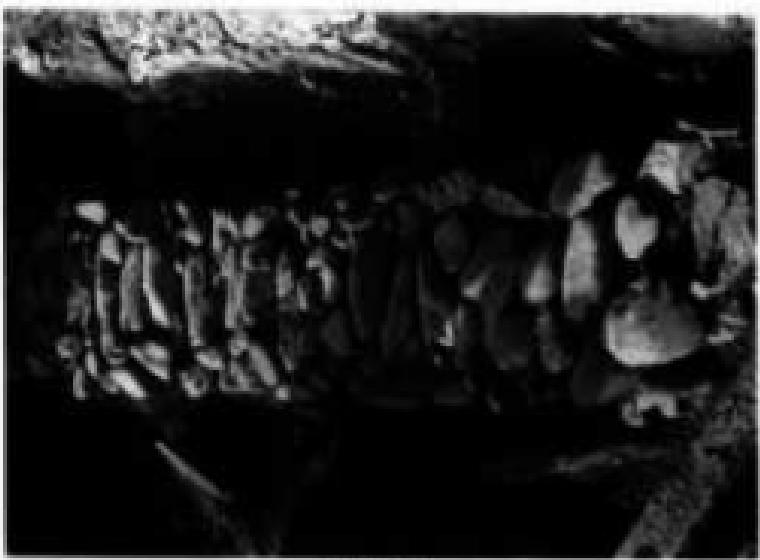
1号横切面



2 号钻孔



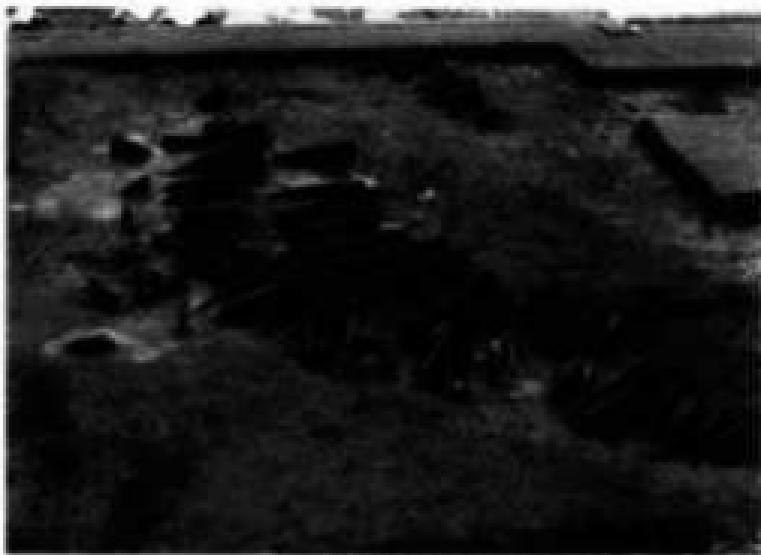
2 号钻孔的岩芯与视图



附錄圖版二



附錄圖版三

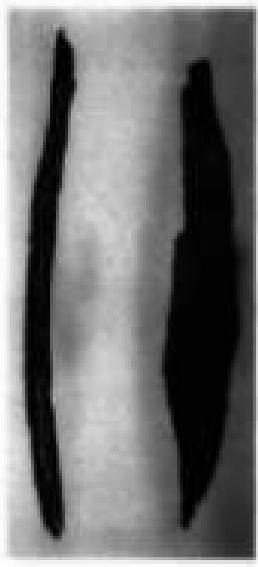
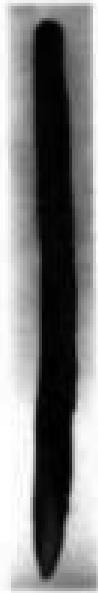
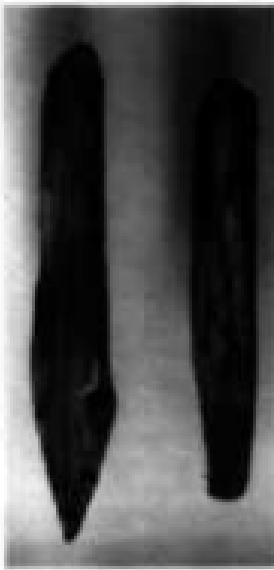
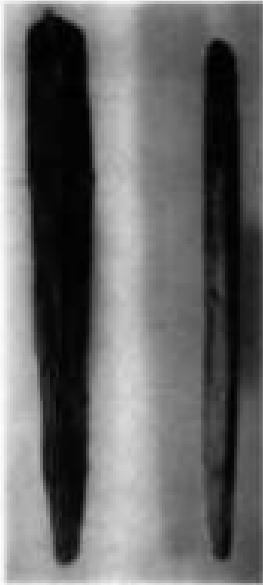
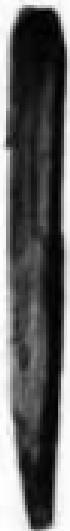


土壤的土壤

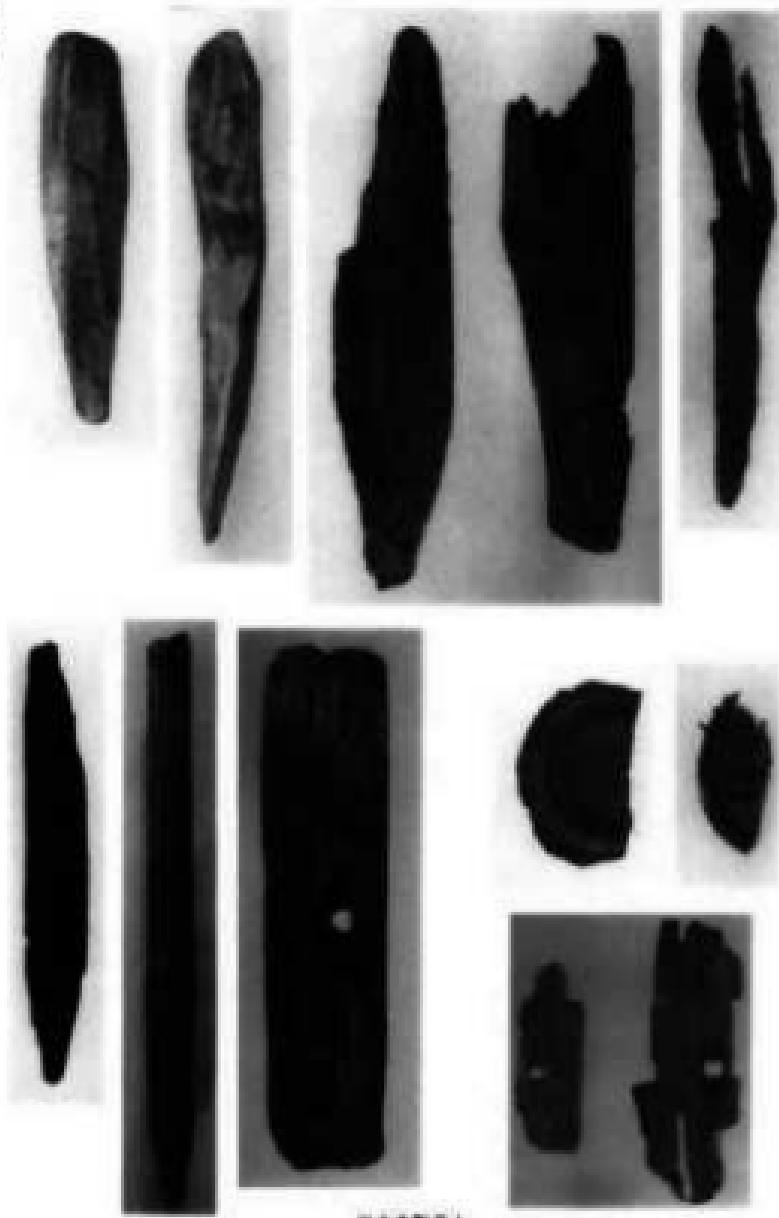


土壤的土壤

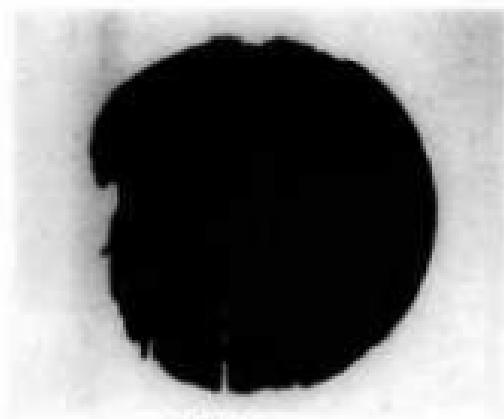
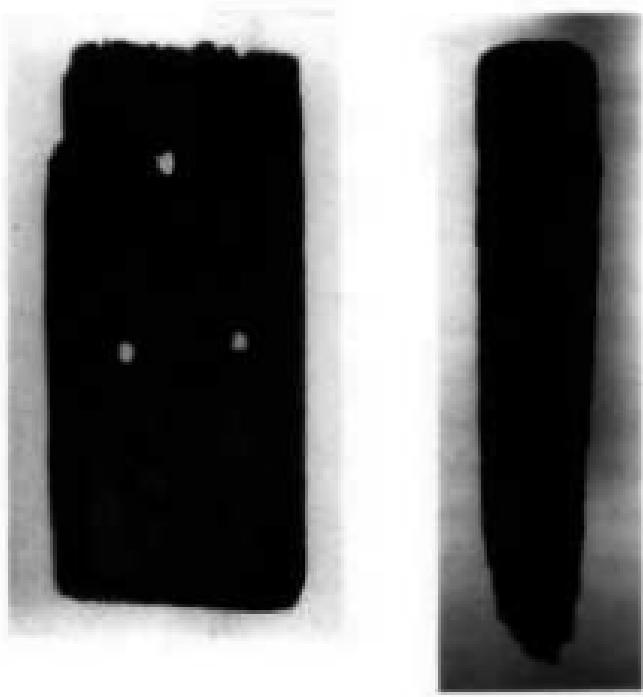
卷之十  
10



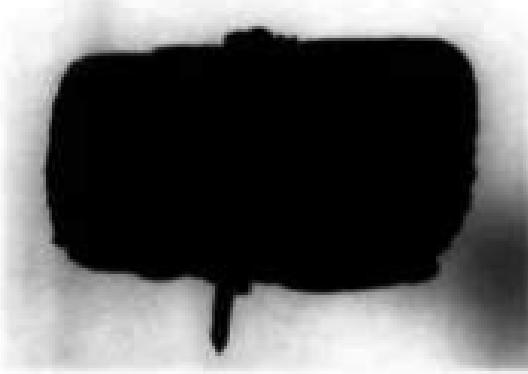
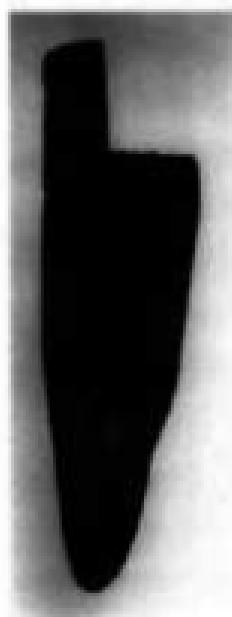
卷之十  
10



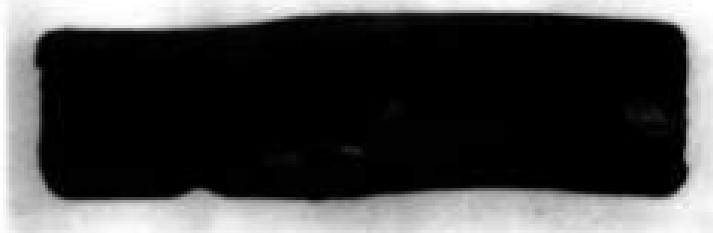
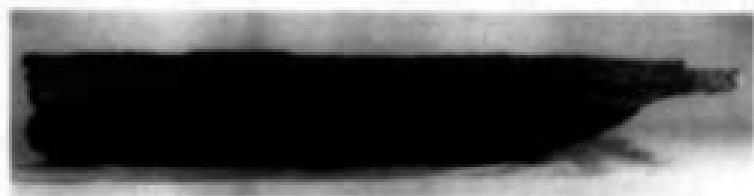
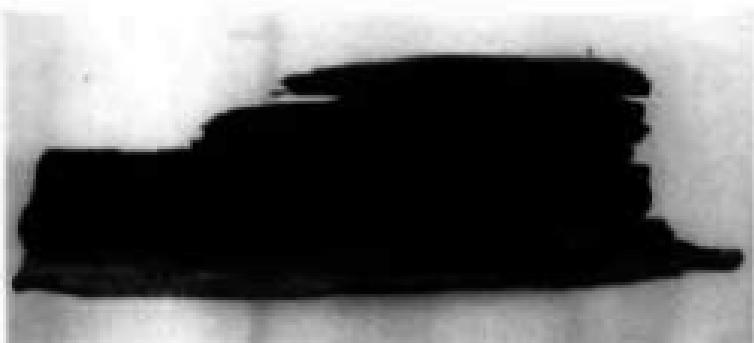
三三六物語



圖版12



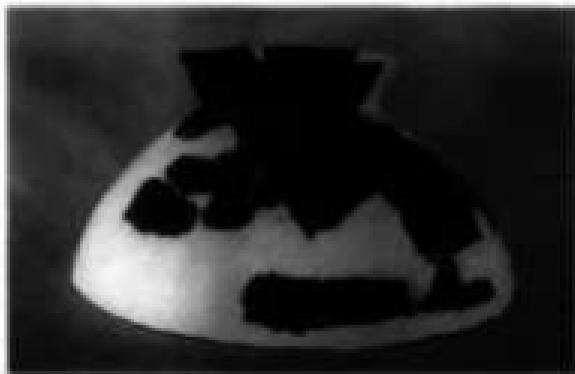
出土木器残片



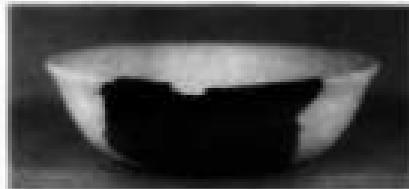
圖版十一



出土土器



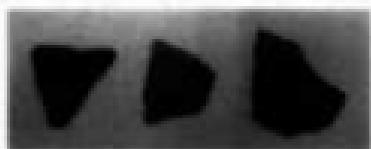
出土土器



出土陶器

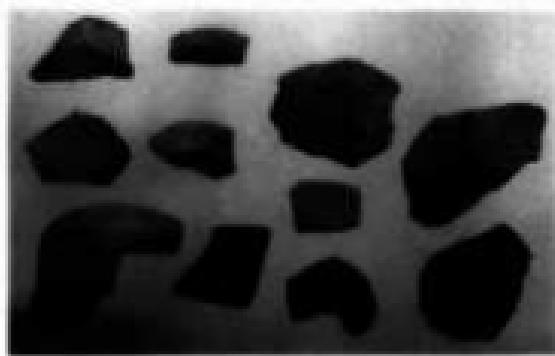
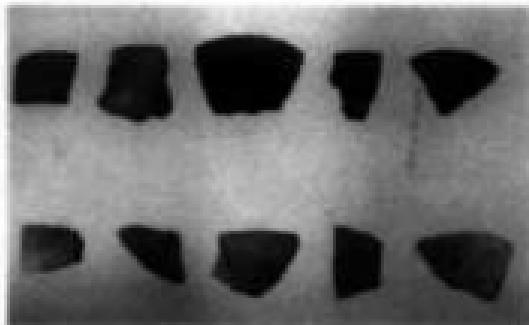


出土陶器



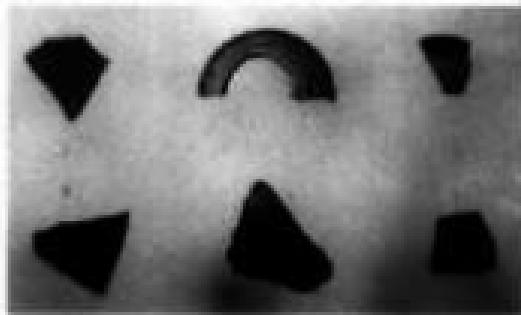
馬家窯文化土器

馬家窯文化陶器

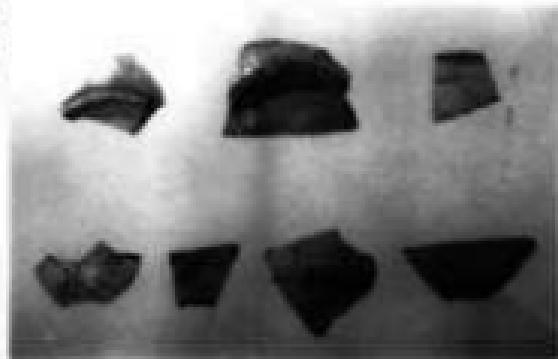


馬家窯文化土器

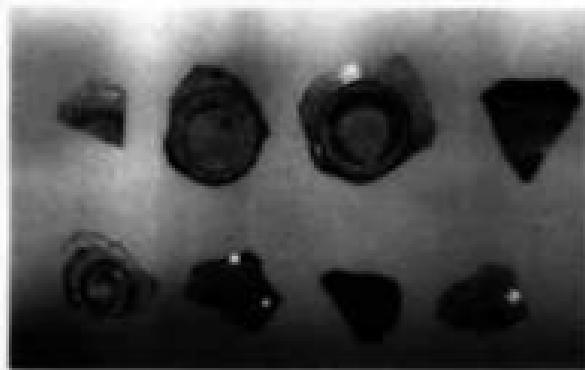
馬家窯文化



出土陶器 1

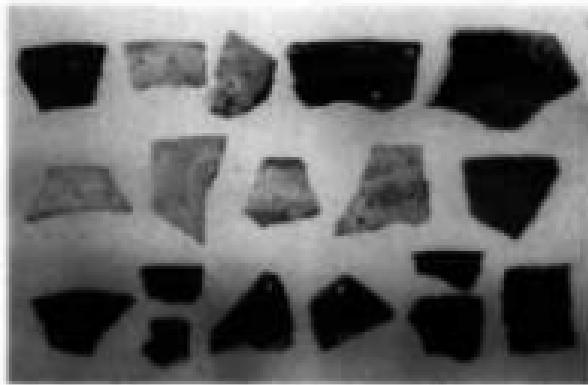


出土陶器 2



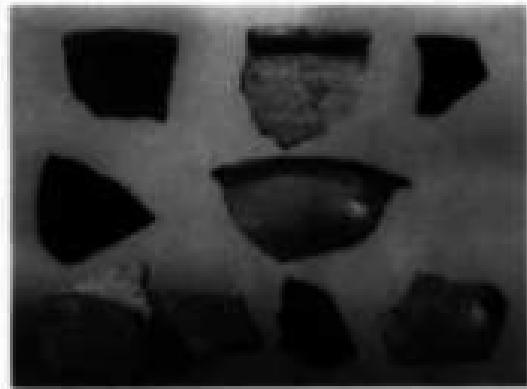
出土陶器 3



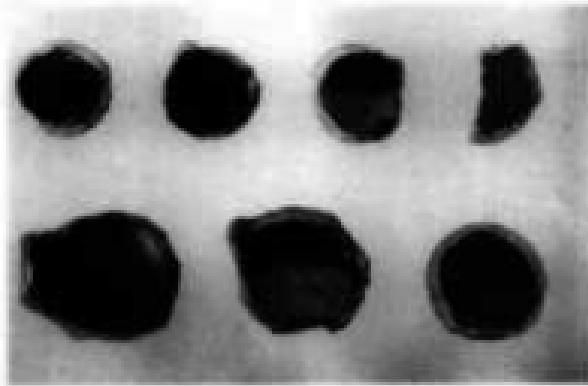


圖版 16-4

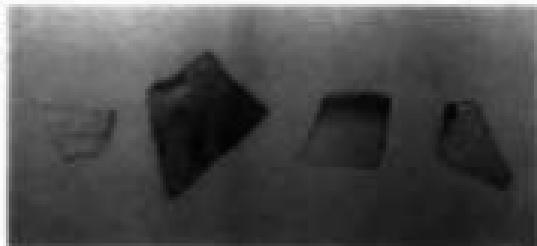
圖版 16-5



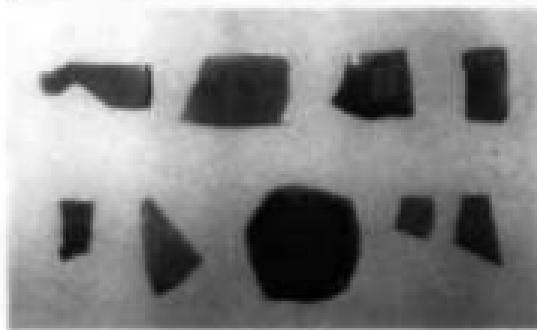
圖版 16-6



圖版 19



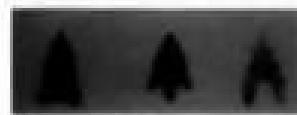
出土器物



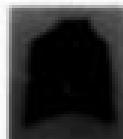
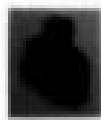
出土器物

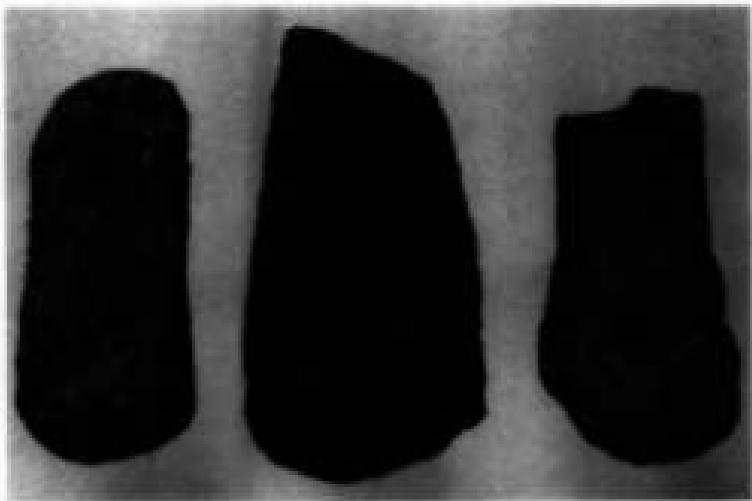


出土器物

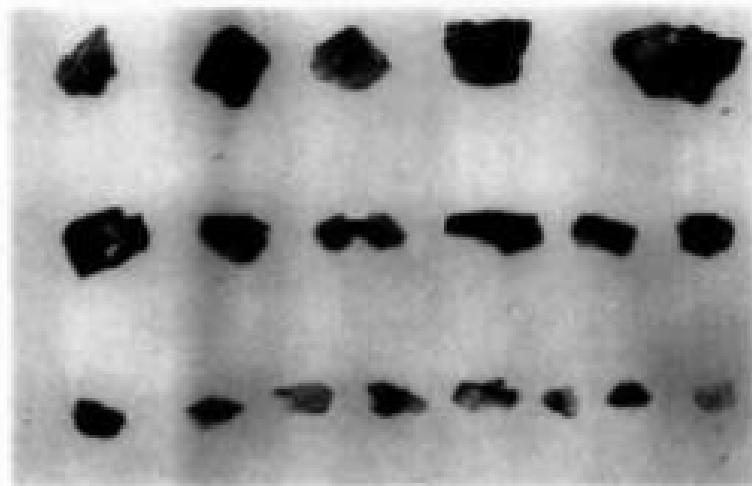


出土器物





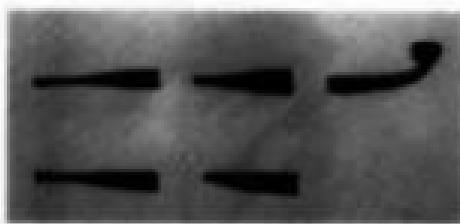
出土器物2



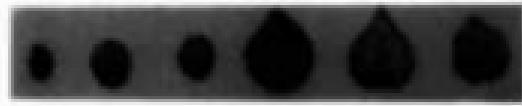
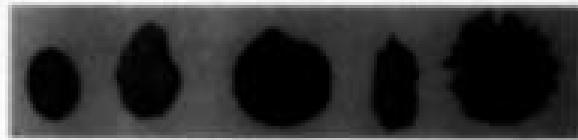
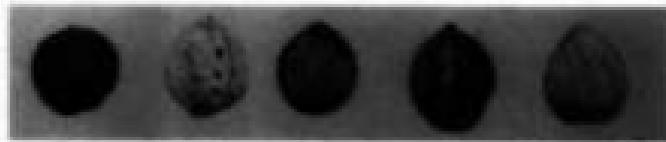
出土器物3



出土商周器物



出土商周器物



出土商周器物

## 箕輪遺跡

上伊那郡阿南町箕輪／井中町地區  
工事用挖掘成形機に伴う  
遺跡大規模発掘調査報告書

1993年3月 印刷

1993年3月 発行

発行所：長野県南信越村教育委員会

印刷所：伊那市 開小松記念印刷所

